黄菊白菊

南原幹雄



角川文庫

黄菊白菊

南原幹雄



な
10-24

黄菊白菊

南原幹雄

角川文庫 Ⓟ
520

ISBN4-04-163324-9
C0193 P520E 定価520円
（本体505円）
9784041633243
1910193005203

浅草で一、二を争う旅籠〈立田屋〉の女将・おきくは、ある日、すれ違う渡し船の向こうに、九年前の恋人、高之助の姿を見つけた。

放蕩がすぎて家を勘当されたまま行方知れずになっていた高之助との一瞬の再会は、おきくの心を揺さぶる。

しがない女中奉公の自分を後妻に迎えてくれた優しい夫と幸せに暮らすおきくであったが……（表題作）。

江戸の女たちが織りなす恋模様を描いた傑作時代小説集。

解説　宮部みゆき

角川文庫
南原幹雄作品集

- 御庭番十七家
- 天保悪の華(上)(下)
- 大奥十八景(上)(下)
- おんな忠臣蔵
- 御三家の犬たち(上)(下)
- 疾風来り去る(上)(下)
- 天地燃える(上)(中)(下)
- にっぽん好色英雄伝
- 吉原大尽舞
- 新選組情婦伝
- 情炎くノ一系図
- 情炎くノ一殺法
- 御三家の黄金(上)(下)
- 暗殺剣(上)(下)
- 吉原繁昌記
- 黄菊白菊

カバー　暁印刷

●南原幹雄（なんばら　みきお）
一九三八年、東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。『女絵地獄』で小説現代新人賞、『闇と影の百年戦争』で吉川英治文学新人賞を受賞。代表作に『北の黙示録』『暗殺剣』『闇の麝香猫』『謀将　直江兼続』などがある。

カバー　沢田重隆

黄菊白菊

南原幹雄

角川文庫 9324

黄菊白菊
南原幹雄
角川文庫
9324

黄菊白菊

南原幹雄

角川文庫 9324

目次

小江戸の桜

一

お城の濠端の桜が散りかけている。もうひと雨かひと風くれば、大半が散りそうである。

やよいの家のある連雀町からちょっと歩けば、川越城の桜が見える。生まれていらい毎年見なれてきた桜だが、今年はそれを見るとこころぜわしい気持にかられてくる。

予定では、やよいと正之助との祝言はあと六日後にせまっている。予定どおり祝言をあげたとすれば、そのころはもう濠端の桜は葉桜になっているだろう。もし祝言をやめたとすれば、やよいは川越にはいないはずである。

それを選択する日日ももう幾日もない。

正之助との縁談は昨年秋にあって、結納は先月取りかわされた。なにしろ正之助が器量のぞみで、

「なにがなんでも大野屋の娘でなくちゃあ嫁にもらわない」

といったとかで、武蔵屋の主人夫婦が仲人に町名主を立てて嘆願にちかいかたちの縁談をもってきた。武蔵屋といえば城下で三代つづいている米屋で有数の物持ちである。やよいの家の大野屋も堅実な商いで暖簾をまもっている染物屋であるが、武蔵屋とくらべると、格式、身代の大きさとも比較にならない。

やよいの両親は一も二もなく賛成した。両親のよろこぶ姿を見て、やよいもなんとなく

こころがうごいた。

（武蔵屋ならばたいしたもの）

というかんがえにかたむいたのだ。

とついでいく武蔵屋はたしかにたいしたものだが、夫になるべき正之助にはあまりこころがうごかなかった。性格は温順で素直、質実ということだが、お世辞にも美男とはいえない。気がきいているところがあるわけでないし、面白みもない。しいていえば嫌みのないところに多少好感をいだいた程度だった。

ともかく周囲がみんないい縁談だというので、やよいはついその雰囲気にのせられてしまった。今からかんがえてみれば、それが迂闊であった。とついでいくのは自分なのだから、もっと気持を整理してつきつめていくべきだったのだ。そうなる以前に、周囲が挨拶だの、打合わせだの、家族の顔見せなどをやっているうちに結納がおこなわれた。川越あたりでは結納を俗に〈たのみのしるし〉という。そのしるしが町人の分際にはややすぎた五荷五種であった。やよいは自分の家の座敷に斗樽十、昆布、鯣、塩鯛、串鮑、鰹節の五荷五種と紅白二領の小袖と帯がはこびこまれ、仰々しくかざられたのを見て、急に自分の祝言、嫁入りが目に見えてきた。それからかんがえこんでしまったのである。

「やよい、浮かぬ顔をしているが」

父の平兵衛がそういったが、やよいはいいわけもせずに自分の部屋にとじこもった。

やよいは生まれつき、自分の気持を人にいえぬような娘ではなかった。両親に可愛がら

れ、わがままにそだてられたので、自分のかんがえははっきりと口にする気性の勝った娘であった。それが娘のいちばん大事な嫁入りというときに、自分のかんがえもなく、周囲のすすめに乗せられてここまできてしまったことに愕然とするおもいだった。平兵衛や母のおそではそれを他家へとつぐ娘の感傷とでも勘ちがいしたようだ。

ひとたび自分の縁組に疑いをいだきだすと、それは日に日に大きくなっていった。このままの気持ではとても武蔵屋へ嫁にはいけないという気持になったのである。けれども家族や店中の者たちにお祝い気分が高まっていく中では、とてもやよいの口からそれをいいだせなかった。

「お姉さん、正之助さんのこと、好きではないんじゃないの」

濠端の桜が散りかけたころ、妹のまり江がとつぜんそういいかけた。

（そんなことないわよ）

といいかけて、

「まり江にはわたしの気持わかるようね」

やよいは率直にみとめた。みとめたことでこのところの気持の迷いと気鬱さがややはれた。

「あたしは前からわかっていたわ。正之助さんはお姉さんが好きになるような男じゃないもの。それにお姉さん子供のころから江戸で暮らしたいっていってたじゃない」

まり江とはおなじ部屋でずっと暮らしてきたので、気持の内まで知り合っている。

「そうなのよ……」

やよいはうなずいた。

「だったらもう手おくれじゃない。あと数日で、お姉さん祝言でお嫁入りよ。武蔵屋の若内儀になるんだわ」

「そんなこといわないで」

やよいは何度も首をふった。

「お姉さんらしくもない。今までこんなお姉さんを見たことないわ。だったらどうして、いやだっていわなかったのよ」

まり江は責めるような口振りでいった。

「ついいいそびれているうちに、どんどんことがはこばれてしまったのよ。本当にわたしらしくもない」

「それでどうするつもりなの。祝言はするの、しないの」

そこまでいわれてやよいは言葉をのんだ。いつものやよいとまり江の立場が逆転した。

「どうするって、まり江、今、手おくれだっていったばかりじゃない」

やよいは泣いているような、怒っているような言葉になった。

「お姉さん、本当にそれでいいの。後悔はしないの」

「きっと後悔するとおもうわ。わたし正之助さんの女房で一生すごすなんて、とてもつらいわ」

「だったらお姉さんの好きなようにしたら。みんなに大層な迷惑をかけることになるとおもうけど、仕方ないわ。背に腹はかえられないっていうでしょう」

「まり江、ずいぶんすごいことというのね。でもありがとう。わたし、そういう気になってきたわ」

最前から徐々にやよいはその気持になってきていた。そして今のまり江の言葉でほぼ決心がついた。

「でもお父さんとお母さんにずいぶん迷惑をかけることになるわ。大野屋は町内でも爪(つま)はじきにされるかもしれないわよ」

そういいながらもやよいはしだいに笑顔をとりもどしてきた。ふだんの快活、明朗な川越小町にもどっていた。

「で、お姉さん、ゆく当てはあるの」

「その気になれば、わたし何だってできるわ。江戸にでていって、おもいきり生きてみたいわ。自分の力を精いっぱいためしてみたい。古い田舎町でくすぶって一生をおくるのはいやよ」

「そうよ、それでなきゃあ、お姉さんらしくないわ」

まり江もわらった。

もうやよいに迷いはなかった。こころは江戸の空へ飛んでいた。

自分や家族たちが生まれてそだった川越の町が嫌いなわけではなかったが、自分はこの

町でうずもれるような女ではないとおもっていた。

二

男たちのまぶしげな視線が四方八方からやよいの顔や体につきささってくる。女たちは嫉妬(しっと)と羨望(せんぼう)の眼差(まなざし)をなげてくる。

そのいずれもやよいには大層こころよかった。なんともいえぬ快感が湧きおこってくる。やよいが生き甲斐を感じるのはこの一瞬だといっていい。

光と闇(やみ)の中に歓声がおこり、それをかき消すばかりの大花火の音がはじけ、瞬後には目もくらむばかりな華麗な絵模様が夜空に展開される。やがて歓声はしずまり、嘆声にかわる。

五月晦日(みそか)の両国川岸は花火と納涼、屋形船の世界である。川岸では茶屋や船宿が万灯(まんどう)をともして納涼客をむかえ、川面では屋形船や屋根船でひきもきらない。

船の簾(すだれ)のうちからは三味の音色や太鼓のひびきが風にのって水上、川岸へながれてくる。川岸の沿道には茶店、屋台がびっしりと立ちならび、往来する納涼客で立錐(りっすい)の余地もない有様である。

宵から夜更けにいたっても、このにぎわいはいっこうにおとろえぬ。人出はいっそうふえて、にぎわいは増すばかりだ。

両国川開きは一昨日であるが、この江都第一のにぎわいの日に、地元柳橋(やなぎばし)の芸者衆は川

開きをさけて、根岸などのひなびたところでゆっくりと身をやすめたりするのが粋だの見識だのとされていた。きれいどころが川船の納涼にくわわるのは昨日からである。それで両国のにぎわいは頂点をむかえる。

やよいは柳橋の売れっ妓である。江戸へでてきてわずか二ヶ月で柳橋でも指折りの売れっ妓となっていた。そのめざましさといったら前例がない、と置屋〈川清〉の女将おいねが自慢にしている。川清から座敷にではじめてからわずか数日でやよいの名は両国、柳橋かいわいに知れわたった。水際だった器量と愛嬌、さらに少々気位の高いのが受けた。旦那衆や役者、絵師、関取など人気が商売の者たち、さらに諸大名の留守居役たちのあいだでも評判になった。

柳橋の水はやよいに合っていた。やよいは水を得た魚のように生き生きと座敷から座敷をかけまわった。源氏名はつかわず、親にもらったままの名ででた。この心意気も客たちにうけた。親にしいられたり、親の苦労を見かねてはたらきにでたのとちがって、自分からのぞんで座敷にでただけに、ほかの妓たちとは心がけからしてちがう。態度もちがう。芸事の素地もしっかりとできていたので、置屋での稽古ごとも苦にならなかった。

客はやよいの機嫌をそこねまいと気をつかってくれるし、置屋でも女将が大事にしてくれる。そうすると朋輩たちのやよいを見る目だってちがってくる。やよいはわずか二ヶ月で川清の米櫃になった。なにもかもうまく回転したのである。

今柳橋では寄るとさわると、誰がやよいを落とすかという話題である。もう落ちた、と

いう噂もながれている。そんなときやよいはただにこにことわらっている。いいわけもしないし、否定もしない。だから一層まわりの気がもめる。

やよいは身持ちの固さを売り物にする気持などさらにない。そんなのは売れない妓が口惜しまぎれにつかう手だとおもっている。やよいはいつかは自分も誰かに落とされるだろうとかんがえていた。

いくら芸者が人気稼業だとはいえ、女の力だけでは所詮たいしたことはない。やはり大きな後楯が必要なのである。後楯がなくてはどうにもならない。後楯はつよければつよいだけいいのである。

やよいはまだ後楯をきめる気持はなかった。よく見てからきめるつもりである。

今日の客は当代きっての人気絵師、歌川派の総帥三代豊国である。かつて五渡亭国貞として名を売り、今師匠の後をついで一大勢力といわれる歌川派に君臨している男だ。豊国にはじめて会ったのは、版元の亀屋喜三郎の座敷に呼ばれたとき、客としてきていた。喜三郎は豊国の揃物がほしくて、宴席にまねいていたのだ。

初会の席で、やよいは豊国の気に入られた。豊国はすぐに裏をかえしにきて、そのときやよいを美人画にかきたいといった。やよいを主題にして江戸の春夏秋冬を揃物にしたいと申しこまれた。亀屋喜三郎もそれに同乗して、ぜひともひきうけてくれと熱心にさそってきた。それで今日、江戸の夏〈両国の花火〉の写生を屋形船の中ではじめたのだ。

船の中には、やよいと豊国、喜三郎の三人が乗りこんでいる。夕景から、屋形船に乗り

こみ、はじめ膳をかこんで美味珍味を肴にいっぱいやりだしているうちに、花火が鳴りだした。吹けよ川風、あがれよ簾という雰囲気のうちに、簾をあげて花火見物をはじめた。

仕懸花火や打上花火が豪快な音とともに夜空へ舞いあがり、絢爛たる絵模様をえがくのにこころをうばわれていくうちに、やよいは夢中になっていた。豊国や喜三郎がいるのさえわすれかけた。

そのうちに豊国は仕事にかかりだしたようだ。

やよいの視界の隅に、画帳をとりだした豊国の姿が見えた。

ふりむくと、

「かまわない。そのまま見てたっていいんだ」

豊国が声をかけてきた。

その言葉のままに、やよいは花火に夢中になっていった。夏は川越でも新河岸川の川原で花火をやるが、両国の花火とでは比較にならない。昨日と今日やよいははじめて本格的な花火を見て、それに酔ってしまった。

音がして、燦爛たる火の花が大空にひらき、それが数瞬のうちに消えていく。ひらくときには興奮をおぼえるが、消えていくときには切ないようなはかなさが胸にせまってくる。花火の命が女の命そのものにおもえたときがあった。

大きな仕懸花火が一つあがるごとに川岸の人波が揺れて、どっと歓声があがり、興奮にどよめいていく。その興奮は津波のように川上、川下へつたわっていく。

（わたしも花火のように、おもいきり華麗に生きたい）

やよいは夜空を見ながら、女の人生、とくに自分のこれからの生き方をかんがえた。

そのあいだ、豊国はせっせと絵筆をはしらせている。自分が高名な絵師によって美人画にかかれているのも、やよいにとってはえもいわれぬ快感である。男たちから、さらに女たちから欲望や嫉妬の視線をうける以上の快感である。

花火を見ながら無意識のうちに自分のいちばんうつくしい表情や姿を豊国へむけ、存分に自分のすばらしさを絵にしてもらった。

「おまえは果報者だ。この揃物がでれば、やよいの名は江戸中にひろがる。柳橋きっての妓とうたわれるようになるのは請け合いだ。今後とも豊国先生にひいきにしてもらいなさい」

喜三郎がそんなことをいっているのを、やよいはききながして花火に興じた。豊国がやよいにひかれているのは歴然としている。喜三郎はその豊国にやよいを取りもとうとしている。そんな下ごころがはっきりと見えた。

豊国は体の大きな男だ。その体をせまい屋形船の中でもてあましながら、右に左に、船首に船尾にうつしながらやよいをえがくのに熱中している。

豊国には金もあれば、地位もある。名声もある。江戸で豊国の名を知らぬ者は一人もいない。

やよいは何人かのうちから後楯をえらぶつもりでいる。豊国はそのうちの一人に入れて

もよい男であった。

三

やよいが豊国の熱望に負けて、彼の意にしたがったのは、秋も中ごろのことである。江戸の町々の錦絵屋や絵草紙屋にはやよいをえがいた豊国の『江戸の四季』四枚揃が売りだされて、評判をえていた。『両国の花火』『名月愛宕山』『増上寺雪景色』『墨堤の桜』の四季をえがくためにやよいは両国、愛宕山、増上寺、墨堤を豊国とともにあるき、仕事をおえたときにはなかば男の熱情にほだされていた。それでもすぐにはいいなりにはならなかった。

そのころ言い寄ってくる客は豊国だけではなかった。名のある大尽たちの中でやよいを落とそうとねらっている者が何人もいた。やよいは冷静にかんがえ天秤にかけたうえで、豊国に月々高額の手当を約束させ、さらに浜町川岸の汐見橋に家を一軒買ってもらって、豊国ののぞみをかなえてやった。

汐見橋の家には留守番をおき、ふだんは従来どおり置屋に住みこみをつづけた。それがいちばん都合のいい方法だったのである。

朋輩や先輩芸者たちはやよいのことをうらやんだりやっかんだりしたが、本人はいっこう気にしていなかった。しかもそれに満足しているわけでもなかった。

(わたしはこんなものじゃあない。もっとわたしらしい生き方があるはず……)

もっといろいろな世間を見て、自分にいちばん合った生き方を見つけたいとおもっていた。今はそれが何だかはっきりとはわからない。娘ざかり、女ざかりのうちにそれを見つけ、自分にもっともふさわしい男とともに一生をおくりたいとかんがえた。

仲秋名月をすぎた翌々日、

「やよい、お客さんだよ」

お座敷へでる仕度をしているときに、階下から女将のおいねに呼ばれた。置屋にたずねてくる客は稀である。

いぶかしみながら階下へおりていった。

玄関へでていって、やよいは一瞬棒立ちになった。足が前へすすまなかった。声もでない。

「ここをずいぶんさがしまわったよ。何ヶ月もかかってようやく見つけたんだ」

気弱そうな微笑を浮かべて立っているのは正之助だった。

「まあ、正之助さん……」

ようやくでた言葉がそれだ。なんといっても、会うには間のわるい相手である。

「その節は大層ご迷惑をおかけいたしました。わたしの不始末から武蔵屋さんへは申しわけないことをいたしてしまいました」

やよいとしてはそういう言葉しかなかった。

「いや、それはもう過ぎてしまったことだ。大野屋さんがあやまりにこられた。一時はわ

たしもがっかりしたし、気まずいおもいもしたけれど、それはいいんです」
正之助の言葉はやよいが想像していなかったものだ。もし会うことがあればどんな罵声(ばせい)も仕打ちも受けるべきだとおもっていた。ものわかりのいい挨拶(あいさつ)をされて、かえってこまった。

自分の部屋にあげるのもどうかと思案していると、
「お客さんにあがってもらったら」
内所(ないしょ)からおいねの声がして、階下の小座敷を用意してくれた。そこは川清の客間としてつかわれている。

「ご覧のように、わたしは川越をでていらい、江戸でこのようなお仕事(つとめ)をいたしております。正之助さんにも武蔵屋さんにも会わす顔はございません。できることならば、そちら様とはなにもご縁がなかったこととおかんがえいただきとうございます」
そういうと、
「わたしは話をむしかえしたり、嫌みをいいにきたんじゃあありません。ただ大野屋さんご夫婦のお話だけでは破談の理由がよくわからなかったものですから、どうしても一度やよいさん本人からそれをうかがいたかったんです」
正之助はつとめて冷静にいった。
やよいにとってはそれがいちばんこまるのである。破談の理由(わけ)など当人同士のあいだで冷静にはなせるものではない。両親があやまりにいってよくわからなかったというのも当

然なのだ。
「わたしは江戸でこのような仕事をいたしておりますので、もう武蔵屋さんのようなかたいご商売の家へはとつげません。そこのところご斟酌(しんしゃく)くださいまして、ご勘弁ねがいたいのですが」
くるしまぎれにそうこたえたが、
「わたしは商売になどはじめからこだわっておりません。やよいさんのおこころのうちがどうしても知りたくて」
正之助は本当にやよいのこころのうちがわからないのだ。人柄はわるくはなくても、こういう鈍感さがやよいには駄目なのである。
「いずれにしましても、もう半年が過ぎてしまいました。覆水盆にかえらずと申します。どうかこのままでご勘弁ねがいます」
やよいは頭をさげ、これから仕事(つとめ)があるからといって、正之助にかえってもらった。

正之助がかえっていった後、やよいは二階の部屋へかけあがった。今夕は、大事なお客の座敷があるのだ。正之助のことよりも、こころはその座敷にとんでいた。
夕七つ半（五時）、やよいは万八楼の座敷へ顔をだした。
客はもうきていた。階段をあがっていくと、襖(ふすま)のむこうから三味線の音色がきこえてきた。先輩芸者の千代藤(ちよふじ)が先にきて時間をつないでくれている。正之助の相手をしていたぶ

んだけ、座敷におくれてしまった。

「おそくなって、申しわけありません」

座敷へ入って指をつくと、むこうに浅草蔵前の札差三河屋久右衛門の顔があった。その左右に両国のさる大藩の留守居役と勘定方が相伴している。札差は旗本、御家人の米櫃をあずかる商人であり、彼等にたいして大きな力をふるっている。そればかりではなく、藩庫に金がなくなった大名たちからも頼りにされている存在である。

「待ちかねていたよ。さあこちらへ」

大藩の留守居役がやよいをまねいて久右衛門のとなりにすわらせた。

「旦那さま、いつもご贔屓をくださいましてありがとうございます」

やよいは留守居役や勘定方をさしおいて、まず久右衛門に挨拶の酌をした。

久右衛門はもうだいぶ前からやよいを座敷に呼んでくれている。それだけではない。やよいに惚れていて、口説きつづけている。やよいはわらっているだけで、それにたいする返事をまだしていない。当分のあいだは答をださぬつもりである。

諾であろうと、否であろうと返事はできるだけのばすつもりだ。のばせばのばすほど、男はあつくなってくる。やよいは江戸であそびなれた通人の客よりも手管上手である。丁度よいころ合いをはかって返事をしてやる。

久右衛門は通人の客でとおっているが、やよいにすれば、あつかいやすい人並みの客である。久右衛門の意のうちや、時々にかわる気持などは顔を見れば手にとるように読みと

れる。どうしてこれが通人かとうたがいたくなるくらいだ。一昨日の名月をやよいは久右衛門とこの座敷から見た。

「今見月は縁起がわるいという。来月の十三夜の座敷もきめておこう」

吉原には十五夜に登楼した客は後の月の十三夜にもかならず登楼するものだという言いならわしがあるので、久右衛門はやよいの予約をとっている始末だ。

「ありがとうございます。来月のお座敷までとってくださるご贔屓は旦那さまをおいてほかにはありません」

やよいには本当によい客である。ここの座敷で約一刻すごした。

やよいにはつぎの座敷が待っている。その座敷もなおざりにできぬ座敷だ。久右衛門へ礼をいって、千代藤とともに万八楼から梅川へいそいだ。

梅川は柳橋で万八楼、柏屋、川長とともに一流の料理茶屋として知られている。

梅川の座敷でやよいを待っているのは、梨園の実力者三世尾上菊五郎である。

とんとんと梅川の階段をあがって、声をかけて座敷へ入っていった。

挨拶をして顔をあげたとたん、やよいの視線が一点に吸い寄せられた。それは菊五郎ではなく、彼がつれてきた若い弟子である。

あろうことか、その男にやよいは一目でひきつけられた。贅肉のない、すっきりとした体つきの好男子だ。背筋にぞくっとはしるものを感じた。こんなことはかつて一度もなかった。

「尾上仙太郎です。今後よろしくおねがいいたします」
　役者だけに声もいい。濁りのない、よくとおる声がやよいの耳にひびいた。その声にもしびれた。これを一目惚れというのかとおもった。
「十年後の芝居町を背負ってたつ男だ。いや数年後にはもう天下をとっているかもしれない」
　菊五郎は上機嫌で仙太郎をそう紹介した。
　仙太郎はやや照れた笑顔をむけてきた。その笑顔がまたすごくいい。やよいはその顔を見ただけで体にずきんと感じるものがあった。まるで電気にふれたようなおもいだ。
「やよいと申します。よろしくおねがい申しあげます」
　挨拶をしたやよいの声はわずかにふるえていた。

四

　年があらたまって、ほかほかとあたたかな初春の日々がつづいた。一陽来復とはこういう日々をいうのだ。
　十四日年越しの日、やよいは朝から川清をでて汐見橋の家へもどった。川越からまり江があそびにくることになっている。まり江とは昨年三月、川越をでてきていらい会っていない。
「まあ、お姉さん、まるで別人みたい。とってもきれいになったわ。やはり江戸にでるとちがうのね」

　これがまり江の再会第一声だ。おどろきの言葉である。
「まり江だってとてもきれいよ。江戸で暮らしたら、もっときれいになるわ」
　お世辞でいったのだが、
「お姉さん、あたしも江戸で暮らしてみたいの。川越のような田舎くさいところに一生住むのはいやだわ。お姉さん、あたしをここにおいて」
　まり江はくる早々難題をもちだした。
「わたしにつづいてまり江までできてしまったらお父さんやお母さんがさびしくなるわ。ここにくるならちゃんと許しをもらってらっしゃい」
「あたしがここで留守番をするわ。それならお姉さんだって安心でしょ。留守はあたしがきちんとまもってあげる。お姉さんいつかえってきても大丈夫にしといてあげるわ」
「まり江ったら、いつからそんなに要領がよくなったの」
「お姉さんの妹だからね、きっと血筋じゃないかしら。ともかくあたし田舎の男と縁組して、田舎で暮らすのは真っ平なの。お姉さんだってわかるでしょ、この気持。あたしは江戸で暮らしたいわ」
　まり江は昨年のやよいとおなじことをいいだした。
「川越だって小江戸っていうじゃない。まり江は小江戸で我慢したら」
「江戸と小江戸じゃまるでちがうわ。川越が小江戸だなんておこがましい。あたしは本当

の江戸に住みたいの」

まり江はもうそのつもりででてきたようだ。身のまわりの物などをたずさえてきていた。

やよいはまり江にこの家にこられると都合のいいこともあるが、かえってわるいこともある。豊国と逢うときはこの家をつかっているが、まり江がいてはいささか具合がわるい。

「お姉さんの都合がわるいときは、あたしがでているから大丈夫よ。心配しないで」

そのへんを見ぬいて先手を打たれた。

「ともかく、しばらくこの家であそんでいきなさい。江戸は生き馬の目をぬくっていうところよ。田舎のものがぽっとでてきたって、簡単には生きていかれないわ。長居をしないならば、ここにおいてあげる」

仕方なくそういった。まり江はどうやらやよいとおなじことをかんがえているようだ。

まり江と一夜をすごし、翌日昼前ごろやよいは家をでた。

汐見橋をわたって、ふと足をとめた。

道が十字路になっている。左にいって通塩町の大路をいっても柳橋へでられるし、右の橘町の大通りをあるいてもほぼおなじ時間で柳橋だ。さらにそのあいだの小路をまがっても柳橋につく。やよいはいつもここでまようのだ。

（どちらへいこうか……）

いつもは一瞬できまるのだが、今日はどうしたことかすぐにきまらなかった。

岐路に立ち、数瞬まよってから、通塩町の道をえらんだ。

（丁度、今のわたしの人生のようだわ）

あるきながら、やよいは今人生の岐路に立っているという実感をいだいた。

やよいの前にはいろいろな人生がひらけている。そのどれをえらぶべきか、決断をしかねていた。

真面目な男をさがし、まともな縁組をして地道に暮らすか、それとも大金持の旦那をもって面白おかしく派手に暮らすか、それでもなくて男に金をださして船宿か料理茶屋を経営するか……。今ならばどれでもえらぶことができる。どれをえらんでも成功することは疑いない。

やよいと縁組したがっている男はいくらでもいる。料理茶屋くらい買いとってくれる男も何人もいる。まして旦那になりたがっている男の数は知れない。

やよいのこころは今揺れに揺れている。贅沢な悩みに揺らいでいるのだ。

女の歳月が長くはないこともやよいは知っている。この歳月はやよいをもってしてもどうにもしがたい。今がさかりだとおもっているうちに、たちまち歳月はすぎてしまう。贅沢な悩みをいだいていられるのも今のうちだけだ。

悩みをいだきながら、仙太郎、豊国、久右衛門……などの顔や姿が脳裡を浮きしずみしている。逆にいえば、えらぶ男によってやよいの生き方はきまる。どちらを先にえらんでもよいのである。

いずれにしろそのえらび方がむつかしい。好き嫌いできめるのならばいっそう簡単だ。

一も二もなく好きなのは仙太郎だが、将来のことをかんがえるとなると、ただ好き嫌いだけではきめられない。

仙太郎とは初回いらい毎月二、三度は会っている。本当は毎日でも一日おきにでも会いたいのだが、双方ともにいそがしい体である。やよいには座敷があるし、仙太郎には舞台がある。おたがいにそれぞれの贔屓は大事にしなければならないし、菊五郎の目をぬすまなければならない。二人の仲が菊五郎に知れたら、仙太郎は破門されるかもわからない。それでも仙太郎は菊五郎の目をかすめて、やよいに会いにきてくれている。

川清にもどってからかんがえていると、急に仙太郎の顔が見たくなった。会って仙太郎の胸に顔をうずめたくなった。約束では会うのはまだ先である。

「たまえちゃん、お使いにいって頂戴」

川清の女中に小遣をあたえて、中村座の楽屋にいる仙太郎へ手紙を託した。

「くれぐれも菊五郎さんに見つからないようにね」

念をおして、今夜の逢瀬の場所と時刻をしるした。自分のわがままと承知していても、どうしても今日のうちに会いたくなったのだ。

この日の夕から宵、座敷にでていても、仙太郎のことが脳裡からはなれなかった。仙太郎には内緒で今でも豊国との関係をつづけているのがいつも後めたさになっていた。

座敷をおわってから、向両国の〈青柳〉という茶屋の二階にあがって、仙太郎を待った。ここは料理茶屋のようなはなやかなところではなく、男女の密会によくつかわれる向両国

でもやや場末にある店だ。

仙太郎は夜も二更に入ったころ（およそ九時すぎ）、あたふたとやってきた。

「ご免なさい。どうしても逢いたくなったものだから、無理をいって」

やよいは甘えていったが、仙太郎の顔がやや蒼い。

「師匠はどうもおれたちの仲に勘づいてるようだ」

仙太郎の言葉でやよいはどきっとなった。菊五郎にうとんじられたら仙太郎の役者としての命はあぶないものになる。その危険を賭けて密会にきてくれた仙太郎の心意気がうれしかった。

「菊五郎さんにはずっと口説かれてるけど、応じていないからでしょう」

「おれは来月の役をおろされちまった。きっと師匠の差金だろう。師匠のおれを見る目が以前と全然ちがうんだ」

「仙太郎さん、可哀そう。あたしのために、そんなことになっちまって」

やよいは好きな男を苦境に立たせたことがとてもつらかった。自分の力でできることならなんでもしてやろうという気持だった。

「師匠はおまえにぞっこんなんだ」

「そんなこといわれたって。わたしは仙太郎さんにぞっこんだから」

やよいは仙太郎の胸にもたれていった。

仙太郎はそれをしっかり受けてくれた。

そうしているだけで、やよいは幸せだった。なんといっても、仙太郎は粋で、伊達で、その上の好男子だ。若い江戸の伊達男を代表するような男である。長いあいだやよいが夢に見てきた男だ。なんとしても手ばなしたくない気持がつよい。

「おれは師匠の一言で何事も左右される芝居の世界がいやになってきた。これほどいやなところだとはおもわなかった」

「といっても仙太郎さんは、この世界で名をなす男よ。自棄をおこしちゃ駄目だわ」

年齢は五つ年上の男だが、やよいは弟をたしなめるような気持でいった。

「芝居の世界にそれほど未練はない。捨てたってかまやしないんだ」

仙太郎はやや興奮していった。

「仙太郎さんは明日の芝居を背負って立つ男でしょう。弱気は仙太郎さんに似合わない」

「やよい、いっそおれの田舎へいかないか。おれの家は田舎で結構大きな呉服屋をやっているんだ。おれは跡取り息子なんだよ」

仙太郎がそのとき意外なことを口にした。

「そうなの。見えないわねぇ、呉服屋の跡取り息子には。田舎ってどこ？」

「川越だよ」

やよいは啞然となって仙太郎の顔を見た。

五

やよいの悩みは尽きなかった。他人は贅沢な悩みだというが、本人にとっては真剣な悩みである。

豊国との関係は相かわらずであるし、久右衛門も料理茶屋や船宿の一軒や二軒いつでも買ってやるといってくれている。ほかにも口説いてくる男は後を絶たないが、やよいはそう間口をひろげないことにしていた。

二月に入った一日。初午祭の前日、祭りに着る着物をとりに汐見橋の家へむかった。

初午祭は江戸中いたるところにある稲荷の祭りである。川清でも明日にそなえて、赤飯、菜飯、焼豆腐、煮しめ、田楽などの仕度をはじめている。町中には稲荷の染幟があちこちに立ち、風にはためいており、はやくも太鼓の音がどこからともなくきこえ、祭気分が横溢していた。

明日は、まり江と祭見物にいく約束をしている。まり江は江戸にでてきてからもう半月以上になるが、まだかえろうという気がないようだ。やよいは時々はいうのだが、まり江はききながしている。そのうちには両親が恋しくなってかえるだろうと放っているのだ。

家のちかくまできて、まり江は家にいるだろうかとかんがえた。前もっていってないので、買い物かなにかにでているかもしれない。それだったら戸閉まりがしてあって家に入れないとおもった。

案の定、玄関の戸はしまっていた。勝手口があいているかもしれぬと、裏へまわった。

勝手口はあいている。

（おかしい……）
とやよいはおもった。そっとうかがうと、どことなく人のいる物音、気配がつたわってきた。
一瞬いやな予感がかすめたが、
（まさか）
とおもった。けれどもすぐさま家の中へあがっていくのがためらわれた。これは女の勘である。
「まり江、いるの？」
声をかけてしばらく勝手口の前に立っていた。いやな光景がくりひろげられているのだとしたら、それを見たくなかった。無意識に時間をあたえたつもりだった。
家の中で人がしきりにうごく気配がした。やよいの予感はあたっていたのだ。
まり江は今年で十七だし、多分に男の目をひく娘である。それに親許をはなれて、開放的な気分にもなっている。やよいの生活を垣間見て、男への興味が湧いてくることをもっと前にかんがえておくべきだった。やよいの不注意でもあった。
しばらく間をおいてから、やよいは入っていった。そのとき、あわただしく玄関から人がでていくのが見えた。大きな体の後姿は豊国にまちがいなかった。
「まり江、あんた……」
居間にすわってうなだれている妹にやよいはいった。

さすがに部屋の中はあわただしく取りかたづけられている。が、今しがたまでおこなわれていた情事の雰囲気までは消しがたい。部屋のいたるところにそれは立ちこめている。
「まり江、わたしの顔が見れないの」
そういうと、まり江はきっとやよいを見あげた。
「お姉さん、ごめんなさい……」
といったが、その後をいいよどんでいる。
「いいたいことがあったらいいなさい。まり江だって、わたしと豊国がどんなかかわりだか知らないことはないでしょう」
「知っているわ。でももう手おくれだわ。あたしたちはもうはなれられない。豊国師匠だってお姉さんよりもあたしのほうが好きだっていっている。お姉さんはいろんな人と両天秤をかけているから駄目だっていってたわ」
まり江はいどむようにいった。その眸には敵に相対するような炎が燃えている。
「まあっ、よくもそんなことを……」
今までおさえていた気持がまり江の言葉で爆発した。
まり江の頬が鳴った。おもいきりやよいが平手打ちにしたのだ。
まり江はそれをこらえて、
「お姉さん、ごめんなさい」
もう一度あやまった。

それでなんとかやよいの気持がやわらいだ。

「わたし、川越にかえるなんてかんがえていなかった。まして川越の男と一緒になるなんて、おもってもみなかったわ」

やよいは拗(す)ねていったが、その眸(め)はわらっている。というよりも男にあまえているのだ。

やよいと仙太郎は中仙道板橋宿から川越街道へわかれた。

江戸へくるときは新河岸川の早舟できたが、のぼりは曳舟(ひきふね)で二日もかかるので、徒歩の旅にした。十三里半の道のりも、好きな男と一緒なら、あっという間だ。

「おまえが川越の女だとは知らなかったよ。生(き)っ粋の江戸娘だとおもってた」

「わたしだって、尾上仙太郎が川越生まれだなんて、とても信じられませんよ」

二人はおたがいにいいあった。

一口に川越といっても、十ヶ町四門前町がある。やよいは連雀町で、仙太郎は仙波(せんば)町である。

もう一つ、やよいが想像もしていなかったのは、よもや妹に男をとられるとはおもってなかったことだ。やよいはまり江に家も男もあたえてきた。

川越ではそろそろ濠端の桜の蕾(つぼみ)がふくらむころだ。

今年の朝顔

一

よしみの視線の先を、男の顔がかすめた。

よしみは富岡八幡（とみがおかはちまん）の露店をひやかしていた。鉢植えの朝顔をあれこれ品さだめしているとき、若い男の顔が見えたのだ。

見た瞬間、

（おや……）

と、朝顔から男へ視線をうつした。

これがいい男なのである。一見して、はっとするほどの顔だちと姿であった。

紅白（べにしろ）、瑠璃（るり）、浅黄（あさぎ）、柿色（かきいろ）、しぼり、などのさまざまな朝顔のどれを買おうかまよっていたよしみだが、もうどの鉢でもよくなった。こんなことは稀（まれ）なのだが、男のほうへすっかり気持をうばわれてしまった。

「その浅黄の鉢をくれ」

男は露店の主人にいって、朝顔を一鉢買いもとめた。

ひきしまった細面で、体もすらりとしている。物いいにもいなせな雰囲気がある。よしみはその声をきいただけで、胸がきゅんとうずいた。

（抱かれたい）

とおもうような男である。

こういうのを一目惚れ（ひとめぼ）っていうんだろうとおもいながら、よしみもあわてて紅色の鉢を買いもとめた。

そのとき、つれのおたよと視線があった。

おたよの目がなにかをいっている。

男は鉢をかかえて、八幡境内を鳥居のほうへむかっていった。

多少のためらいはあったが、ほうっておけば男はいってしまう。

「おたよちゃん、あの男を付けておくれよ。お礼はするから」

よしみはとっさにそういった。羞恥（しゅうち）はあったが、そんなものにかまってはいられなかった。

「本気なの？」

おどろいた顔でおたよがいうので、

「本気だよ」

といいかえした。

おたよはあきれた顔をしたが、よしみが真顔をしているので、あわてて参道ぞいに鳥居のほうへ早足でむかっていった。

おたよがいなくなってから、よしみは誰にともなく顔をあからめた。

（はしたない……）

とおもったが、

(そんなことといっていられないよ)

今しがた風のように去っていった若い男の姿を脳裡によみがえらせて、そう自分にいいきかせた。

もう一度胸がきゅんとなって、体の芯がうずくのをおぼえた。

おそらく体が濡れているだろうとおもうと、また顔が赤くなった。

露店の主人が妙な顔をしている。

「へい、お客さん」

よしみはまだ買った鉢を受けとっていなかったのだ。

「どうもすみません」

あわてて朝顔の鉢を受けとった。

よしみは鉢をかかえ、こころはずむおもいで門前仲町の家へもどっていった。

家といっても、裏店に毛のはえたような粗末なものである。けれどもこれはよしみが自分で買いとった家である。

「酌婦がお金をためて家を買いとるなんて、あたしははじめてきいたよ」

おなじ店につとめている朋輩のおたよはそのときそういったものである。

「女の細腕で買いとった家だからね、値打ちもんだよ。酌婦だって一生懸命にやれば、このくらいのことはできるんだ」

「よしみちゃんだからできるんだよ。並みの女だったら、とてもできやしないよ。そのうちによしみちゃん、店くらい持つだろう」

二年前、おたよはそうもいったが、その言葉は実現にちかづいていた。酌婦の足をあらって自分の店を持てる時期が、もうそこまできていた。

それによしみはまだ二十三歳である。もう年増といわれる年頃だが、容色はおとろえていない。裸になれば、お乳の形だってすこしもくずれていない。お腹にムダな肉はついていないし、足や腰の線だってまだ捨てたものではない。若い娘にはない色気があるという客たちの評判だし、色恋の手練手管にもかなり自信がある。

よしみは手管にものをいわせて、小金をもった助平な客たちのあいだをおよぎわたって、金をためた。その金で家を買ったのだ。女一人で生きていくためにも、家くらいは必要である。

よしみの夢は店を持つことである。それも間口のせまいいっぱい飲み屋や居酒屋などではなく、使用人を何人もつかい、女将さんと呼ばれるような茶屋の持ち主になることであった。自分の器量と持ち前の運のつよさを武器にすれば、きっとかなえられると信じて、酌婦をやってきた。

一刻(二時間)ちかくたったころ、玄関の戸がひらいた。

おたよがあがってきた。

「ご苦労だったね。首尾はどうだった」

よしみはすぐにも知りたかった。

「女目明しになったような気持で付けてきたわよ。やっぱりよしみちゃんが好きになりそうな男だった」

おたよは気をもたせた。

「その先をはやくおいいよ」

「あの男、深川六間堀に住んでいて、芝居の絵看板を画いているらしいよ。名前は弥之助だって」

「名前までしらべてくれたのかい、ご苦労さま。弥之助さんか、いい名前だね。それに芝居の絵看板を画いてるなんて、洒落てるねえ」

よしみは手ばなしでよろこんだ。胸がわくわくしてきた。

「まだ独身者だって」

「おあつらえむきじゃないか。あたしの好みにぴったりだよ」

「ものにする自信はある？　もてそうな男だよ」

「さあ、今のところはなんともいえないね。だけどあたってくだけるこころ意気よ。滅多にぶつからないいい男だからね」

とわらってみせた。内心では落としてみせる自信が十分あった。弥之助という男がよしんば妻帯者であったにせよ、よしみのこころはかわらなかった。所帯をもっていようがいまいが、好き嫌いにかかわりないというのがよしみの料簡だった。

「器量のいい女はつよいねえ。なんでも自分のおもいのままじゃないか。あっちをものにしたら、今の男はどうするのよ。一体、どちらが本当に好きなの」

おたよは不満らしくたずねた。

「女の勝負は器量だけじゃあきまらないわ。運だってつよくなきゃあならないし、度胸だって大切よ。それに、どっちの男が好きかって、あたしは二人とも大好きよ。べつべつの人間をくらべるなんて、できないわ」

よしみはさばさばとした表情であった。今自分の人生も花が咲きだしたと感じるようになった最近のよしみである。

二

男の指先がよしみの体を揉みほぐしてゆく。

よしみは男の前に体を横たえ、陶然とした気分にさそいこまれていった。

男の指先は女の体のツボをじつによくこころえている。ツボからツボをつたって体にたまっていた凝りをきれいに取りのぞいていった。

「どうだい、体がだいぶかるくなっただろう」

鹿島屋九兵衛はそういいながら、よしみの体を仰むけにかえした。

そのとき素肌にまとった湯あがりの浴衣がめくれ、しどけない姿になった。膝から内腿のあたりまではだけたのがわかったが、なおすのも億劫なので、そのまま目をとじていた。

「とてもいい気持、まるで極楽みたい。ずっとこのままにしていたい。アンマさんよりよほど上手ですよ」

よしみは横着な恰好のままで男の奉仕をねぎらってやった。よしみがよろこべば男はうれしがるのである。

九兵衛の奉仕にいっそう熱が入ってきた。ここぞとおもう個所を的確にとらえて揉みほぐしていった。よしみは年のわりには体の凝る性分なのである。それで五十代も半ばの男に体を揉んでもらう習慣がついた。

九兵衛はよしみののぞむことなら、なんだってやってくれる。ときには部屋の掃除から、雑巾がけ、薪わりなどもすすんでやってくれるのだ。

「若い女が体を凝らすのは、いいことじゃない。体に疲れをためないことだよ」

といいながら、いつまでも九兵衛は手をやすめない。

「鹿島屋の旦那さまがこんなことをしているところを見たら、お旗本や御家人さんはさぞかし魂消ることでしょうね」

よしみはふふっとわらいながらいった。

「旗本や御家人はおそらく腰をぬかすだろう。店の者だっておなじだ。わしじゃなく、他人の空似とおもうかもしれない」

九兵衛はよしみからそういわれることがかえってうれしそうな様子だ。

鹿島屋九兵衛といえば、ちょっとした金持ちや、大店の主人くらいのことではない。江

戸では、泣く子もだまるといわれる蔵前の札差だ。天下の大道をふんぞりかえって闊歩する旗本や御家人たちもてんで頭があがらない。中には九兵衛の草履をそろえようという旗本、御家人もいるくらいである。

九兵衛はよしみが酌婦をしている門前山本町の料理茶屋〈福助〉にかよいつづけて、口説きとおし、とうとうおもいをとげたのである。

九兵衛の誠意と金の力に負けたのが、はじめて抱かれた晩、好きでもない五十男にいいようにされた体をいとおしんで、口惜し涙をながしたものだった。

その後も九兵衛とは月に三度抱かれる約束をした。九兵衛は月に四、五回は逢いたいといったが、よしみはそれをことわった。月に三度でも気がおもく、その前日からいやでたまらなかった。

ところが半年もたつうちに、よしみの気持はすっかりかわってきた。体を馴らされたといえばそれまでだが、以前あれほどいやだった九兵衛と逢う日を待ちのぞむようにさえなった。

九兵衛はきびしい商売をする札差できこえていたが、よしみにたいしてはまったくべつだった。親切で誠実で、よく気がついて、とても大切にしてくれた。今までよしみが付き合った若い男たちとは大層なちがいがあった。若い男の中にも親切でよく気のつく者はいたが、それでも彼等には誇りがあって、そうまで女につくすのを潔しとしないところがあった。限度以上にはへりくだることができないのである。

そこへいくと九兵衛の奉仕とやさしさは徹底していた。よしみの欲することならば自尊心を捨てて完璧につくしてくれる。それに九兵衛にはありあまる財力がある。ほかの男ならば到底かなわぬことも、九兵衛ならばいとも簡単にできてしまうのだ。またそこまでしなければ自分がよしみに気に入られないことを九兵衛は自覚していた。

「ねえ、旦那さま、月に三度じゃ、さびしくてなりません。旦那さまはそうじゃありませんか」

よしみはすこし前からおもっていたことを口にした。今では、よしみもすこしは九兵衛に惚れていた。以前はいやでならなかった赤ら顔や、肉のたるんだ大きなお腹も、今ではさほどでなくなった。

「わしの気持は以前からわかってるじゃないか。おまえに逢った日からつぎに逢う日までが長くて、さびしくてやりきれぬ。わしは月に四度でも五度でもいい。それに応じて手当てもふやそう」

九兵衛は揉む手をやすめて、いった。

「手当てがほしくていってるんじゃありません。旦那さまにはお店を持たしていただくんですから、これ以上の手当てはのぞんでおりません。旦那さまのお顔を長く見ないでいると、この身がたよりなくて仕方ないんです」

これは手管半分、本気半分である。まるっきりの世辞はいくら手管とはいっても、よしみの気性からつかえない。

「可愛いことをいってくれる。よしみのねがうことなら、なんなりともかなえてやろう。本当におまえはいとしい女だ」

九兵衛はそういうと、夢中でよしみの浴衣をはだけて、内腿に顔を押しつけ、唇を這わせてきた。

浴衣姿だけに、よしみは肌着を身につけていない。腰のまわりをおおう薄い腰衣一枚である。

その腰衣がむしりとられた。

「いや、旦那さま、女中が見ている」

よしみはそういって体をよじった。

酌婦の身ながら、女中までやとっているのだ。

「おいねは今さっき買い物にだしたよ」

そういって九兵衛はおおいかぶさってきた。よしみははじめから仰むけの状態だから、そうなったらこばみようがまるでない。

九兵衛はそのまま股間に顔をうずめてきた。

舌を這わされ、よしみは自分から足をひらいていった。

ひらいたところに、男の唇と舌が集中した。吸いたいだけ吸われているあいだに、よしみの気持ももはや正気ではなくなってきた。とことんいかねば気がすまなくなったのである。ちかごろはいつもこのように九兵衛のいいようにあつかわれてしまう。

「あっちの部屋に、つれていって……」
よしみはあえぎながらうったえた。
となりの部屋には床の仕度がしてある。
九兵衛はすぐにはいうことをきかず、畳の上でよしみをはずかしい恰好にしてしまった。

三

「順風満帆っていうのは、女将さんのことをいうんでしょうね」
水茶屋〈よしみ〉が開店した夜、客がみなひけてからおたよがいった。おたよも今日からよしみのことを女将さんと呼んでいる。
ほとんど同時期に門前山本町で酌婦をはじめた二人だが、わずか四年余のあいだに、よしみとおたよの立場は大きく差がついてしまった。
よしみはおたよの言葉にややあいまいにうなずいた。
「今までがそうだからって、今後もそうだとは限らないのよ。いいことがあれば、悪いことだってある。それが人生だわ」
よしみは得意の絶頂でそういっているのではなかった。本心からそうおもっていた。いつかよくないことがやってくるという予感があった。
おたよはわらいながらいった。
「おたよちゃんにだって、きっといいことがあるよ。まだあたしたちは若いからね。それ

に人生って、結局は公平にできてるっていうからね。どこかで得をする者はほかのところで損をしてるとね」
「でも、女将さんを見てると、けっして人生は公平じゃないって感じられますよ。女将さんはいいことずくめだもの。男だってより取りみどりだし、二人の男ともうまくいっている。こんな立派なお店までだしてもらって」
わらっているが、おたよの言葉はついしめりがちになってきた。
「おたよちゃん、他人事だから、そんなふうに見えるのよ。お店もだしてもらったわ。たしかにあたしは今までめぐまれてきたわ。二人の男とも仲よくやっている。けれども、この先もいいことがつづくとはかぎらないわ。来年あたりが、あたしの山ね」
よしみは客にだしたのこりの酒を茶碗についで、ぐいと飲んでいった。
「来年が、山なんですか？」
「そうよ。乗りきれるかどうかわからないけど」
「どうして、山なんですか。女将さんにはいいことがこの先もつづきますよ」
おたよはよしみのいいだしたことが腑におちぬようだ。
「どうしてって、来年はあたし二十四だからね。あたし、死ぬかもしれない」
よしみは真顔でいった。半分は本気でそうおもっているからだ。
「いやだ、女将さん。どうして来年死ぬんですか。あたしも二十四ですよ」
「だって、あたしのお母さん、二十四で死んだんですもの」

そういうと、おたよがわらった。
「いくらお母さんが二十四で死んだって……」
「お祖母ちゃんも、二十四で死んだの。だから、あたしもその年で死ぬのよ。二度あることは三度っていうでしょ。それがうちの家系らしいの」
よしみがそういうと、おたよはすこしいいよどんだ。
「いやねえ、女将さん、そんなの偶然ですよ。きっと偶然のめぐり合わせだわ。女将さんはべつですよ。だってこんなに元気じゃないですか」
「あたしも、偶然だとはおもうけれど。二代つづいたのは本当よ。だから三代つづいたっておかしくはないわ」
「あたしはつづかないとおもいますよ。女将さんはそんな若死にをするようなひ弱な運勢じゃありませんよ」
「あたしもそうおもいたいんだけれど、こればっかりはわからないからね」
よしみはあいまいにいったが、こころのうちではずっと気にしていた事柄だった。祖母も母も二十四で死んだということは、子供のころからよしみの胸のうちでいつも消えなかった。本気でなやむことはなかったが、こころの隅にいつもこびりついていた。
開店の日から〈よしみ〉は盛況で、すこぶる幸先がよかった。はじめから店をつくるつもりだったので、〈福助〉の客を大切にしていたのが図にあたった。
おたよが順風満帆、というのは当然であった。

数日後の九月九日。よしみは忙しい時間をさいて、朝はやくから、浅草芝居町へ駕籠で乗りつけた。
この日は五節句の最後、重陽の節句だが、芝居町ではこの日が秋狂言の初日と昔からさだまっている。今年も猿若町の三座がそろって初日をだし、芝居見物の客でにぎわっていた。
しかもそればかりではない。よしみにとっても、この日はかくべつの意味があった。弥之助が中村座の絵看板をはじめてまかされて画いたのだ。
三座の絵看板といえば、格式があって、いくら腕があっても、ただうまいだけでは画かしてもらえぬ。元禄の時代から芝居絵は鳥居派の専売と相場がさだまっている。芝居や役者の世界に通じていなければ、絵看板は画けぬものとされていた。さらにこの世界に通じるのは年季がかかるので、若い絵師ではなかなか画かしてもらえない。
それを弥之助はまだ二十七歳の若さで画いた。しかも盆狂言や夏狂言のような軽い興行ではなく大きな秋狂言の看板をまかされたのだから、大変なことだった。
弥之助は中村座の木戸の横の大名題看板の前で待っていた。
「弥之さん、よかったねえ。本当に見事だよ。弥之さんの看板が三座のうちでいちばん冴えてるよ」
よしみは弥之助の頭上にかかげてある櫓下看板に見とれていった。
演題は〈伽羅先代萩〉で、仁木弾正と政岡をえがいたものだ。〈伊達騒動〉として知ら

れている狂言である。

「いそがしいのに、よくきてくれたな」

弥之助はわらってよしみをむかえた。

「弥之さん、そうして立っているだけで、とても絵になるよ。芝居だったら、さしずめ白井権八ってとこかしら」

よしみは本気でそうおもった。弥之助が舞台にたっても、音羽屋や成田屋にひけをとるまいとおもったが、そこまでは口にしなかった。

木戸のまわりには、中村座の座元や金主、帳元、ひいき筋の者たちが姿をそろえて、初日の活況ぶりをながめている。

弥之助が画いたのは、櫓下絵看板だけではない。場割絵看板、大詰看板、招き看板なども画いた。それらの看板の前に大勢の人々があつまって見入っている。あれこれはやしている者もいる。

よしみはその情景を見ているだけで晴れがましい気持になった。弥之助が大きな仕事をしあげたのがうれしかった。

しかもよしみが念願だった店をだしたのとほぼ時をおなじくして弥之助が大仕事をしてくれたのもうれしかった。自分の強運はまだ落ちてないと、自信をふかめた。

「弥之さん、これからもいい仕事をしてね。あたしがそばで見ているから」

顔をちかづけてささやくと、弥之助はわらってうなずいてくれた。自信にあふれた男の

顔であった。

今、鳥居派は六代目の清満の時代だが、清満は病身で、今年の夏の暑さでたおれ、仕事ができなくなった。鳥居派には番頭格の清里や清延、さらに清隆、清安、清国らの錚々たる人物がいるが、それらを飛びこして弥之助が大抜擢をうけたのである。伝統的な芝居の世界ではきわめてめずらしいことなのだ。

「よしみがいてくれたお蔭だよ。おまえと付き合いだしてから、おれの運勢はすっかり上り目になった」

弥之助がそういってくれたのは、あながち世辞ばかりではないのである。よしみとの交際がはじまってから、弥之助はつづけざまに幸運が舞いこんできたそうだ。

弥之助が上り目になったのはよしみにとってもうれしいかぎりだが、気になることも一つあった。

「弥之さんに縁談がもちあがっているそうだけど、あたしは気に入りませんね。弥之さんがほかの女と所帯をもつのは不承知です」

一言ぴしりといった。

「うん、今そういう話がきているんだ。親類筋からきた話で、おれはそんな気じゃあないんだが」

弥之助はあいまいにこたえた。

「その気がないのなら、はっきりことわってください。あたしは弥之さんをほかの女にわ

たす気はありませんから」

追い打ちをかけると、

「おれだって、よしみからはなれる気はないさ」

弥之助はよしみの気迫におされてこたえた。

弥之助に縁談がもちあがったのは先月であった。よしみは弥之助がことわったものとおもっていたところ、まだその話はつづいていたようだった。それが気に入らなかったのである。

四

初冬の風が吹きはじめたころ、よしみはひとつの決断にせまられていた。

どちらの男をえらぶかの決断ではなかった。もとより、よしみは両方の男とも自分のものにしていくつもりであった。

よしみのなやみは、弥之助の縁談の決着がいまだについていないことである。弥之助は縁談をことわるつもりだといいながら、実際にはその縁談はつづいていた。弥之助は相手の娘と二度も三度も会っているのである。

義理か打算のからんだ縁談だということが、よしみにはわかった。

さすがのよしみも決断するには日数がかかった。打開策はあるにはあるが、かなり手荒な方法だった。

よしみがなやんでいるあいだ、商売のほうはうまくいっていた。〈よしみ〉は開店いらい、ずっと安定した売り上げをつづけていた。よしみは商売には決して手を抜かず、毎日気を張りつづけた。酒も料理もかならず自分で吟味をした。燗の按配や料理の味つけにも自分で注文をだした。どんな客の座敷にもかならず一度は自分で顔をだした。何事も自分でたしかめるのが、よしみの商売の流儀であった。

だから、忙しいことこの上ない。店でいちばん忙しいのは女将であった。

その忙しい中をさいてよしみは九兵衛とも弥之助とも付き合いをつづけた。二人とも手ばなすつもりはなかったのである。

おたよには欲張りだといわれたが、今後も欲張りをつづけるつもりである。九兵衛ともまだ手を切りたくないし、弥之助はもとより手ばなす気持はなかった。二人ともよしみにとっては大切な男であった。

よしみはいつも、昼下りに湯に入る。ほっと息をぬいたり、思案したりする時間である。その湯舟の中で、決断した。手荒な方法だが、仕方がないとおもった。

そして翌日、米三という店の若い者を両国米沢町へ使いにだした。米沢町二丁目に、弥之助の縁談相手の娘の住居がある。漬物屋〈嘉むら〉の次女おなつとのあいだに縁談がつづいているのだ。

昼前、米三がもどってきて、

「首尾よく、当人にわたすことができました」

と報告した。

「それはよかった。ご苦労だったね」

よしみは他人ごとのように米三をねぎらった。米三におなつへ手紙をわたすよういいつけたのである。しかもおなつ自身に直接わたすようにいったのだ。

その翌日、昼下りの頃合いを見はからって、よしみは念入りに化粧し、着物もよく吟味してえらんだ上物を着こんで外出した。

「向両国の魚善へやっておくれ」

駕籠屋へそうつげた。

店の女将になってからは、外出にはほとんど駕籠をつかっている。一ヶ月につかう駕籠代は馬鹿にならないが、〈よしみ〉の格式のためにそうしている。

魚善は一流の料理茶屋で、札差がつかったり、高名な役者や戯作者、絵師などがこのんで出入する店だ。

駕籠を店頭に横付けさせると、

「女将さん、どうぞいらっしゃいませ。お待ちいたしておりました」

店の番頭や若い者、女中頭などがとびだしてきた。

よしみは九兵衛や弥之助ともたびたびこの店をつかっていた。

案内された座敷には、すでにおなつがきて待っていた。おなつのほかには誰もいない。一人でくるように、手紙に書いておいたのだ。

おなつはまだ十七、八の初心な感じの娘である。

「嘉むらのおなつでございます。おはつにおめにかかります」

おなつは精いっぱいの挨拶をした。料理茶屋に呼びだされたことで、緊張し、固くなっているのが一目でわかる。器量は十人並みよりはすぐれている。

器量では自分が勝っているとよしみはおもったが、相手には若さとそだちのよさがある。

ややいじらしさをおぼえたが、反対にいたぶってやりたい気持がこみあげてきた。

「門前仲町のよしみです。弥之さんのことでお手紙をさしあげました」

よしみは最初からかるい攻撃にでた。

弥之さんと呼んだことでおなつはあきらかに衝撃をうけたようだ。おなつの表情はいっそう固くなった。

「どういうご用件でしょうか。わたしにはこういうところに呼びだされるおぼえはありませんが」

おなつの言葉には怒りと屈辱と緊張がまじり合っているのがわかった。

「おわかりでないなら、はなしてあげましょう」

よしみは頬に微笑を浮かべていった。

「その前に、わたしと弥之さんとがどういう仲だか、おなつさんご存知ですか」

そう切りこむと、おなつのほそい肩がぴくりとふるえた。

「きっとご存知ないから、弥之さんとの縁談をすすめているのでしょう」

「存知ておりません」

おなつはややけがらわしそうな表情を見せてこたえた。

「きっとそうだとおもいましたよ。もしご存知ならば、よほどおめでたいか、他人の男を横奪りしようっていう泥棒猫のような料簡の持ち主ですよ」

「どういう仲なのか、はっきりおっしゃってくださいまし」

まだ世間をよく知らない娘のようだが、そこは下町そだちの芯のつよさだ。口惜しさを懸命に我慢していった。

「男と女の仲をどのようにいったら娘さんにわかってもらえるか知りませんけど、わたしと弥之さんとはもう以前から夫婦同然の仲なんですよ。わたしがお客商売をしているうえに、弥之さんだって人気稼業の芝居絵師だし、これから大いに売りだそうっていう折柄だから、おたがい所帯を持つのは先にのばそうって約束してる訳合いなんです。そんなことは二人のまわりの人たちはみんな存知ていらっしゃいます」

よしみが嘘や誇張をないまぜにしていうと、おなつの顔から血がひいて、紙のようにしろくなった。

「うちの父や母はそんなことはまったく存知ておりませんでした。仲人さんに持ちこまれたお縁談ですので、お会いさせていただきました」

しどろもどろになる寸前を、おなつは必死でそうこたえた。

「知らなかったとそちらさんがおっしゃるならば、そのまま信じておくことにいたしましょう。けれどもよしんば知らなかったにしろ、夫同然の男を横奪りされそうになったわたしの気持はおさまりません」

よしみは猫が鼠をいたぶるような気持でいった。

「横奪りだなんて……、そんなつもりは毛頭、ありません……。ただ知らなかったものですから」

おなつは今にも泣きだしそうだ。

「わたしも、あなたをここまで呼びだした以上、弥之さんとわたしの仲の証しをお見せいたしましょう」

よしみは図に乗っていった。いったん切りだした以上、とことんいきつくところまでいかねば気がすまなかった。

よしみはつい熱に浮かされたように、左手を袂の中に入れた。

おなつはよしみが何をするのかわからずに見入っている。

よしみは左手を胸の衿からだして、ひとおもいに片肌ぬぎになった。乳房のふくらみかけたあたりまでがあらわになった。われながら見とれるほどの白くすきとおるような肌だ。その乳房にもっともちかいところに、赤くアザのように血の浮いたところが二、三ヶ所ある。

「おなつさん、素人の娘さんには目の毒だろうけど、これは好き合った男と女が肌をまじえるときに乳繰り合った証しのこりさ。これはね、昨夜、弥之さんが夢中になってつけ

た跡だよ。反対側のお乳にもこれとおなじものが二つや三つはついている。おのぞみならば見せたっていいよ」

よしみは得意になっていった。これこそ昨夜まぎれもなく弥之助がつけのこしていった跡である。

おなつは羞恥と屈辱で今にも気をうしないそうになった。それを必死でもちこたえ、気をとりなおそうとしていた。

よしみはそれをながめて、大層ここちよかった。

「見せていただかなくて結構です」

おなつは蚊のなくような声でいった。

「そりゃあ、あんたは口惜しくて見たくないだろう。あたしだって本当ならばはずかしくて人に見せたくなかったんだ。これであたしと弥之さんとの仲がようくわかっただろうから、ずいぶんと料簡しておかえり。これからは他人さまのものに手をだすんじゃないよ」

よしみが止めを刺すようにいった。いってしまうと腹のうちがすっきりした。

五

順風満帆のよしみの航路の行く手にかすかな翳りが見えてきたのは、翌年の秋口であった。

この年はよしみ二十四歳の年で、いわばよしみの厄年である。けれども以前おたよもい

ったように、よしみの家系の迷信も、彼女だけには通用しないかに見えた。

この年はよしみにとって未曾有といいたいほど盛運の年であった。〈よしみ〉は繁盛に繁盛をかさねて、門前仲町のおなじ町筋にある同業の競争相手〈立川屋〉を身代倒れにおいこみ、隣家と裏地を買収して、建て増しをし、堂々たる店がまえにあらためた。

弥之助の縁談は前年よしみが身をもってぶちこわし、弥之助は今やすっかりよしみの情人になりきっていた。しかも弥之助は仕事の面でめざましい躍進をとげ、中村座の絵看板は彼の専売特許となった。病後の六代目清満は中村座を弥之助にまかせ、市村座と森田座を自分と弟子たちでやることになった。こんなことは鳥居派の長い歴史の中ではじめてのことだった。

九兵衛とのあいだも上々だった。よしみがわずか一年で隣家や裏地を買いとることができたのは、自分だけの力ではなかった。背後に九兵衛がいて、陰で大きな援助をしつづけてくれたからである。

ところが、暑い夏がすぎて、すずしい風が吹きはじめたころから、九兵衛が〈よしみ〉に姿を見せなくなった。こなくなって一ヶ月ちかくがたったころ、ツテをたのんで蔵前の鹿島屋の様子をしらべてもらったところ、九兵衛が卒中でたおれていたことがわかった。

（きっと、たすかるまい……）

そのときよしみは、わるい予感をおぼえた。

もし迷信があたるとすれば、よしみは今年のうちに死ぬことになる。ところが、どうか

んがえても、よしみは近いうちにそんな衰運に見舞われそうな様子がない。あと三ヶ月ほどのうちに急速に運勢がおとろえるとか、悪運にとりつかれそうな予感はしなかった。

(だとすれば、かわりに旦那さまが……)

よしみはふとそんな気がしたのである。強運の持ち主は厄年などに自分ではなく、身のまわりの者に厄を押しつけるということをきいたことがあった。

もしかしたら九兵衛が自分のかわりに厄を背負ったのかもしれないとおもった。そうおもうと不憫な気がしたが、

(でも、弥之さんでなくってよかった)

というおもいが正直なところよしみの心中をよぎった。

九兵衛も弥之助も大事な男であったが、どちらか一方をえらべといわれたら弥之助がいいとおもっていた。両方好きだが、双方五分五分ではないのである。やはり九兵衛には彼の財力を当てにする気持が大きくはたらいていた。そこへいくと、弥之助にたいする気持には一途に燃えあがるものがあった。

それでもよしみは九兵衛の回復をねがった。強欲なところのある男だから、このままでは死なないだろうという気がした。

気にはしながらも、立場上よしみは見舞いにいくことはできなかった。ツテに依頼して消息をきくのがせいぜいだった。

年の瀬がせまった一日、朝も明け方、ときならぬ戸をたたく音におこされた。

商売柄、夜おそく、朝もおそい生活をおくっている。

店の者が戸をあけると、番頭ふうの男が立っていた。

「蔵前からまいりました。鹿島屋の者でございますが、至急女将さんにお目にかかりたいのでございます」

という口上だ。

よしみがでていくと、

「女将さん、主人九兵衛が昨日の夜中なくなりました。もしものことがおこったときは、女将さんに知らせるよう生前いいつかっておりましたので、お知らせにあがりました」

番頭ふうの男はそうこたえた。

くるべきものがきた、というおもいでよしみはその言葉をうけた。

「お線香をあげにおうかがいしてよろしゅうございましょうか」

そうきくと、

「そうしていただけると、主人がよろこびます。ぜひ、お通夜においでねがいたいとおもいます」

「かならずうかがわせてもらいます」

いった先での面倒をおもうと気がおもかったが、九兵衛の供養になることならとおもい、そうこたえた。

九兵衛の葬儀はちかくの浅草寺の年の市の当日、盛大にもよおされた。

よしみは通夜にも葬(とむらい)にも参列した。

九兵衛は遺言でよしみのためにいろいろこころをくばってくれていたようだった。けれどもよしみは九兵衛のこころづかいだけを受けとって、ほかを辞退した。九兵衛には生前できるかぎりのことをしてもらって、それだけで十分だった。もう九兵衛を当てにしなくても、やっていける自信があった。

厄ばらいがすんで、年が明けた。

よしみは二十五になった。

「女将(おかみ)さん、二十四がすぎて、よかったですね。もうこわいものなんかないでしょう」

よしみの厄年がすぎて、おたよもよろこんでくれた。

（あたしの厄は、鹿島屋の旦那さんがみんな背負ってくれたのよ）

よしみは腹のうちでそうつぶやきながら、

「これであたしも、大きな荷がおりたよ」

屠蘇(とそ)をおいしくいただきながらにっこりわらった。そして、

（あたしには、弥之さんがいてくれるから……）

ともう一度つぶやいた。

それいらいよしみは二十四の厄のことをすっかりわすれた。母や祖母がその年で死んだこともほとんどおもいださなくなった。

やがて、夏がきた。

弥之助との仲は喧嘩(けんか)もなく、むつまじかった。よしみは弥之助と縁組するにしろ、しないにしろ、今までの仲がつづけばいいとおもっていた。

今年も、夜店や露店に、朝顔の鉢がならびだした。

よしみは毎年、朝顔の鉢を買っている。

今年も八幡境内で紅色(べにいろ)の鉢を買った。

その翌日、鉢の位置を日あたりのいい場所にかえようとおもって、持ちあげた。そのとたん、

「あっ……」

と声をもらした。持った場所がわるく、おもわず取りおとしてしまった。

鉢は敷き石の上に落ちて、無残にくだけた。

よしみは朝顔をべつの鉢にいけなおしたが、落ちてくだけたいやな音がいつまでも耳の奥にのこった。

朝はやく、みながまだ寝ているころあわただしく玄関の戸をたたかれたのは、数日後のことだった。

よしみは不吉な予感をおぼえながら玄関にでていった。

戸のむこうには、弥之助の家の若い者が立っていた。

よしみの顔が蒼(あお)ざめた。胸が音をたてて鳴りだした。

「昨夜(ゆうべ)、若旦那が急病でたおれ……、明け方、息をひきとりました」

若い者が固い表情のままいった。
よしみは返事ができなかった。なんと返事をしたかおぼえていなかった。
若い者が去っていってから、膝（ひざ）から下の力がぬけて、よしみは土間に腰からくずれおちた。
（弥之さんまで、あたしの身替りに……）
こらえていた涙がわっと堰（せき）を切った。

よしみは弥之助の通夜にも、葬儀にもでなかった。自分をささえきれるかどうか不安だったのだ。
七日間、店を閉じて、自分だけのとむらいをこころゆくまでやった。
八日め、ようやく店をあけた。このときは、よしみの顔からもうかなしみの翳（かげ）りはきえていた。
「これから、一生懸命はたらかなければ。はたらいているうちに、また男なんかできるだろう」
おたよにそういいのこし、よしみはお客の座敷へにこやかに顔をだしてまわった。

寒椿落ちた

一

雨あがりの道である。

家をでたときから道がぬかるんでいて、やや足もとがあぶなかった。

おつたははじめのうちこそ足もとを気づかっていたが、商用であちこちまわっているうちにいつしかそんなことはわすれてしまった。いつもは手代か小僧をつれてあるくのだが、今日は手がたりなくて一人ででてきたので、商売の袋物を風呂敷につつんでかかえてあるいていた。

日に二、三度はおつたが顧客先まわりをしなければならない。夫の八重吉は商売ぎらいの道楽者だから、おつたが店の商売をささえていた。

おつたがこうして顧客先をまわっているあいだも、八重吉は柳町にかこっている妾のおいくのところに入りびたっているにちがいないのだ。八重吉の女癖のわるさについては、おつたはもうほとんどサジを投げていた。夫の女ぐるいは今にはじまったことではない。年がら年中のことなのだ。八重吉が家にいることは月のうち半分もない。

顧客先の一軒でおもわぬ長居をしてしまったので、今日の予定をおえたときは夕方ちかくなっていた。

（いそがねば……）

とおもって八丁堀の町並みをあるいているとき、ぬかるみに片足をとられた。

「あっ……」

声をあげて、すべりそうになった足をようやくささえた。が、片足でふんばったために草履の鼻緒を切ってしまった。しかも横の鼻緒を二つともだ。

鼻緒の切れた草履を前にしておつたは途方にくれた。

前の鼻緒ならばすげようもあるが、横の鼻緒二つではどうにもならない。このちかくでは履物屋もない。

おつたはうらめしそうに鼻緒の切れた草履をながめていた。裸足であるいてかえるわけにもいかない。

そのとき、前から男がやってきた。

三十代も半ばくらいの町人だ。

おつたが声をかけようとしたとき、男のほうがちか寄ってきた。

「これじゃあ駄目だ。なおしようがない」

男はおつたの草履をながめていった。ぶっきら棒だが、親切そうな男である。

「なんとかなおりませんでしょうか」

「駄目だな、無理だよ」

男の声が無情にひびいた。

「家は京橋ですから、このままではかえれないんです」

今はこの男にたよるしかないとおもっていった。

「おれがおぶっていってやろう。なに、はずかしがることはないさ」

男の言葉は意表をついたものだった。そして男は無造作に路上にしゃがんで、背中をむけた。

「そんな、ご迷惑なことできません」

おつたがたじろぐと、

「人は相身たがいだ。遠慮はいらないよ。人に見られたって、かまやしない」

男のやや野放図な言葉におつたはすくわれたような気持になった。

「本当にいいんでしょうか」

男の言葉にひきずられて、おつたはあまえてみようかという大胆な気持にさそわれた。

「家までいくのがはずかしいのなら、いちばんちかくの履物屋までつれていってあげよう」

そういう男の背中がおつたを手まねいているような気がした。

決心をして男の背におぶわれた。

男の首へ手をまわすときはさすがに気がひけたが、そんなことをいっている場合ではなかった。おもいきって羞恥心を捨てた。

大きくて、頑丈そうで、居ごこちのよい背中であった。

とおりがかりの者がけげんな顔で見かえっていった。

「すいません」

というと、

「気にすることはない。それにあんた別嬪だから、おぶり甲斐もあろうというものさ」

男は冗談をいいながらあるいていった。

夕方ちかくとはいえ、まだ人通りはあるし、店はあいている。

人々の視線にさらされながらおつたは負われていった。そのうちに人々の視線が平気になった。

「らくちんで、とてもいい気持。子供のころをおもいだします」

男がざっくばらんな人柄らしいので、おつたはそんなことまでいえた。

「あんた、とてもいい女だな。他人の女房でなければ、このままおれん家までつれていっちまいたいところだ。そして無理矢理にでも、おれの女房にしちまいたい」

男もそんな軽口をたたいた。

「まだお独身なんですか」

その軽口におつたは乗せられた。

「一度は所帯をもったこともあるが、今は一人だよ」

「そうなんですか、もったいない。わたしが亭主持ちでなければ、このままあなた様の家へつれていかれたいところです」

男の顔が見えないので、自分でもおどろくほど大胆なことがいえた。

おつたは自分が自分でないような気がした。べつの女にでもなったような錯覚をおぼえた。今までこんな冗談を口にしたことはなかった。

「そんなことをいっていいのかな。一度口にしたら、本当にそうなることも世の中にはあるもんだ」

男はわらっていった。

そのとき一瞬、おつたはこんな男が自分の夫だったらどんなにいいかと本当におもったのである。

「そうなれば本望ですよ」

そうこたえて、これが自分の本心かそれとも冗談か、一瞬区別がつかなくなっていた。狐にでも憑かれたか、それともこの男の魔術にかかったのかとうたがった。

やがて、にぎやかな町並みにでた。

すこし先に、履物屋が見えてきた。

一歩でも遠まわりして、そこに着くのをおくらせてほしいとおもった。

「おれは、栄太郎っていうんだ」

履物屋の店頭まできたとき、男は名をいった。けれども住居も、何者であるかもいわなかった。

「わたし、おつたといいます。どうもありがとうございました。大変たのしゅうございました」

おつたは礼をいい、名をあかした。それ以上はあかさぬほうが自分のためだとおもって、男の背をおりた。

二

あたらしい草履をはいて丹後屋袋物店にもどってきたとき、おつたはもう栄太郎のことをわすれていた。

長年奉公している番頭幸兵衛がいるが、丹後屋はおつたでもっている。帳付けも仕入れもおつたがやる。

丹後屋にとついでまだ三年めだが、家事も商売も自分できりまわしている。使用人が女中をふくめて五人いるが、その世話もする。

八重吉はまったくあてにできないし、幸兵衛はなんでもおつたに相談してくるので、結局なにもかも自分でするようになった。子供もいないので、なんとかこなしていくことができるのである。

「お内儀さん、お留守のあいだにこのような手紙がまいりました」

おつたが帳付けをしているところに、幸兵衛が手紙をもってきた。

京ばし　たんご屋内　おつたさまへ

宛名はそうしるしてあるが、裏がえしても差出人の名はなかった。

ちょっと気になったが、先に帳付けをしてしまおうとおもい、封を切るのを後まわしに

した。

そのうちに客の応対や、雑用がひっきりなしに入ってきて、つい手紙のことをわすれてしまった。

店じまいをおえて、おそい夕餉(ゆうげ)にしようとしたとき、おつたは例の手紙のことをおもいだした。

ややおもい気持で手紙をとった。

宛名(あてな)は女文字である。

おつたがこの手紙を読むのを後まわしにしたのは、なんとなく内容がよくないものではないかという予感があったからだ。

おつたはおもいきって、封をひらいた。

かなり達者な女文字がつらねてある。

目をとおしていきながら、

（ああ、やっぱり……）

とおつたはおもった。いつかこういう報せ(しら)がくるのではないかと漠然と以前からおもっていた。

わたしは十七歳のころから旦那さまの八重吉さまのお世話をうけているおいくという者で、今年で三年目になります。木挽町(こびき)の水茶屋づとめをしているときに旦那さまに見染められ、半年ものあいだほとんど毎日のようにかよいつめられ、その熱心さにほだされて、

お世話をうけるようになりました。おつたさまというお内儀さんがいらっしゃることも承知しております。かねて一度はそちら様にごあいさついたしたいとおもっておりましたところ、出産などのこともあって、ついのびのびになってしまいました。ついでに申しそえますと、昨年秋に男の子が生まれ、旦那さまもたいそうおよろこびになってくれております。わたしのほうがおちつきましたら、ぜひそちらにごあいさつにうかがいます。

大体そういった内容の手紙であった。

いつかはくるだろうと予想した手紙ではあったが、やはり平静ではいられなかった。胸の動悸(どうき)は音がきこえそうなほどはげしかった。手がふるえて手紙の文字はたえず小刻みにゆれていた。出産という文字が目の中にとびこんできたときには、おもわず声をあげそうになった。八百助という男の子が夫にいると知ったときは、目の前が本当に真っ暗になった。

女が名乗りでてくるかもしれないとはおもっていたが、その女に子がいるとまでは想像していなかった。その意味ではおつたが甘かったのだ。八重吉と三年の付き合いといえば、おつたがとついだ時期とほとんどかさなる。新世帯のさなか、八重吉は毎日のように木挽町へかよっていたことになる。

しかもおつたにまだ子供ができないだけに、外の女とのあいだに今年二歳になる男の子がいることは衝撃的であった。女の大きな役目の一つが出産であるとするならば、おつたはおいくという女に負けたことになる。おいくは自分の勝利をおつたにつげるためにこの

手紙をおくってきたのだ。

　おつたは体から力がぬけていきそうになった。おつたは丹後屋にとついでいらいずっと頑張ってきたが、妊娠、出産のこととなると、努力だけではいたし方ない。自分が石女(うまずめ)であるとはおもわなかったが、まだ男の種子(たね)をはらんだことがないのは事実である。

　所帯をもってからというもの、ほとんどひっきりなしに八重吉の女癖のわるさになやまされてきたが、今度はいままでと少々ちがうようだ。芸者、水茶屋女、女中……など、八重吉は自分で手をだしておいて始末に負えなくなると逃げだしてしまうのが例である。そうなったら、おつたがでていって尻ぬぐいをしなくてはならないのだ。

　おつたは八重吉の尻ぬぐいをするために丹後屋にとついできたも同然であった。今までは、悔(くや)しいおもいをしながらも後くされのないよう始末してきた。

　けれども今度はおつたの手にあまりそうな予感がした。この事実にどう対応してよいものやらわからなかった。

　かといって実家(さと)へ相談にいくわけにもいかぬ。

　この夜はじめて、おつたは布団に入ってから涙を一すじこぼした。

　やがてまどろみはじめたころ、勝手口の戸をひらく音がきこえた。

　八重吉がもどってきたのだ。

　おつたはむかえにはでずに、布団の中で寝入ったふりをしていた。こんなときにむかえにでれば男は立場がないだろうとおもうからだ。

　しばらくすると、八重吉がそっとした足取りで寝間に入ってきた。

　酒をだいぶ飲んでいるようだ。酒のにおいがぷんとした。

　部屋には常夜灯のほのぐらい灯りがついている。

　八重吉は着物もぬがずに、そのままの恰好(かっこう)でおつたの布団にもぐりこんできた。

　背中をむけていると、八重吉がおつたの体へ手をのばしてきた。自分の妾(めかけ)が女房へ手紙をだしたことなど知らないのだ。

（けだものっ）

　おつたはこころのうちでののしったが、夫の手をこばむことはしなかった。

　夫にはしたがうもの、さからうものではないという教えを子供のころからうけていたからだ。

　八重吉は家を空けてもどってきた夜はかならずおつたを抱く。おつたはいやいやながら抱かれてきた。

　今も八重吉はおつたの寝巻に手を入れ、乳房をまさぐってきた。

　しばらくは辛抱していたものの、嫌悪感がこみあげてきた。

　おいくという妾の体をさんざ愛撫(あいぶ)してきた手でさわられているとおもうと、その個所に鳥肌のたつおもいがした。

　八重吉の手がしだいに下におりてきた。いつもは我慢しているうちに抱かれてしまう。

　おつたは今夜はじめて夫の手をはらった。

八重吉は想像もしていなかったとみえて、すごすごと自分の布団にもぐりこんで、そのまま寝てしまった。

おつたはその夜一睡もしないで朝をむかえた。おいくという女のこと、八百助という子供のことなどかんがえているうちに自分のこしかた行く末が案じられてきたのである。

（わたしが丹後屋にいるのも、そう長くはない……）

そんな予感さえ浮かんで、おつたはまんじりともしなかった。

つくづくと、自分の男運のわるさをなげいたが、かといって実家へつげ口にもどろうという気はなかった。

三

おつたの実家は、神田紺屋町の藍染橋のちかくで、紺定という紺屋をやっている。その名のごとく、町の三分の一くらいは紺屋とそれに関連する店がしめている。

紺定はその中でも名を知られていた。父の定吉で三代目になる。

おつたは四人の兄弟姉妹のうちの上から二番目の長女である。器量のよさは生まれたときからだった。幼いころ、母がおつたをつれてあるくと、その可愛らしさに人々が寄ってくるという有様だった。

娘になると、有名な大丸屋呉服店がおつたの美人画を広告につかったくらい評判になった。器量よしというとえてしてそれを鼻にかけた性格のよくない娘もおおいが、おつたは

素直なうえに、親が顔負けするほどのしっかり者で、娘のころから熱心に家業の手つだいをして看板娘の役割をはたした。

いいことずくめの娘であるのに、おつたは嫁きおくれた。丹後屋の八重吉にとついだのは、二十歳になった年だった。当節、十七、八がいわゆる妙齢で、それをすぎると、嫁きおくれなのだ。

それまで縁談がなかったのではなかった。

ずっと以前に許婚がきまっていたのだ。松之助という三歳年上の相手がいて、おつたもはじめから松之助の女房になるものときめていた。

松之助はおなじ町内の呉服屋の跡取りで、気立ても性格もいい若者だった。

祝言は松之助が二十歳になってからという約束がかわしてあった。ところが、その年の春、松之助は流行り病にかかり、半年間ほど寝ついたあげく、あっけなく他界してしまった。

おつたは男運がわるいのである。

松之助の両親はおつたが妙齢のさかりながらもとつがないのを見て遠慮なく嫁にいくようしきりにすすめてくれた。けれどもおつたは落胆が大きく、ほかにとつぐ気がしなかった。紺定の両親も娘の気持がわかっていたので、無理に縁談をすすめなかった。

おつたにはすすめなかったが、それまでは縁談は山ほどあった。しかもいい縁談ばかりであった。

ところが妙齢をすぎてもどこへも縁組をしないおつたにたいして、縁談がめっきり減りはじめた。あの娘はどこへもとつがない、といった噂がたったからである。

兄が嫁をとり、妹も嫁にいって、自分の身辺がさびしくなったときおつたはもう二十歳になっていた。そんなときひょっこり丹後屋から縁談をもちこまれたのだ。

器量ごのみの八重吉がどこかでおつたを見染め、両親や仲人をたてて、やいのやいのと矢の催促で縁談をすすめてきた。紺定の両親もここらあたりでと縁談をうけたのであった。

おつたは見合いではじめて八重吉を見たとき、かくべつの感情はおこらなかった。おだやかそうな人柄に見えたし、両親もやさしそうだった。袋物屋という家業にもなじめそうな気がした。

「今嫁にいかなければ、一生嫁かず後家になっちまうよ」

父の定吉の言葉で、おつたはとつぐ決心をした。

とついでからもとくに感慨はなかったけれど、一生懸命はたらいた。

「いったん嫁にいったら、そこがおまえの家だ。実家をあてにしてはいけない。もどってくることのないように」

定吉にそういわれたので、家のことも商いのことも熱心に、身を粉にしてつとめた。根がしっかりものだけに、家事も商いもきらいではなかった。

おつたがとついでから丹後屋の商売はぐっとよくなった。目に見えて顧客がふえ、繁盛しはじめ、

「丹後屋にはまるで福の神が舞いこんだようだ」

とまわりからいわれた。

おつたがそうして家の内外ではげんでいるときに、八重吉は外でさんざん女遊びにうつつをぬかしていたのだ。

おつたもはじめは迂闊ながら、それに気づかなかった。八重吉は出商にいそがしくはたらいているのだろうとおもっていた。新所帯のころから八重吉は家を空けることがたびたびあったが、それも商売のためによんどころないのだろうと信じていた。

店の使用人たちがときに〈ヤの字〉という言葉をつかっていた。はじめは気にもしていなかったが、おつたにかくれてその言葉がつかわれていることに気づいた。おつたもおかしいとおもい、ある日幸兵衛を呼んで問いつめた。

京橋からそう遠くない柳町に八重吉が妾をかこっていることがわかったのは、幸兵衛がとうとう白状したからである。このときにおつたの目の鱗がおちた。

それからは、でるわでるわ、八重吉の女ぐるいの証しがつぎつぎにあらわれた。以前いた女中ともできていたことがわかった。

女郎あそびはとうに卒業していて、芸者や水茶屋女に入れあげていた。芸者や水茶屋女は玄人ではあっても、金だけではいうことをきかない。それに素人女よりも垢ぬけしているのがいいらしい。

八重吉が家を空けていたのは、すべて女あそびのためだった。八重吉が商用といってつ

かっていた金はことごとく女のためであった。

それらを知っておつたは愕然としたけれども、泣いたり、わめいたりはしなかった。おこって実家へかえることもなかった。

おつたは女としての面子をうしない、体面をないがしろにされ、屈辱をあじわわされたが、我慢してたえた。悋気は女のたしなみの外、と世間でいわれているのを知っていたからである。

八重吉の女癖のわるさは病気のようなものであった。ほかの女に惚れたからといって、おつたにつらくあたるのではない。その反対で、おつたを離縁しようという気持はすこしもないのだ。

おつたには家内のことも商売もたよりっきりで、自分一人では家も店も立派にやっていける自信もないようなのである。おつたがいなければこまることは誰の目にもあきらかである。

だから、おつたは両方の切りもりをやらなければならない。好むと好まざるとにかかわらず、いつも一生懸命はたらいていなければならなかった。

おつたはおいくという女からきた手紙のことをわすれたわけではなかった。頭の隅にはいつもそのことがあった。

いつか、おいくが八百助をつれて自分の前にあらわれる日がくるだろうとおもっていた。

それにたいするこころの準備ができているわけではなかった。

子供のころからおつたは、しっかり者だとか、よくできた娘だとかいわれてきたが、自分ではそのようにおもったことはなかった。しなければならないことを一生懸命やっているだけなのだ。自分が他人よりすぐれているとはおもってもいなかった。

おいくが八百助をつれて丹後屋にやってきたら、自分がどう対応することができるか、おつたには自信がなかった。いたたまれなくなって卒倒でもするのではないかとおもった。

そんな日がとつぜんやってくるのをおつたは恐怖のおもいで待っていた。

四

恐怖の日がやってきた。

おいくと八百助がたずねてきたのではなかった。偶然外で出会ったのでもない。

一通の手紙がまたきたのである。

今度も、差出人の名はなかった。

けれども宛名の書体をおつたはおぼえていた。書体は前回の手紙のときとおなじであった。

ぶるぶるとふるえる手で封を切った。胸も音をたてていた。

やはりおいくからの手紙であった。

できるなら読みたくはない手紙だが、その気持とは裏腹におつたの視線は文字の上をはしっていた。

前回の手紙とははじめから様子がちがっていた。

『はいけいごぶさたいたしております。おつた様にはまだ、丹後屋にいらっしゃるのですか……』

ではじまる手紙であった。

おつた様がいつまでも丹後屋にいすわっていらっしゃるから、わたしたち母子はいつまでも、妾と妾の子にあまんじていなくてはならないのです。八重吉さんのこころはとうの昔におつた様をはなれ、わたしたち母子のものになっています。八重吉さんはこころのやさしい人だから、形ばかりでも妻と名のつく者を追いだすわけにはいかないので、そのままにしてあるのだといっています。

あなた様はいい嫁、いい内儀でとおしているつもりかもしれませんが、そんなのは体裁ばかりの嘘っぱちです。そのことは八重吉さんがはっきりといっています。丹後屋の内儀はあなた様でなくてもつとまります。わたしも八重吉さんもあなた様が丹後屋をでていく日を待っているのです。いいかげんにしてください。わたしと話がしたければ、いつでもこちらは応じます。逃げもかくれもいたしません。わたしには八重吉さんがついているのですから……。

という大胆不敵、自信にあふれた内容の手紙であった。

読みおわって、おつたは呆然となった。

おいくへの怒りというよりは、八重吉への怒りが一度に噴きあげてきた。今までおさえ

てきたものがすべて、なにもかも憤りになった。

外で女とあそんだり、かこったりするのは我慢してきたが、自分の女に女房をないがしろにさせたことがゆるせなかった。我慢の限界をこえていた。

前回の手紙のときは、女の背後に八重吉の存在はかんがえられなかった。あくまでも女が一存でだした手紙だとかんがえられた。

けれども今回はそれがちがうのだ。二人が結託して手紙をだしたとはいえないまでも、女の横紙やぶりを八重吉が暗黙のうちにみとめている節がはっきりと感じられた。

(これではもう駄目……)

おつたは手紙を読みおえたときそうおもった。

(なにもかもおしまい。なんてわたしは馬鹿だった)

涙をながす余裕がこころのうちになかった。自分の丹後屋におけるこれまでのことに悔いばかりおぼえた。

自分がこれからも丹後屋にのこらなければならない理由はひとつも見つけられなかった。丹後屋にいることこそ不合理だと感じられた。

(もう、ここにはいられない)

おつたは丹後屋にとついできてからはじめて、実家にもどることをかんがえた。それ以外におつたのとるべき道はなかったのだ。

実家にはもどってくるなととつぐときにいわれた定吉の言葉をおもいだしたが、仕方が

なかった。

「おつた、よくもどってきたな。おれも母さんも、おまえがかえってくるのを待ってたんだ」

何もいわずにおつたが紺定にもどってきたとき、定吉は喜怒哀楽の表情をすこしも見せずにいった。

おつたは両親に何もいわなかったが、とついでからのことを定吉は大体知っていたのだ。

「おまえは本当に、男運がわるいんだね」

母のおせいがいった。おせいは松之助のこともかんがえあわせていったのだ。

「男運なんてものはないよ」

と定吉はいったが、

「器量も気立ても申し分ないのに、どうしておまえは男運がないんだろう」

おせいはつくづくなげいていった。

「そんなものがあってたまるか」

定吉は吐き捨てるようにいい、あくまでもみとめようとしなかった。

「もうそんなことはどっちでもいいの。わたしはやっぱり紺屋の娘だったのよ。とついだのがまちがいだったわ。うちで紺屋のてつだいをさせてもらうわ」

おつたが涙も見せずにいうと、

「それがいい、そうすることだ」

定吉はつぶやくようにいった。

こうしておつたは紺屋の娘にもどった。

紺染めならば、昔とった杵柄である。昔といっても、三年前にすぎぬ。

袋物を売る手を藍染めに代えて、藍玉づくり、カメのぞき、ご汁づくりとおつたはまた紺定ではたらきはじめた。

勘はすぐにもどってきた。娘のころから藍にまみれて家業を手つだってきたので、数日もたたぬうちに手加減、塩梅をおもいだした。もとの環境になれるのははやかった。

家業にはげむことによって、おつたは三年にわたってうけた傷をいやそうとした。もともとはたらき者だから、家業を手つだうことはすこしも苦痛ではなかった。藍ガメのつよい臭いも我慢することができた。

冬、家にもどり、東風吹くようになったころには、おつたは自分が袋物屋を三年にもわたって切りまわしてきたことが遠い夢のようにおもえてきた。本当は丹後屋へとついだのも夢の中の出来事で、自分はずっと紺定ではたらいていたのだという錯覚さえおぼえるときがあった。

はたらいていると、やすらかな気持であった。紺屋の娘には藍玉づくりや藍染めの仕事がいちばん合っているようだ。藍にまみれて、おつたははたらいた。

出もどりとはいっても、おつたはまだ二十四歳になったばかりだ。もともと容色がすぐ

れているうえ、子供をうんだこともなかったので、どうかすると二十歳（はたち）前の娘のように見えた。

縁談もぽつぽつとまたおこってきた。それも後妻ではなくて、初婚の相手だ。

だがそういう話は、おつたの耳に入る前に、定吉とおせいがことわってしまうのがつねだった。たまにおつたの耳に入ることはあっても、すこしもこころはうごかなかった。

「このまま家においとくのはもったいないけど、あの娘（こ）は男運がわるいから、ずっとこうしといたほうがいいんですよ」

あるとき、おせいと定吉とがおつたのことをはなしているのをふと立ち聞きした。

「そうだなあ、そのほうがいいかもしれない」

定吉も本音ではおせいにさからわなかった。

そんな話をきいても、おつたにはなにも感じなかった。もう自分にはかかわりのないことだとおもった。

五

「浴衣（ゆかた）を染めてもらいたいんだが」

男はそういって、おつたの前に立った。

「おれのうちは、金杉（かなすぎ）で旅籠（はたご）をやってるんでね。浴衣がたくさんいるんだ」

男はさらにそういった。

男の目がわらっている。

つぎに顔がなつかしそうにわらいだした。

「まあ、栄太郎さん……」

この男が自分の前に立っているのがおつたには信じられぬくらいだった。

「おれの名をよくおぼえていてくれたな、おつたさん」

昨年、おつたをおぶってあるいてくれた男である。

とつぜん栄太郎があらわれたことにおどろきはしたが、すぐになつかしさがこみあげた。たった一度しか会ってない男とはおもえなかった。

「よくここがおわかりになりましたね」

うれしさでおつたはそういった。

「いやあ、ずいぶんさがしたよ。その前に丹後屋をさがすのに苦労したんだ。京橋かいわいの袋物屋をあたったんだ」

栄太郎はすこし照れたようにいった。

あのとき、おつたは商売物の袋物を持っていたので、栄太郎はそう見当をつけたのだろう。

「わたしをさがしてくれたんですか」

おつたの声はうれしさでうわずっていた。見栄（みえ）も体裁も栄太郎の前では必要なかった。

「離縁したときいたんで、今度はここをさがしたよ」

「そうなんです。わたし昨年から実家にもどっているんです」
「それでさっそく、浴衣の染めをたのみにきたんだ。おれは立派な客だよ」
そういって栄太郎はまたわらった。
「栄太郎さん、いつぞやとはちっともかわっていらっしゃらないんですね。女はすぐにかわってしまいますけど」
あのときのままの栄太郎がうれしかった。栄太郎におぶってもらったことが昨日のことのようにおもえた。
「おれはまた会えるような気がしていたんだ。だから、住居もいわなかった」
「わたしもそれをおききしませんでした。わたしの住居も申しませんでした」
おつたもあのとき無意識のうちに、栄太郎と縁があるような気がしたのだ。人の内儀でありながら、ほかの男と縁ができてはまずいと心配して、栄太郎のところへ礼にもいかなかったのである。
「おつたさん、あのときいった言葉をおぼえているかい」
おつたが気にしていることを栄太郎は口にした。
「おぼえていますとも」
そういってから、おもわずぽっと顔をあからめた。
ここは紺定の店頭である。店の奥には使用人もいる。紺暖簾をわけていつ客が顔をだすかもしれない。

「それはよかった。わすれられたらこまるところだ」
栄太郎はほっとしたようにいった。
「栄太郎さん、まだお独身なんですか」
「おれは相かわらずだ。待った甲斐があったというものだ。おつたさんも亭主持ちではなくなった」
会って二度目の男女がこんな会話をしていることにおつたは不思議さをおぼえた。だが、栄太郎の顔を見ていると、それがいっこうに不自然でないのだ。
おつたは商売をはなれると、人にたいしてなれなれしくするのはきらいなたちだが、栄太郎が相手だと、なんでも素直になれてしまう。これを相性というのだろうかとおもった。
「今は出もどりの厄介ものです」
そういうと、
「出もどりは娘のいちばん大きな親不孝だ。そんな親不孝は一日もはやくやめることだよ」
「まあ、ずいぶんなことをおっしゃいますね。うちの両親はよろこんでくれてますすけど」
「それは子へのおもいやりだ。真にうけてはいけない」
「では、わたしは一体どうすればいいんですか」
「なるべくはやく、もう一度嫁にいくことだ」
「そんなことといっても、もらってくれる人がなければ」

「おれがもらってあげるよ。いやではあるまい」
目だけでわらって栄太郎はいった。
店頭でこんな口説(くど)き方をする者もいない。
けれどもおつたはいやな気はしなかった。
丁度いいところに邪魔者がきた。定吉はけげんな顔で栄太郎に見入った。
「父さん、いいの。わたしのお客さんです」
そういうと、
「浴衣(ゆかた)の藍染め十着、よろしくおねがいします。金杉の旅籠(はたご)ツバキ屋にとどけてくれたらありがたいんだが」
と栄太郎はいいのこしてかえっていった。
おつたがツバキの模様と屋号を染めぬいた浴衣を持って金杉に栄太郎をおとずれたのは、それから半月ほどたったころだった。
ツバキ屋は金杉通りの二丁目にあった。金杉通りは東海道であるから、この通りには旅籠や木賃宿、茶屋、食べ物屋などが軒をならべており、にぎやかなところである。
ツバキ屋は東海道に面し、間口もひろいまずまずの旅籠である。
使用人たちの客あしらいもよくしつけられている。
おつたは用件をつげると、座敷へ招じられた。女中の案内で廊下をとおって、座敷へむかった。

廊下は庭に面しており、庭には見事な椿の株がある。花の咲くところはさぞ見ごたえがあるだろうと想像した。
座敷へ入って、おつたはあっとおどろいた。
栄太郎だけがいるのではなかった。栄太郎の両親とおぼしき老夫婦がきちんとすわって、おつたを待っていた。
おつたはおもわず、かたくなった。
「神田紺屋町紺定の娘つたでございます。このたび浴衣染めのご注文をいただき、ありがとうございました」
上気していうと、老夫婦はただにこにことわらっている。
栄太郎が両親を紹介し、
「わざわざとどけてくれてありがとう」
といった。染めあがった浴衣地をとどけさせたのは、栄太郎が両親におつたをひきあわせるためだった。
（そんなことなら、一言いってくれればよかったのに）
胸のうちで不平をいったが、おつたはよろこびのほうが大きかった。
両親がおつたを見る目はもう栄太郎の嫁を見る目であった。

六

二人の祝言は、その年の、厳冬十二月初頭の吉日ときまった。

祝言当日。ツバキ屋の店頭には幔幕が張りめぐらされ、家紋を入れた提灯をいくつもならべて、家族をはじめ親類縁者たちが紋服姿に容儀をととのえて、祝言の式のはじまりを待った。

おつたは髪をおすべらかしにたらし、金襴緞子の帯、白無垢の花嫁衣裳を着て乗り、家族、親類の者たちと、長持や箪笥とともにツバキ屋に到着した。

ところが花嫁の行列をむかえにでるはずの栄太郎の姿が見えなかった。かわりに花婿の父の栄助が紋服姿に上下をつけて、神妙な面持ちで店頭にむかえにでた。

「栄太郎は、病気で今日の式にでられぬ伯父のところに挨拶へいってかえりがおくれております。おっつけもどるでございましょうから、花嫁は化粧の間へお入りください」

栄助はすまなそうにいった。祝言の式におくれるなんてまったく栄太郎らしいとおもいながら、おつたは化粧の間にあてられた部屋にとおった。

ツバキ屋は今日一日、客をすべてことわって、祝言一色につつまれている。番頭から女中まで使用人たちもにぎにぎしく祝言の仕度にいそがしい。

おつたは化粧の間で両親や兄弟妹にかこまれて式のはじまるのを待った。

化粧の間から外が見える。掃ききよめられた庭に椿が満開の花を咲かせているのが見え

た。冬咲く種類であるから、寒椿である。

満目蕭条たる中に濃紅に咲きほこる花は目もさめるばかりである。

時間はたったが、栄太郎はもどってこぬ。

おつたときた紺定屋の者たちはなんとなくそわそわしはじめた。ツバキ屋の人々も店頭にでてみたり、手代を伯父の家のある芝三島町へはしらせるなどして、栄助もいらいらしている様子だ。

けれどもおつたは一人ゆったりとおちついていた。少々栄太郎のかえりがおくれようとすこしも気にしてはいなかった。おつたは今幸福にひたり、幸福をかみしめていた。

これまでの松之助や八重吉とのかかわりはみんな嘘で、今はじめて自分の本当の人生がひらけるのだという気がした。今までの男運のわるさもこれでとりかえせるとおもった。

栄太郎が半刻おくれようと、一刻おくれようと日暮れまでにもどってくれればいいといった気持であった。

そのころ、栄太郎は東海道、芝の大通りを駆けていた。

伯父の家で祝い酒をつい飲みすごして、時間をわすれてしまったのだ。さすがにはじめは一瞬蒼ざめたが、すぐにツバキ屋へむかってはしりだした。三島町から金杉まではそう遠くない。

金杉橋の欄干が前方に見えてきたとき、とつぜん一頭のあばれ馬が四半丁ほど先の辻に

あらわれた。タテガミをおったてたたくましい栗毛だ。この道は東海道であるから、人馬往来のさかんな道だ。ときたまこうしたことがある。

「あぶないっ！」

栄太郎はさけんで、まっしぐらに前方へ駆けた。

道の中央に立ち往生して泣いている五、六歳の童女が見えたからである。

栗毛はものすごい勢いで土埃（つちぼこり）をあげて、疾駆してきた。

一瞬はやく童女をたすけだせると栄太郎はおもった。が、多少酔いのまわっていたのが誤算だった。

童女を抱きあげ、逃げようとした瞬間、疾駆してきた栗毛が栄太郎の腹をおもいきり蹴（け）りあげた。

栄太郎は童女を抱いたまま、三、四間飛ばされ、血をはいてそのまま意識をうしなった。野次馬たちが駆け寄り、童女は大きな泣き声をあげたが、栄太郎の意識は二度と回復しなかった。

栄太郎が路上でこと切れたとき、ツバキ屋の庭では咲きほこった寒椿の一輪が、風もないのにぽとりと落ちた。

浅草寺藤娘

一

おふじは立ちどまって、一瞬思案した。

(遠まわりをしようか、それともこのままいこうか……)

前方の路上に、野良犬が寝そべっている。

図体(ずうたい)は大きくなく、子供くらいの茶色い犬だが、おふじは犬が大きらいだ。幼いころ、仔犬に向臑(むこうずね)をかまれ、血をながして泣いてかえってからい犬がきらいになった。

遠まわりをするのは億劫(おっくう)だし、獰猛(どうもう)そうに見える犬ではないので、勇気をふるいおこしてあるきだした。

そのとき背後から足音がきこえたので、ややこころ丈夫になった。この道をぬけて、ひとつ横丁に入ったところがおふじの家である。

(何事もなければいい)

とねがいながら道の端をあるいていった。道幅は二間もない小路である。ところが、それまで寝そべっていた犬がおふじがちかづくと、いきなり立ちあがり、ひくい唸(うな)り声をたてた。

とたんに、おふじは立ちすくんでしまった。日ごろは勝ち気で、男の酔っぱらいをものともしないおふじだが、犬と名のつくものにはからきし意気地がない。

わ、わんっ

吠(ほ)えつかれたとたん、ちいさな悲鳴をあげていた。

おふじのあわてぶりに犬はつけこんで、いっそうけたたましく吠え、威嚇(いかく)しながら足もとをねらってきた。

おふじは着物の裾(すそ)をみだして路上を右往左往した。こうなるともうどうしてよいかわからないのだ。

犬は面白がって吠え、威嚇し、嘲弄(ちょうろう)しながらおふじの周囲をまわった。

もう生きたここちはしなかった。

このとき、背後から人影がとびだした。

「この野郎っ」

叱咤(しった)するなり、その男は片足で犬の顎(あご)あたりをしたたか蹴上(けあ)げた。

きゃん

情けない悲鳴をあげて、野良犬は尻尾をまいて逃げていった。

まったく簡単に撃退したものである。

おふじは地獄の入口から生還したような気持になった。

「ねえさん、野良犬なんかに見くびられちゃあいけないよ。犬ってやつはつけあがるんだ」

そういった男がいかにもたのもしく見えた。

「どうも、ありがとうございました。本当にたすかりました。犬にはつい見くびられてしまうんです」

おふじは礼をいった。

「ねえさん、申年の生まれだな。きっと相性がわるいんだ」

男は図星をさした。三十前後の年恰好で、くだけた感じのする男だが、いや味はない。ざっくばらんで、好感がもてる。

「ほんとに犬とは相性がわるいんです。わたし、おふじといいます。家はこの先なんです」

安堵感から、言葉がなめらかになった。

「ねえさん、たいそうな別嬪だ。犬もいい女を見ると血がたかぶるのかもしれねえな。おれは長太郎っていうんだ」

男はつくづくとおふじの顔に見入っていった。女には慣れた男のようだ。

長太郎はおふじとならんであるきだした。

「わたし、浅草寺境内の藤屋っていう水茶屋にでています。折があったら、一度顔を見せてくださいませ」

世辞をいわれて男をさそったわけではない。おふじは他人も自分もみとめるいい女だ。男の世辞には慣れている。礼の意味で長太郎をさそったのである。

「そうか水茶屋の看板娘か。道理でいい女のわけだ」

男は納得したようにいった。

「いいえ、ちがうんです。看板娘じゃありません。たまたま屋号とわたしの名がおなじだったんです」

「それで藤屋のおふじさんか。藤娘だな。一度店をのぞいてみよう」

「ぜひいらしてくださいませ。たいした水茶屋じゃありませんけど」

店の外でおふじが男を藤屋へさそったのははじめてである。

「ねえさん、ついでだ。おくっていこうか」

男が気さくにいった。

店の客で水茶屋女をおくっていきたがる男はたくさんいる。が、こんなさそいにおふじは今まで乗ったことはない。

「たすけてもらったついでに、おくってもらおうかしら」

なんとなく長太郎とわかれがたくなって、そういった。

「おやすい御用だ。ねえさんとだったら一緒にあるいていきたい」

男はそういって、そのままついてきた。人生を気楽に生きていそうな男だ。

二人は夕暮れの道をならんであるいていった。

ふだんならば、おふじは藤屋にでている時刻だ。昨夜、店で酒をのみすぎ、二日酔いで今日はやすんでしまった。気晴しにちょっと買いものにでて、そのかえりに野良犬に吠えつかれたのだ。

おふじはなごんだ気持にひたっていった。

長太郎とは家の前でわかれた。

二

翌日、藤屋へでると、店をあける早々、客が二人きた。

二人はべつべつの客である。

藤屋は仲見世にある水茶屋だが、掛茶屋ではなく、一戸建ちの店である。店頭には縁台がならべてあるが、小座敷もあれば、奥には部屋もある。

小座敷と部屋に一人ずつ客が入った。二人ともかずみ目当ての客である。

「本当にかずみはもてるわねえ。あのこ、男好きするっていうんだろうね。いつも男の客が鉢合わせしてるじゃないか」

女将のおみなは満更でなさそうにいって、部屋と小座敷の両方へ挨拶にいった。

「かずみは愛嬌はいいし、若いし、可愛らしいから男がほうっておかないんですよ」

おふじは女将がもどってきてからいった。

「それにしても、おふじは器量のわりには男縁がなさそうだね。おふじの男の噂をきいたことがないよ」

女将は以前からそう感じていたようにいった。

「本当にあたしって、もてないんですよ。男ぎらいじゃないし、男にもてたいんだけど、

口説いてくれる客がいないんですよ」

おふじは一も二もなく同意した。本当に自分がもてないのが不思議なのだ。もてないというよりも、人気はあるのに、本気で口説いてくる客がいない。

女ぶりなら浅草寺境内に数ある水茶屋、矢場、楊子店の女たちの中で一、二をあらそう器量である。気立てだっていいといわれている。一度所帯をもった経験こそあるが、年は二十一歳の女ざかりだ。まだ嫁入り前といってもとおる容姿である。

「おふじはな、器量がよすぎるんだ。今時の男ときたら意気地がないからあんまりの器量よしだと尻ごみするんだよ」

そのときかかった店の主人藤兵衛が口をはさんだ。藤屋の屋号は藤兵衛からとったものである。

(旦那さまのいうとおり、本当に今時の男は意気地がなくって)

おふじの腹の底にあることを、藤兵衛がすっかりかわっていってくれた。おふじは口に言葉をだしかけてのみこんだ。

「旦那さま、それはすこしいいすぎですよ」

あらためていうと、

「お店の主人はおふじびいきだからね」

おみなは亭主のおふじびいきに少々嫉妬をまじえた。

「おれが今ひとつ若かったら、おふじを口説くんだがね。これくらいの女を口説いてもの

にするんでなくっちゃあ、男とはいえねえよ」
藤兵衛はおみなの悋気(りんき)におかまいなくいった。藤兵衛もひとところは鳴らしたあそび人だったそうだ。女房を二度かえたのも、そのためである。
（本当に世の男どもときたら情けない。振られるのがこわくって、あたしを口説(くど)けないんだから）
おふじはもう一度腹の中で男たちに毒づいた。
「あたしはね、旦那もちか、囲われ者に見えるんだって、この前もお客さんがいってましたよ。そんな女を口説く馬鹿もいませんからねえ」
一瞬をおいておふじはいった。
「旦那もちだろうが、囲われ者だろうが、いいとおもったら口説くのが本当の男だよ。金ずくだろうが、力ずくだろうが、女をとっちまったほうが勝ちだ」
藤兵衛があくまでも自説に固執すると、
「そんな男はまともな男じゃないんだよ。陰で女好きだの、ろくでなしだのって噂(うわさ)されてるのを当人だけが知らないんだ」
おみなも意地になっていた。
「ともかく、かずみの人気にはかないませんよ。あのこったら、年がら年中、口説かれてるんだから、すこしお裾分(すそわ)けしてもらいたいくらい」
おふじは雲行きを察して、あたりさわりなくその場をおさめた。

藤屋には小女(こおんな)をのぞいて四人の女が水茶屋奉公をしている。その中ではおふじがいちばん年上である。だから、ひくべきところはひかねばならない。おふじはわがままそだちの勝ち気な女であるが、たとえ一年間とはいえ所帯をもった苦労をしているので、そのあたりの世わたりはできるのだ。
十八でとついで、十九でわかれた。原因は亭主の女あそびと、仕事の失敗がかさなったからである。どちらか一方だったら我慢ができたかもしれない。金はなくても苦労をするくらいの意地もあった。が、二つかさなっては、気持につっかえ棒がきかない。わかれるしかなかったのだ。
〈亭主が仕事に失敗したら、女房はたちまち逃げちまった〉
と当時は陰口をきかれたものだが、おふじはそれだけで逃げたのではない。
自分からいいだして離縁状(みくだりはん)を書いてもらったので、実家に出もどってぬくぬくと父と兄夫婦の世話になるわけにはいかなかった。それで水茶屋づとめをはじめたのだ。
藤屋にでてから、おふじは人気はでたけれども、熱心にかよいつめてくる客は存外すくなかった。水茶屋の客は半分以上は女目当てだから、ちょっと容子(ようす)のいい女ならばすぐにかよいつめてくる客ができ、口説かれるのが普通である。ところが意外なことにおふじにはそういう客がつかなかった。
おみなはおふじで客を呼ぼうとおもって少々たかい給金をくれていたので、それは思惑はずれだった。その反対におみなはおふじに藤屋のいい客をみんな奪(と)られて独立されるの

をおそれていたので、藤屋の筋のいい客にはあまりおふじをつけなかった。いい客がおふじを目当てにしはじめると、すばやくそれを察して、ほかの女をつけるようにしていた。だから、おふじには馴染み（なじ）の客ができにくかった。

おふじはこのところ藤屋でいきづまりを感じていた。

先のこともかんがえなければならなかった。もう一度所帯をもってみたいという気持もあるし、ちいさな店でいいから、自分の水茶屋をもちたいという夢もある。いい男がいたら、恋もしたい。いろいろな気持がからみ合っていた。

けれども縁組をするにはいい相手にめぐまれなければならないし、店をもつにも自分一人の力では無理だ。恋をするにも男が必要である。いずれにしろ、自分だけではどうにもならないことばかりだ。おふじは人生の壁にぶつかっているといってもよかった。

数日後の灯（ひ）ともしごろ、仲見世通りを仁王門のほうからやってきた男がおふじの目についた。参詣（さんけい）がえりの人たちの中にまじっていたが、すぐにその男がわかった。

男のほうもおふじとわかったようだ。かなりむこうのほうから微笑（わら）いかけてきた。

「長太郎さん、やはりきてくださったのね。待っていたわ」

男がちかくまでくるのを待っていった。

「そりゃあ、別嬪（べっぴん）との約束だもの、親の死目（しにめ）に会えなくたってやってくるさ」

長太郎は人なつこい顔でいった。今まで一度しか会ったことのない男とはとてもおもえなかった。

「まあ、お上手なんだから。その調子なら、長太郎さん誰（だれ）にでも好かれるでしょう。この前はどうもありがとうございました」

おふじはうれしくなって礼をいった。

「誰にでも好かれるってことはないさ」

そういいながら長太郎は店に入ってきた。

「そうかしら」

「第一に生意気だから、先輩たちの中にはおれをきらうのもいる。商売相手だってそうだよ」

「長太郎さん生意気かしら」

「生意気だよ。好きなように生きてきたからな。偉いやつというのは、おれのような男がきらいなんだ。それにおれは、少々キザだから」

「キザなの、長太郎さん」

おかしくなって、おふじはきいた。

「少々はキザだとおもうよ。おれはそういうのが好きだから」

長太郎は真面目にこたえた。

「だとしたら、あたしもそういうの大好きよ」

そういっておふじはわらった。

「あらためて見ても、あんた、いい女だね。おれ、うれしくなっちまった」

まわりを気にせずにいうものだから、店の中の客と女がみんな長太郎とおふじのほうを見た。
「そんなことをいうから、キザだっていわれるんだわ」
おふじは照れていったが、長太郎はいっこうかまわぬようだ。
おふじは長太郎を小座敷に案内した。縁台の客にはしたくなかったし、部屋に案内するのは大袈裟だ。縁台の横にある小座敷ならば、外からも見えて、さり気がない。
「長太郎さん、なにをする人なんですか」
酒とツマミをはこんできてからたずねた。
もう長年の知り合いのような気分であるが、そのじつ男の職業を知らないのだ。
「おれは絵かきだよ。へぼ絵かき」
すこし照れて長太郎はこたえた。自分でへぼというところはいかにもこの男らしい。
「やっぱりそんな感じがしたわ。気ままらしく見えるもの」
酌をしてやると、いかにもうまそうに長太郎は酒をのんだ。
「そんなにおいしい？」
「だって、女がいいもの。酒だってうまくなるさ」
本当に長太郎はおふじを気に入ったようだ。
「そんなに気に入ってくれたなら、口説いてみる？」
挑発するように顔を見入っていった。

「そういわれちゃあ、いやとはいえないじゃないか。あんたが落ちるまで口説いてみよう」
長太郎はその気になったとみえて、乗ってきた。
「ほんとに口説いてくれるんですか。うれしい」
おふじははなやいだ気分になっていった。

三

おふじが長太郎の口説きに落ちたのは、桜散る三月の末ごろだった。
長太郎は言葉どおり、正面からおふじを口説いてきた。
「おれには女房がいるが、どうしてもおふじといい仲になりたいんだ。おれののぞみをかなえてくれよ」
長太郎の口説き文句はそういったものだった。絵師はどんな口説きをするのかとおもっていたが、存外ケレンのないものだった。
「かんがえておくわ」
これが、おふじの最初の答だった。
「かんがえといてくれたかい」
つぎに会ったとき、長太郎はさっそく返事を催促してきた。
「今かんがえているところよ」

そのときおふじはそうこたえた。

「上野の八百万へうまいものを食べにいかないか」

三度めの口説きはこうだ。おふじが食べ物には贅沢なことを長太郎はわかったのである。

八百万は江戸有数の料理茶屋である。

おふじは一も二もなく応じた。料理を食べる前に、東叡山で花見をしたために、八百万につくのがおくれ、食べおわったときには日が暮れていた。もう夜になっちまったから、今夜はここに泊まろうと長太郎がいいだし、おふじは今ごろが潮時だと察してそれに同意したのだった。

おふじは長太郎に抱かれて、悔はなかった。それよりもおもいきり声をあげたので、それが恥ずかしかった。

離縁ののち男に抱かれたのははじめてではなかったが、体の芯から燃えあがったのはこれが最初だった。長太郎とは肌が合うようだ。長太郎も興奮しているのがおふじにわかった。

それから数ヶ月がたち、長太郎との仲はつづいている。好いた者同士だから、二人のあいだはむつまじい。表面的には人もうらやむほどの仲である。

だが、おふじのうちに不満がすこしもないわけではない。

「おふじちゃん、本当に幸せそうね。うらやましいくらいよ」

かずみにいわれて、

「そうかしら、かずみほどではないわ」

とこたえた。

「どうして？　おふじちゃん、長太郎さんが好きじゃないの」

かずみは意外そうな面持ちでたずねた。

「長太郎さんは好きだわ。親切だし、やさしいし、たのしいし。でも、幸せいっぱいというわけではないのよ」

おふじがいうと、かずみはすこしわかったような顔をした。

「長太郎さんには内儀さんがいるようだし、おふじちゃんは先の心配があるわね」

「そうなのよ」

かずみはまだ若いが、男の苦労も金の苦労もしてきているので、おふじの気持がわかるようだ。

「長太郎さんが内儀さんとわかれる気はないんでしょ。そのかわりにお店をだす応援をしてくれればいいけどね」

かずみにそういわれて、

「そうねえ……」

おふじはあいまいに返事をした。たしかにかずみはおふじの心中にあることをいいあてている。

かずみは今なにも不自由のない暮しをしている。今まで付き合っていた男から生活の援

助をうけているし、来年からはその男に囲われる約束をしているらしい。

「おふじちゃんはいろいろ縁談があるんだから、見合いなんかしてみるといいのに。いい男(ひと)がいるかもしれないわ」

「それもかんがえてはいるんだけどね」

「長太郎さんに遠慮することはないわよ」

「遠慮はしてないわ」

おふじは客に口説(くど)かれることはあまりなかったが、縁談はよくもちこまれる。相手は店の主人の知り合いだったり、店の客の親類や友人というのがおおかった。今まで数度見合いをしたが、どれもおふじのこころはうごかなかった。

「おふじちゃん、女には売り時というものがあるからね。いくらいい女だって、二十四、五になればもううば桜っていわれるんだよ。おふじちゃんだってこの二、三年が勝負どころだとおもってたほうがいいよ」

年下のかずみにそういわれた。

おふじは反論のしようがなかった。

「かずみのいうとおりよ。あたしだって、もう二、三年でうば桜だわ。男をつかむなら今のうちだってわかってるわ」

「だったら、惚(ほ)れたのはれたのもいいけれど、自分のためになる男を見つけたほうがいいとおもうわ」

おふじは常日ごろ揺れうごいている女のこころをかずみにはげしく揺すぶりたてられた。かずみの言葉はおふじの心中の核心をついていた。かずみは若いなりに、自分の人生をしっかり見すえていた。そういうことになると、おふじはとんと計算が苦手だ。

かずみに説教されてから二、三日のあいだ、おふじは気が滅入(めい)っていた。うつうつとした気分の日がつづいた。

（見合いをしてみようかな……）

今でも縁談が二つばかりきている。一つは下谷にある寿司屋の後妻の口である。もう一つは左官屋で、こちらは初婚とのことだ。

おふじは今まで二つとも見合いをする気はなかったが、気晴しにやってみようかという気になった。見合いをしてみれば、結構いい相手にぶつかるかもしれない。

長太郎にはわるい気がしたが、彼との将来に期待がもてない以上仕方がないとおもった。長太郎とは付き合いはじめてから半年くらいしかたっていない。できれば、あと一、二年交際をつづけたい気持である。が、女としての大事な一、二年を無駄にするわけにもいかない。

おふじはいろいろなことをかんがえてなやんだ。

長太郎とは逢(あ)えばこころが燃えたつが、会わぬ日がつづくと、つい彼への不満が芽ばえてきた。男の身勝手さに腹もたった。

「長さん、あたしね、見合いをしようとおもうの」

十三夜（九月十三日）の月見で浅草寺境内がにぎわった夜、おふじは境内の絵馬堂の裏で、そっと口にした。

　長太郎はしばらくだまっていたが、

「縁談か……、おふじだったら縁談もくるだろうな」

　とつぶやいた。いつかこういわれるときがくるのが長太郎にはわかっていたようだ。

「長太郎さんの女房になれないのはわかっているんだし、あたしも先のことをかんがえなければならないから」

　見合いをきめたわけではないが、長太郎の気持が知りたくていった。

　長太郎は沈黙をつづけた後、

「おふじには見合いをしないでもらいたいんだが……」

　とこたえた。

「そんなの勝手よ」

　もし見合いをしてもいいと長太郎からいわれたらそれも腹のたつところだが、その反対でもおふじは腹立ちをおぼえた。

「勝手といわれれば勝手だが、見合いはしてもらいたくないのがおれの正直な気持だ」

　長太郎は口ごもりながらいった。

「あきれたわ、ずいぶん身勝手なのね。だったら、あたしたち先はどうなるんですか」

　声を荒げておふじがいったので、絵馬堂のちかくにいた何人かがふりかえって二人を見

た。

「先のことはなんともいえないよ。けれども、女房は離縁しないだろうとおもう」

「ずうずうしいのね、長さんて」

　とおふじはいったが、このときはもう長太郎に腹をたてていなかった。長太郎に女房がいるのを承知でこういう仲になったのだし、自分からも惚（ほ）れたのだから仕方がないとおもった。それに長太郎にはおふじに店を一軒ださせるまでの経済力はなさそうである。

「ごめんよ、おふじ。どうしてもおまえが見合いをするというんだったら止めようがないが、できるものならやめてほしい」

「わかったわ、長さんの気持」

　そういうしかなかった。それでも、わかれたくないと長太郎にいわれて、おふじの気持はすくわれた。実際に見合いするかどうかは、自分がきめればよいことである。

四

「見合いはしたけれども、おことわりしたわ。いい人らしかったけれども、所帯をもつとなると今ひとつぴんとくるものが感じられなくて」

　小春日和の午後、おふじは長太郎と随身門（ずいしんもん）から奥山のほうへぶらぶらと散歩しながらいいだした。

「やはり見合いをしたのか」

長太郎は憮然とした顔でいった。
「ごめんなさいね。もう見合いなんかしないわ。見合いすると相手に返事をしてから、あたしとても後悔していたの。長さんにわるいことをしたってね。それではじめからおことわりするつもりで、見合いにでていったのよ。相手の寿司屋さんにはわるかったけど」
「ことわったのか」
「あたし、今までいろいろまよっていたの。長さんを好きな気持はずっとかわらなかったんだけどね」
「それで」
「これからはもうまよったりしません。あたしはずっと長さんの女でいいの。長さんに末長く可愛がってもらえたら、それで幸せだわ」
おふじはふっきれた気持でいった。この気持に嘘いつわりはなかった。
「おれはうれしいけれども、おふじは本当にそれでいいのか。後悔はしないか。おれは見合いをしないでくれといったが、内心ではおふじがほかの男にとついでも仕方がないとおもっていたんだ」
長太郎はやさしい顔をしてそういった。
「いいのよ、心配しなくたって。あたし、ずっと長さんにくっついていくわ。ずっと可愛がってね」
そういったとき、さすがに胸にこみあげてくるものがあった。女としてあたりまえな縁

組をあきらめたさびしさが胸の片隅にのこっていた。
「おふじ、すまない。本当にすまない。おれの身勝手をきいてくれて、おまえにわるいとおもっているよ」
長太郎はうなだれていった。
「しようがないわ。あたしと長さん、出会うのがおそすぎたのよ。知り合ったときにはもう内儀さんがいたんだし。長さんがわるいわけではないわ」
おふじはそうおもうことで、自分のこころに決着をつけたのだ。
二人はそのままあるいてきて、奥山の盛り場にちかづいた。このあたりには見世物小屋、矢場、掛茶屋、食べ物屋、居酒屋などがせまいところに寄りあつまっている。
辰巳矢場、と看板のでている店のちかくまできたとき、おふじは前方に具合のわるい男がいるのを見た。
(ひきかえそうか……)
とおもったが、一瞬ためらったときに、前方の男がおふじをみとめた。
これでおふじは度胸をすえた。べつにこちらが逃げかくれしなければならない相手ではなかった。
相手も一人ではない。矢場からでてきたところと見え、立縞の派手な着物をきた化粧の濃い女にしなだれかかられている。
男はおふじを見つめ、さらに長太郎へ視線をうつした。

男の表情がこわばり、顔色のかわっていくのがわかった。

おふじも相手の女へ視線をうつした。柄のわるい女である。

(こんな女を相手にする男だったのか)

とおふじは失望をおぼえた。

男にもおふじのおもいがつたわったようだ。

離縁されてから最初に抱かれたのがこの男だった。下谷の場末で乾物屋をやっている喜八郎という男である。商売が上手(じょうず)で、小金をもっており、けっこう盛り場などをまめにあるいているのだ。

喜八郎はおふじと長太郎をじろじろ見ながらちかづいてきた。

「おふじ、ひさしぶりだな。今はこの男(ひと)と付き合ってるのかい」

喜八郎は無遠慮に声をかけてきた。その眼と言葉には嫉妬(しっと)がにじんでいる。

「どうもおひさしぶりでございます。折がありましたら、また藤屋にお顔をお見せになってくださいませ」

おふじは精いっぱいさりげなくうけて、いきすぎた。

「いやなやつに会っちまった」

かなりいってから、おふじはいった。

「以前、付き合ってた男かい」

長太郎にはすぐわかったようだ。

「藤屋につとめて、最初にあたしを口説(くど)いたのがあの男だったんですよ」

言い訳はしないで、ありのままをいった。

「おふじだったら、もっとましな男が口説きそうなものだが」

長太郎は不思議そうにいった。

「いったじゃありませんか。あたしは滅多に口説かれない女なんだって。あいつはとても図々しいやつで、遠慮もなにもしない男なんですよ。それでしつこくあたしを口説いたんです。あたしも一人ぼっちでさびしさが身にしみていたところだったから、半年ばかりあの男と付き合っていたの」

「おふじには不似合な男だな」

「誰しもそういうわ。今もいやな目であたしたちを見ていた。おたがいにもう過去のことだからさっぱりしてればいいのに。そうすれば町で会っても、こだわりなく挨拶(あいさつ)だってできるんですよ」

わかれた男への愚痴がこぼれた。

離縁後、おふじが付き合った男はもう一人いる。この男は江戸でも名を知られた老舗(しにせ)の主人だった。粋(いき)で、通でおもいやりのある男だったが、やはり女房もちであった。どうせ長太郎に見られるのなら、この男のほうがよかったと思った。

長太郎はもう喜八郎のことを口にしなかった。興味も関心ももてなかったのだろう。

おふじは喜八郎の嫉妬にひかるいやな目が気になった。挨拶とはいえ、藤屋におでかけ

くださいなどといわなければよかったとおもった。

その後、半月ばかりたったが、喜八郎は藤屋に顔を見せなかった。

おふじに今は歴（れっき）とした男がついているのを見ては、いかに図々しい喜八郎でも押しかけてこれないだろうとおもった。が、それはまちがいだった。

喜八郎は年の市で浅草寺境内がにぎわう年の瀬の午後、ふらっと藤屋に入ってきた。

この日は、浅草寺境内が夏の四万六千日とともにもっとも繁昌（はんじょう）してたてこむ日である。藤屋も朝からひっきりなしに客がつめかけ、縁台の外にさらに床几（しょうぎ）や腰掛けをだしてさばくほどだった。接客をする女たちは昼餉（ひるげ）をとるどころではなかった。八つをだいぶまわったころやや客がひけて、店の勝手で茶漬けを食べてほっとしたところに、喜八郎が一人でやってきた。

「先だっては、おやすくないところを見ちまったな。しっぽりといい気分の道行（みちゆき）をやってたじゃないか。それに女ぶりは相かわらずだな」

喜八郎は縁台にすわって無遠慮にいった。

「そちらもおなじ様子のように見えましたけど」

なんとなく不吉な予感をおぼえたが、おふじは弱みを見せずにいった。

「この前おまえを見て、わかれたのは失敗だったと後悔したよ。おまえほどの女はなかなかいない。おまえとわかれて、それがわかったんだ」

喜八郎はとんでもないことをいいだした。冗談ではなくて、本気のようだ。

「そんなことわかってくれなくて結構ですよ。わたしには今付き合っている男（ひと）もいますから」

はっきりいってやったが、おふじはなんとなくうそ寒さのようなものをおぼえた。この男のために長太郎とのあいだがまずくなったら大変だとおもったのだ。

「先だって会った男だろう。あの男とどれほどの仲か知らないが、おふじについていえば、おれのほうが先口だ。おれも一丁名乗りをあげるぜ」

以前簡単におふじを落とせたので、喜八郎は少々自信があるようだ。

「先口だの後口だのつまらないことはいわないでください。わたしの相手は自分でえらびます」

「鼻っ柱のつよさは相かわらずだな。おれは気長に勝負するつもりだ」

喜八郎は薄わらいを浮かべていった。

五

やや長太郎の足が遠のいた。

喧嘩（けんか）をしたのでもなければ、おたがいの熱がさめたわけでもないが、長太郎の女房おきよが病気で寝こんでしまったので、長太郎は看病しなければならなかった。子供がいないし、長太郎のほかに看病する者がいないのだ。

おきよは病気になることによって、皮肉にもおふじから長太郎を一時とりもどしたとい

える。おきよの病気はわずらうと長い病いだときいた。

時たま長太郎は藤屋に顔を見せたり、ほかの場所におふじを呼びだしてくれたが、以前のようなこまやかな密会はもてるべくもなかった。おふじも仕事をもつ身であるから、そう気ままに時間をつくることはできなかった。

長太郎に不信をいだくわけではなかったが、またおふじのこころが満たされぬまま揺れだした。

（いくらいい人だって、満足に会えないような相手じゃしようがない……）

口にこそださないものの、不満はおふじの中にたまっていった。

「おふじちゃん、よく辛抱してるわね」

見かねたようにかずみがいった。

かずみはこの年明けから囲われ者になったが、男がたずねてくるのを待つだけの暮しが退屈で、一日おきに藤屋にでるようになったのだ。

「好きな人のためだから仕方がないわ。待つのも恋のうちよ」

おふじは口ではそういったが、内心は焦らだちに責めさいなまれていた。いつまでも長太郎を待とうとおもうこころのうちから焦らだちがおこってくる。

おふじは揺れている自分のこころに不安をおぼえた。以前、好きでもない喜八郎の誘惑にのってしまったのも、離縁後の一人暮しの不安にこころが揺れているときだった。

奇しくも今また、喜八郎がしつこくせまっていた。本当にこの男はおふじのこころに隙

が生まれたときに、あらわれてせまってくるのだ。

しかし今度は、おふじはその隙につけこまれるはずがなかった。いくら不満や焦らだちはあっても、長太郎がいる。長太郎を裏切るわけがなかった。

「また一緒に昔の夢を見ようじゃないか。以前はおれも若かった。未熟で、苦労がたりなかった。だからおまえとうまくいかなかったんだ。けれども今はちがう。今のおれを見てくれよ」

もっともらしい言葉をならべては、喜八郎は藤屋の縁台でしつこく口説いていく。おふじがさそいにのらないので、喜八郎は店でしか口説けない。しかも商売もあまりうまくいってないらしく、藤屋の部屋にあがる客にもなれないようだ。

「いくらあたしを口説いたって無駄ですから、ほかをあたったほうがよろしいんじゃありませんか。無駄な鉄砲はもうおよしください」

男のしつこさにほとほと嫌気がさして、おふじはとうとう手きびしくはねつけた。

その一瞬、喜八郎の顔色がかわった。

何かしでかすのではないかとおもったが、

「昔の間夫をよくも粗末にしてくれたな。後悔するなよ」

喜八郎は憤然と縁台を立ちあがり、捨てゼリフをのこして店をでていった。

おふじはほっとするとともに、不安がこころにしのび寄った。

「あんまり手きびしくはねつけると、気のちいさい見栄っ張りな男は何をするかわからな

いよ。ああいう男は自分からあきらめて去っていくのを待つしかないのよ」
店頭で一部始終を見ていたかずみにたしなめられた。かずみは男との駆け引きでも、おふじ以上の場数をふんでいた。
「だって、あんまりうるさいんだもの」
「駄目駄目、恨みを買ったら損するだけよ」
かさねてかずみにおしえられた。
境内に駘蕩（たいとう）とした春風が吹きだし、木の芽、草の葉が萌（も）えだしてきたころから、長太郎はぱったりと姿を見せなくなり、音信もすっかりとだえた。
（長さん、やっぱり、あたしから逃げたのね）
今までの不安や焦（い）らだちがつみかさなって、おふじの辛抱の糸はこれでぷっつりと切れてしまった。
（きらいになったのなら、そういってくれれば、きれいにあたしのほうから身をひいたのに……）
おふじは長太郎の不実が悔しくて、恨みをいだいた。長太郎を信じて今まできた自分が情けなかった。
（挨拶（あいさつ）もしないでわかれていくなんて……）
一度長太郎に会って真意がききたいとおもったが、決断がつかぬうちに季節は暮春にうつっていた。

境内の藤棚には、暮色の中へ溶けこむように、優美な薄紫の花房がたれている。だが、今年の藤の花ほどおふじにとってかなしい色に見えたことはない。花房を見ているうちに、瞼（まぶた）がうるんできた。
とくに今までにぎわっていた境内からつぎつぎに人が去っていく夕暮れどきは、切なくてやりきれなかった。切なさのあまり、藤の花を見にいき、しばらくたって店にもどると、かずみがおふじをさがしていた。
「どこにいってたの。さっき長太郎さんがきたのよ、大事な話があるって。しばらく待っていたけど、かえっていったわ」
長太郎という名をきいただけで、おふじはこころの傷口がまたいたむのをおぼえた。
「長太郎さんの様子どうだった」
「長太郎さん、とっても大変だったようよ。内儀（おかみ）さん亡くなったんですって」
かずみの言葉におふじは大きな衝撃をうけた。
「えっ……」
といっただけでほかの言葉はでなかった。
「亡くなるまでの看病にてんてこ舞で、おふじちゃんに大層無沙汰をしちまったといっていたわ。昨日（きのう）で初七日がすぎたそうよ。明日（あした）の昼、絵馬堂で待っているといっていたわ」
かずみはそういってから、
「でもおふじちゃん、よかったね」

と遠慮がちにつけくわえた。

「よかったなんて、そんな……」

おふじは長太郎の女房の死をあからさまによろこぶような気持にはとてもなれなかった。長太郎が家をでられなかった理由がわかったことがうれしかった。

翌日の昼すこし前、おふじは半刻ばかりの時間をもらって、店をでた。

仁王門のちかくまできたとき、おふじの視線が前方の一点で釘付けになった。仁王門のむこうに喜八郎がいた。

おふじの足がとまった。すすもうとしても、両膝ががくがくとして足がうごかなかった。

喜八郎はちかづいてきた。血の気のない、蒼い顔をしている。

おふじの中に恐怖がこみあげてきた。

「おふじ、おまえはおれの女だ。誰にもわたさないぞ」

喜八郎がそういうのがきこえた。

おふじは逃げようとしたが、足がすくんで駄目だった。

(ころされる!)

そうおもったとき、喜八郎のふりあげた出刃庖丁が真昼の太陽にぎらっとひかった。

喜八郎の体がおどった。

「ああっ」

悲鳴をあげ、おふじは腹部におもい衝撃をうけて、たおれた。

もう一度悲鳴をあげ、おふじはたすけてとさけんだ。ここで死んではならないと、気力をふりしぼった。

喜八郎は一突きしただけで、仲見世通りを雷門のほうへ逃げていった。

激痛が体をまわりはじめた。

(長さん、待ってて、あたしは死なないわ。あたし、長さんと幸せになるの)

必死でそうおもいながら、おふじは傷口を両手でおさえた。

白昼のとつぜんの惨劇に、ちかくにいた人々があつまってきた。その中に長太郎もいた。

蓮花亭おりく

一

「わたしこのごろ、助平になったみたい」

おりくは声をひそめるようにして朋輩のよしみにいった。

「やっぱし……」

よしみはすこしこまったような顔をして見かえった。

「無性に抱かれたいとおもうときがあるのよ。そんなとき、わたしの体……」

「濡れてくるんでしょ」

よしみはおりくよりも四つ年下だが、男女のことではずっと訳知りである。

湯島二丁目にある水茶屋〈若松〉が店をあける前の時間、おりくとよしみは座敷の裏部屋でくつろいだ時間をすごすのがつねだ。

「そして、じわじわっとうずいてくるような感じになるの」

「おりくちゃん、本気で鯉之助さんに惚れたのよ」

「そうなのねえ、そうかもしれない。あたし惚れたんだわ。男に惚れるなんてはじめてよ」

今年二十三歳で、二年間とはいえ所帯をもった経験もあるおりくはいった。そういいながら鯉之助をおもいだして、その胸に抱かれ、乳を吸われ、気持がたかぶってきたところを一気にしずめてもらいたいとおもうおりくだった。

「おりくちゃんは晩熟だものねえ。所帯をもったことがあってもそうなんだから。やっぱし女は惚れた男が相手でなければ駄目なんだよ」

よしみがそういうように、おりくは故郷の水戸で所帯をもった峰吉には最後まで好意がもてなかった。親同士の了解で縁組したのだが、二人は気が合わないばかりか、肌も合わなかった。おりくは峰吉に抱かれるのを好まなかった。欲望をむきだしにせまってくる男から逃げまわり、つかまえられて押さえつけられ、力ずくでおかされるように抱かれたことが幾度もあった。そんなことから夫婦は仲むつまじくなることもなく、とうとう二年後に親同士が相談し、縁組を解消したのだった。

おりくは実家で半年ばかりくらした後、出もどりの生活に見切りをつけ、江戸にでてきて、水茶屋で酌取女をはじめた。器量がいいので、おりく目当ての客もついた。執拗に口説かれて、根負けして抱かれてやった男が二、三人いた。そのときも気がすすまなかったので、感慨もなければ、快感をおぼえるまでもなかった。

「鯉之助さんとは気持も合うし、肌も合うわ。わたしたちとても相性がいいみたい。鯉之助さんもそういっていたわ」

「それはよかったわね、おりくちゃん。ご馳走さま。鯉之助さんを大事にすることだわ」

よしみはあきれた顔を見せてわらった。

おりくは世間の苦労をいろいろなめてきて、よしみのいい相談相手になっているが、男

女の交際や、とりわけ駆け引きなどではよしみのほうが一枚も二枚も上である。それだけおりくは晩熟といえるのだ。

「わたしもう年だから、今後そう男との出会いはないとおもうの。これが最後かしら」

おりくはそういったが、そうだとすると、鯉之助が最初で最後の男になるような気がした。

「おりくちゃんに男の出会いがもうないとはおもわないわ。じっさいにおりくちゃん目当ての客は幾人もいるじゃない」

「でも、あたしが惚れる男はそういないとおもう。今まで二十三年間で一人だからね」

おりくがそういうと、よしみは苦笑して、

「鯉之助さんと出会えて、本当によかったわね。これからずっと惚れ合っていくことだわ」

そういって、裏部屋から店頭へでていった。もう店をあける時刻になっていた。

店頭へでるなり、口あけの客をむかえるよしみのにぎやかな声が裏部屋にきこえてきた。よしみは根っからこの商売が性に合っているようである。器量はおりくにくらべるとおちるが、座敷の人気はよしみのほうが上だ。客を上手にあやつるよしみの腕はたいしたものである。同時に二人、三人の金持ちの客と交際して、月々手当をもらうなどのことは朝飯前である。

おりくにはとてもよしみのような芸当はできない。自分が歯がゆいくらいつかいわけの

できない、不器用なたちなのだ。

座敷にでて、客への酌取りをしているときも、鯉之助のことが脳裡にちらついていて仕方がなかった。鯉之助に会いたいというよりも、抱かれたいという欲望が鬱勃とおこってきて、ふとわれにかえって顔のあからむおもいをした。座敷にでてまで男をおもったりしたことは今まで一度もなかった。

（わたしって、案外淫乱な女なのかしら）

おりくはそんなおもいにおそわれた。

「おりくちゃん、お客さんよ。桜屋さんですよ」

そのとき女将が声をかけてきた。

おりくはすぐに腰をあげた。女将が桜屋さんという声にはとくべつのひびきがあった。桜屋時右衛門は今いちばんおりくを贔屓にしてくれている客であり、若松のもっともよい客である。

水茶屋の酌取女を贔屓にしている客はほとんど女の体が目当てである。店にかよって、甘言をささやき、呉服類や手道具などを買いあたえて誘惑するのが常套の手段だが、桜屋はおりくにたいしてそういう態度をあらわしていなかった。桜屋がおりくにどういう興味をもっているのか、まだ理解ができなかった。

おりくが座敷へ入っていくと、時右衛門は一人でしずかに酒をのんでいた。

「よくおいでくださいました。いつもご贔屓をいただきましてありがとうございます」

にこやかにわらいかけたおりくの心中の奥には、
（なかなか正体をあらわさない狸め……）
という揶揄の声がひそんでいた。
「今日は、おりくにちょっとこみいった話があってきたんだ」
時右衛門は存外生真面目な顔で応じた。金のありあまった贅沢な身なりをしており、大柄な体をゆったりとくつろげて、蓮の花をえがいた団扇をつかっている。
（そらきた、狸め。ようやく尻尾をだしかかった）
おりくは心中で毒づいたが、満面に笑顔をつくり、
「さあ、どんなお話でしょう。おきかせくださいませ」
とこたえた。
「おりく、わたしと組まないかね。一緒に仕事をしようじゃないか」
時右衛門の言葉はおりくの想像したところにあたらずといえども遠からずだった。時右衛門のように地位や財産があって、世の中を高みから見ている者は女を口説くにも真っすぐな態度はとらないのだ。
「まあ、わたしが桜屋さんと一緒に……」
おどろきながらもよろこんでいる態度をおりくは見せた。酌取女といえば、男のそばについて酒の相手をし、いくらか媚びを売る商売であるから、いくらおりくでも人をそらすようなことはしない。

「おりくはお世辞はあまりないが、客あしらいは上手だし、器量は申し分ない。それにおちついた物腰、立居がなかなかこのましい。つまり、男をそらさぬいい女だということだ。わたしはそんなおりくを気に入っている。そういう女をさがしていたんだ」
しずかな口調で時右衛門ははなしだした。
時右衛門のしゃべり口調の上品さまで、女を誘惑するための手立てのような気がした。おりくは用心ぶかい女だから、そんな手立てにだまされるものではないのだ。
「それは旦那さまの買いかぶりというものです。それでも大変うれしゅうございます。そういってくださるだけで気持がいいものです」
「わたしは世辞をいっているんじゃないんだ。そんなことといったってはじまらん。ともかく、わたしとあんたが手を組んでやれば、きっと成功するとおもう」
「お店でもやるんでございますか」
警戒しながらおりくはさぐりを入れた。
いい話ではある。こういう店ではたらく女は、いい客のそんな話を待っている。けれども最後まで待ち呆けをくう女がほとんどで、そんないい話にありつける女は千人に一人もいない。それだけに、そんな餌をまいて女を釣ろうとする客もいるのである。
「いい料理人をおいて、しゃれた感じの料理茶屋をやってみたいとおもっているんだ。大きくなくてもいい、おちついた店にしたい。あんたに女将をやってもらいたい」
おりくも今までこころのどこかで男のこんな言葉を待っていた。待ちつづけていた言葉

を今きいた気がした。千人に一人の幸運が舞いこむかもしれないとおもった。

が、おりくの心中は半信半疑である。ここでのぼせてとびつけば、男の罠（わな）にかかるかもしれない。

「夢のようなお話です。そんなお話がもし本当になれば、こんな幸せなことはありません」

「夢でもなんでもない。わたしとあんたがその気になればできることだよ」

時右衛門は無造作にいった。

男と女のあいだは、一面、駆け引きでなりたっている。が、どこかで相手を信じなければなにもなりたたぬのはどの世界でもおなじだ。

「くわしく、お話をうかがいたいとおもいます」

男のさそいに乗っておりくはこたえた。

「今夜、店がおわったら、明神下の〈伏見屋〉で会おう」

「うけたまわりました。今夜そちらでお会いいたしましょう」

こたえておりくはほっとした。

二

おりくの迷いは店がおわるまでつづいた。

おりくはやたらには男を信じない女だが、それでも時右衛門がもちかけてきた話に我を

わすれた感があった。

じつは今夜は先約があったのだ。しかもおりくにとっていちばん大切な鯉之助と逢（あ）う約束がしてあった。それをすっかりわすれていた。おもいだしたのは、時右衛門がかえってだいぶたってからだった。

今からでは、時右衛門にも鯉之助にも連絡をつけることはできぬ。

（どうしようか……？）

どちらの約束をとるべきか、おりくは迷いにまよった。どちらも代理のきく用ではなかった。おりくはどちらかといえば決断のはやい女だが、今回ばかりは決断をしかねた。

時右衛門は今夜、千載一遇の機会をおりくにあたえてくれるかもしれぬ。しかもおりくはそんな機会を何年か待っていたのである。

だが、鯉之助ともどうしても逢いたい。ひさしぶりに逢って抱かれたい。抱かれて気持のもやもやをしずめてもらいたいのだ。

本当ならば、今夜は鯉之助をあきらめ、時右衛門との約束をまもって彼の話をじっくりときくべきだとおもった。おそらく時右衛門は、今度はじめようとしている店についていろいろと構想や希望をかたってくるだろう。おりくとどういう立場、条件で仕事をしたいのかその気持をうちあけてくるはずだ。今夜はもしかしたら、おりくの運命を左右する夜になるかもしれない。

そうとわかっていながら、おりくは鯉之助との約束をすっぽかす気持になれなかった。

理屈ではわかっていても、体と気持がいうことをきかなかった。

（わたしって、本当に厄介な女だわ）

そうおもいながら、おりくは宵がふかまったころ、若松をでた。

若松は湯島の聖堂のほぼ裏にある。左へゆけば明神下。右へむかえば鯉之助と逢う本郷にいたる。

まだわずかな逡巡があった。が、店の前の道にでたとき、躊躇なくおりくは右へ足をふみだしていた。

多少のこころのこりはあったが、悔いはなかった。

約束をやぶったことで、おそらく時右衛門はおりくへのかんがえをかえるだろう。ほかの女へその話をもちかけるだろうとおもった。

（あの話には未練があるけど、仕方がないわ。わたしは鯉之助さんに逢いたいのだもの）

こころのうちでつぶやいて、聖堂の後ろの道を北へむかった。

道は右まがりにながくのびており、湯島六丁目から本郷一丁目へとつづく。鯉之助が待っている旅籠は本郷三丁目の中通りにある。しずかな町中のいい旅籠で、旅人宿というよりも、家族で泊まりにきたり、男女が逢瀬にこのんでつかうところである。

旅籠の番頭はおりくと鯉之助の間柄を知っており、すぐに階下の奥の座敷にとおされた。

鯉之助は旅籠の料理の膳を前にして、酒をのんでいた。おりくの顔を見ると、鯉之助はうれしそうににこっとわらった。

「鯉さん、待たしてごめん」

おりくは男の笑顔を見た瞬間、うれしさが体の中ではじけた。時右衛門をすっぽかして幸運をにがしたこともこの笑顔を見ただけで帳消しになった気がした。

鯉之助は腕のいい蒔絵師である。家が家具問屋で、自分の家の仕事をしている。毛並がよくて、なに不自由ない暮しをしており、年もおりくの好きな三十代後半である。

難をいえば、女房のいることである。気だてのいい可愛い女房である。けれどもおりくが鯉之助と知り合ったときにはもう女房がいたのだから仕方がなかった。

「男を待たせるような女でなけりゃあ、いい女とはいえないよ。おれはなれてるから大丈夫だ」

といって鯉之助はまたわらった。

「鯉さん大好きよ！」

おりくはいいながら、鯉之助にとびついた。そして首っ玉にしがみついて、男の唇をうばった。

鯉之助がやおらこたえてきた。

口を吸い合いながら、おりくは舌をさしこみ、相手の舌にからませていった。

しばらくたって、二人の逢瀬の挨拶はおわった。おりくは男と逢った初にときたまこんなはげしい振舞をすることがあった。

「おりく、まるで小娘のようだな」

はなれてから鯉之助がいうので、

「小娘にこんな色気のある女がいるもんですか」

おりくはそうこたえてやった。

「それは本当だ。おりくはちかごろ、とても色っぽくていい女になった」

鯉之助はいいことをいってくれる。

おりくはうれしくてたまらない。

「それよりも、わたしこのごろとても助平な女になったんですよ」

そういってふたたび鯉之助にちかづき、胡座をかいている男の片膝に腰をのせてすわりこんだ。

「それはおりくがいい女になった証拠だ。ちかごろかがやいている」

鯉之助はそういって、片手をおりくの体にまわした。

「お乳を吸って、吸われたいの」

おりくは胸をつきだした。

鯉之助がおりくの両衿をわって、片方の乳房をひきだした。男がやってくれなかったなら、おりくは自分で片肌ぬいでしまうところであった。

おりくの後首から脳天がつうんとしびれた。

鯉之助がおりくの乳首をくわえて、舌先でころがしだしたのだ。

「鯉さん、とてもいい気持。もっと吸って」

おりくはそういい、ぐいと自分の乳房を男におしつけていった。体はもう濡れてきていた。

「わたし、とてもしあわせ」

鯉之助に抱かれた後、おりくは自分のとなりに汗をかいて身を横たえている相手へつぶやいた。

「おりくと出逢えてよかったよ」

まだはあはあと息をつきながら鯉之助はこたえた。

「鯉さんに出逢えなかったら、わたしきっとみじめな一生をおくっていたわ」

「おりくらしくもない言葉だな。おれはもしかしたら、駄目になるかもしれない」

鯉之助がもっとも鯉之助らしくない言葉をつぶやいた。

「鯉さんが駄目になるなんて……。もしそうなったら、わたしが一生懸命はたらいて、鯉さんの面倒を見るわ」

しあわせをいっぱいに感じながらおりくはいった。そうおもうことで恍惚感につきあげられていた。

数日後。おりくは夕方、女将のおつかいで明神下の扇子問屋まででかけ、半刻（一時間）くらいたってもどってきた。

店頭の縁台によしみがすわって団扇をつかっていた。

「おりくちゃん、ちょっと前に鯉之助さんがきたよ。しばらく待っていたんだけど、今し

がたかえったわ。いきちがいになってしまったね」

よしみはそういって自分のことのように残念がった。

「仕方がないわ。きっとまたくるでしょう」

とおりくはいったが、いきちがいは残念だった。数日会っていない鯉之助が恋しかった。

「言付けがあってね。今晩もしかしたら本郷の旅籠に泊まるといっていたわ。なにかあったのかしら、鯉之助さんはちょっといそいでいたみたい」

「そう、どうもありがとう。お店がおわったらいってみるわ」

そうこたえたが、このときおりくはなにも予感のようなものをおぼえなかった。鯉之助になにか都合があったのだろうとおもっていた。

この宵、おりくは若松から本郷への道をあるきながら、数日前に逢ったときの鯉之助の言葉をふとおもいだした。

〈……おれはもしかしたら、駄目になるかもしれない〉

そのときも感じたことだが、鯉之助らしくない言葉だった。

（鯉さんどうしてあんなことといったのかしら）

おりくは今にいたって、フにおちないおもいをいだいた。

あのとき聞いてみればよかったとおもったが、そのときは不審をいだかなかったのだから仕方がなかった。

足はしだいにいそぎ足になった。一時もはやく鯉之助に会ってみたかった。

旅籠につくと、おりくは帳場で帳面をめくっていた番頭に会釈だけして、いつもの部屋にむかった。

「鯉さん」

声をかけて、戸襖をあけた。

座敷は床の間つきの八畳間である。

夜具がでている。

（……？）

布団はのべてあるのではなかった。一度のべた布団を二つ折りにしたまま部屋の隅に片寄せてあった。そのため部屋の真ん中が不自然なほどひろくあいていた。

鯉之助はちょっと前まではまだこの部屋にいたのだろう。そんな雰囲気が部屋の中にのこっていた。

おりくはここで待つことにした。

しばらくすると、廊下に足音がちかづいてきた。

足音で鯉之助でないとわかった。

「失礼をいたします」

外から声がして、番頭が姿をあらわした。

「島田屋さんは？」

おりくはたずねた。島田屋は鯉之助の家の屋号である。

「島田屋の旦那は半刻ほど前に外へでていかれましたよ。もしかしたらもどらないかもしれません。旦那をむかえにきた男の人がいましたし、旦那は宿代をそそくさとはらってでていかれましたから」

番頭はそういった。

おりくはやや落胆したが、気をとりなおし、

「もしかしたらもどってくるかもしれませんから、わたし待っています」

そういってこの部屋で待つことにきめた。おりくの気持はそうするしかなかったのだ。

「お約束があったのでしたら、おもどりになるかもしれません。お待ちになってみてください」

そういって番頭はでていった。

おりくは鯉之助をずっと待った。

翌朝まで待ったが、鯉之助はもどってこなかった。

夏の太陽が高くのぼってくるまで待って、あきらめて旅籠をでていった。

三

六年の歳月がたち、年号は昨年、文政から天保へかわっていた。

おりくの身の上にも、おおきな変化があった。おりくは三年前に水茶屋の酌取女の足をあらっていた。

今では、上野茅町にある料理茶屋〈蓮花亭〉の女将である。

蓮花亭は不忍池のほとりにある。庭に不忍池から水をひいた池があり、そこには紅白の見事な蓮の花が咲く。蓮は不忍池が有名だが、不忍池は季節になると蓮見の客で群集してしまう。そこで不忍池をさけて、蓮花亭に花を見たり、料理を食べにくる客が存外ふえているのである。

今年もまた、蓮の季節がちかづいた。水底の根茎から緑色の長柄をのばし、水面に楯に似た帯白緑色の広葉をひろげている。広葉のあいだの蕾がちかごろだいぶふくらんできた。

おりくは芳香をもったすがすがしい蓮の花が好きである。

今日の昼、桜屋時右衛門が蓮花亭にやってきた。蓮花亭をつくるにあたって、金をだしてくれたのは時右衛門である。

時右衛門は今日、店の帳面をあらためにやってきた。儲けは時右衛門とおりくの半分ずつ。これが二人の約束である。そのほかに二人のあいだになんの関係も制約もない。それは蓮花亭をはじめるにあたって、時右衛門がきりだしてきた取りきめである。

なまじっか金主と女将とが肉体関係をむすぶと、両者のあいだに馴れ合いが生じて、商売がうまくいかなくなるというのが時右衛門の持論である。時右衛門は以前からこういうかんがえをもっており、おりくにもはじめから金銭ずくの共同経営をもちかけるつもりだったそうだ。ところが、おりくが約束をすっぽかしたことによって実現するのが三年おくれた。時右衛門はおりくをあきらめ、ほかの女をあたってみたが、どれもうまくいかなか

った。三年後におりくのところにお鉢がもどってきて、ようやく実現のはこびとなったのである。

時右衛門が帳面のあらためをおわってかえっていってから、おりくは駕籠を呼んだ。

「駕籠屋さん、明神さままで」

そうつげた。明神さまといえば、江戸の総鎮守神田明神のことである。

明神下の御台所町に夏の食器類を見にいくつもりがいそがしくて、のびのびになっていたのだ。若松にいたころは、明神下がちかかったが、今は少々とおくなった。

おりくは御台所町へいくまえに、明神さまの鳥居のところで駕籠をおりた。この夏はまだ明神さまにおまいりをしてないのが気になっていた。ついで参りはご利益がないといわれているので、先に参詣をこころがけたのだ。

おりくは大鳥居から楼門、本社を見とおす神田明神の風景が大好きである。

午後の日ざかりをすぎており、境内には参詣人の姿がかなり見えた。茶店や露店などの風景は相かわらずだ。大方の茶店は崖を背にしており、風とおしがよくて、すずしそうである。

本社の前にたち、賽銭をなげて、商売繁昌、無病息災の祈願をした。これでちょっとこころがやすらいだ。おりくは水戸から江戸にでてきてらい、毎年各季節ごとに明神さまへの祈願を欠いたことはなかった。

かえりは裏門の方角へむかった。

茶店と矢場の先に露店がならんでいる。露店のきれたところに、人がたむろしていた。しぜんにおりくの足がそちらへむかった。

七、八人の見物人が一人の男をとりかこんでいる。

ちょっと目先をかえた露店だろうとおもって、興味をひかれちかづいた。

商家の隠居ふうの白髪の年寄が自分の顔を絵に画いてもらっており、そのまわりに見物人があつまっているのだ。明神さまの境内には、ときに似顔絵かきがでていることがある。

おりくは見るともなく似顔絵かきの顔を見て、おもわず息がとまりそうになった。

知っているどころではなかった。

(見まちがえるはずがない！)

姿かたちは以前とだいぶちがっているが、鯉之助にちがいなかった。

(鯉さんっ)

いいかけて言葉をのみこみ、おりくは鯉之助が隠居の似顔絵を画きおわるのを待った。

鯉之助は蒔絵師だったくらいだから、絵を画くのはお手のものなのだ。

今見る鯉之助は筒袖の道衣姿で、絵師の姿が板についている。年齢よりはだいぶ若く見える男だったが、すでに四十路に入っており、さすがに昔の精気溌刺としたところは影をひそめていた。わずかだが、髪にも白いものがちらほらと見える。こころなしか、やつれも感じられる。

おりくは見物人の後ろから鯉之助にじいっと見入っていて、膝頭ががくがくとふるえ、

動悸は鳴りつづけた。

失踪以後の鯉之助の苦労が姿や表情にあらわれていた。鯉之助とは六年前、本郷の旅籠でいきちがって以後、そのまま逢ってもいなければ、音信も不通であった。

鯉之助の消息がわからなくなってから、おりくは島田屋をたずねたが、家具問屋をおおきくやっていた島田屋はすでに人手にわたっていた。近所でたずねたところ、島田屋はかなりの借財を背負って、身代がたおれたとのことだった。鯉之助の家がそんな窮状におちいっていたとは、おりくはすこしも知らなかった。島田屋の家族がどこへ引っ越したか、近所で知る者はいなかった。おりくはその後もツテをたのんでさがしてみたが、島田屋の消息はわからなかった。以来そのままになっていたのである。

隠居ふうの男の似顔絵がおわった。

おりくは見物人をわけて、前へでた。

「絵かきさん、わたしを画いてくださいませんか」

そう声をかけて、おりくは鯉之助の正面にでた。

鯉之助がおりくを見た。その顔に一瞬、おどろきがはしった。が、すぐに鯉之助はにこっと笑みを浮かべた。おりくの大好きなあの顔だ。笑顔は昔とすこしもかわっていなかった。

「内儀さん、ずいぶんうつくしい顔だ。似顔絵にするのがもったいないくらいだ。画かしてもらおう」

鯉之助はおりくの顔を見つめてしずかにいった。

おりくもじっと見かえした。胸の奥底からあつくたぎるものがこみあげてきた。おりくは泣きたくなるおもいをこらえて立っていた。

「どうせ似顔絵を画いてもらうなら、六年前の、まだ若いころのわたしを画いてもらいたかった……」

おりくは何かいわねばならぬと胸がせまって、そんなことを口にした。

「内儀さん、今でも十分若くてうつくしい」

鯉之助の目がまたわらっている。

おりくは人目がなければ、飛びついていき、鯉之助の胸の中で声をあげて泣きたかった。

「六年前に男に去られ、捨ておかれるままにこのような女になりました。絵になるでしょうか、わたしの顔が」

おりくはつとめておちついていった。

「以前とすこしもかわっていない。目、眉、鼻、口、みんなおもいでのままの顔だ」

鯉之助はそういいながら、画帳をめくった。そして筆の先に墨をにじませた。

白い画帳に鯉之助はさらさらと筆をうごかしていった。

おりくは筆のうごきを見まもった。筆は遅滞なくながれるようにうごいていった。

見るまに、画帳にうつくしいおりくの顔が画きあがっていった。おどろくべきことに、鯉之助は一度もおりくの顔を見ずに画いていったのだ。画帳のうえのおりくの顔と姿は鯉

之助の脳裡（のうり）のものであった。
おりくは画帳に画かれた自分の顔と姿を見て、とうとう瞼（まぶた）から涙をあふれさせた。
「鯉さんっ、よくご無事で……」
もうまわりの見物人のことは気にしていられなかった。目前の鯉之助のことしか意識になかった。
「とても無事だなんていえた態（ざま）じゃあないが、ともかくこうして生きているよ」
「江戸にもどっていらしたのなら、おりくをさがしてくださってもよかったのに」
おりくは少々恨みをいった。
「店の身代はたおれるわ、借金取りには追われるわで、一家みんな逃げまわっていたんだ。そのあいだにおれは病気でたおれてしまった。今年はじめに江戸へもどってきて、おりくの消息はきいたよ」
「だったら、どうして鯉さん、わたしをたずねてきてくださらなかったの」
おりくは涙声でいった。
見物人たちはそれとなく事情（わけ）を察していなくなっていた。
「おれは落ちぶれたうえに、病身だ。おりくの前にでられるようなおれじゃない」
そういってから、鯉之助はふたたび笑顔を見せた。

四

「おりくが鯉さんの面倒を見てあげる。鯉さん一人ぐらい食べさせてあげられるわ」
その日、鯉之助を蓮花亭につれてきておりくはそういった。
「男が女に面倒を見てもらうなんて、みっともない」
鯉之助はこばんだが、
「以前、鯉さんが駄目になったらわたしが面倒を見るといったはずですよ。それに病気がよくならないうちにはたらきにでたら、体がまいってしまいます。ともかく病気が完全になおるまで、鯉さんはここにいてください」
おりくは無理矢理そうきめた。
若松で酌取女をしていたころ、おりくは金で苦労することがしばしばあった。そんなときなにかと鯉之助がたすけてくれたのをわすれていなかった。男が女のために金をだすのは当然だというかんがえもあるにはあるが、おりくはそのころ鯉之助がいろいろ援助してくれたことがわすれられなかった。
「女房とはわかれた。江戸を追われてからの食うや食わずの暮しについてこれなかったようだ。もう四年前にわかれてしまった」
鯉之助のいった言葉が意外であった。おりくはそんなことを期待していたわけではなかったが、鯉之助は身軽な独身者（ひとりもの）になっていた。
「それでも、おりくがこんな立派な料理茶屋の女将（おかみ）になっていようとは夢にもおもわなかった」

おどろきと感慨をこめて鯉之助はあらためていった。

「わたしですら、こんなことになろうとは夢にもかんがえていませんでした。本当に夢のような気持です」

それがいつわりのないおりくの本音であった。

「おりくはこうなる運命をもちあわせていたのだろう」

「こんな幸運にくわえて、鯉さんにこの世でまためぐり会えたなんて、わたしには信じられないくらいです。いつか、一度に不幸なことが身にふりかかるのではないかしら」

おりくは本当に自分のしあわせがこわいくらいであった。

数日後、蓮花亭の池で蓮の花が咲きだした。

店はこの時季から毎年たてこんでくる。蓮は早朝に咲く花だから、蓮花亭も朝から店をあけることになる。江戸のかなり遠いところからも蓮見の客がやってきた。

不忍池に蓮見にきた客は、池のほとりの茶屋などで蓮の葉飯をたべてかえるのが恒例である。蓮花亭でも葉飯をつくった。

鯉之助は蓮花亭にうつってからは、似顔絵を画きに外へでることはなかった。彼は江戸の外を逃げあるいていた生活のなかで疲労と心労とで内臓を病んでいたのだ。

「ここでのんびりと、なんの心配もなくくらしていたら半年かそこらで体は元にもどるそうです。鯉さん、ゆっくり養生してください。おりくがついてるから大丈夫ですよ」

おりくはそういって鯉之助をひきとったのだ。好きな男と四六時中一緒にいられるのだ

から、こんなしあわせな暮しはなかった。縁組はしていなくても、しているのと同然の状態である。

もっともうれしいことは、鯉之助がここにうつってから、身もこころもおちついていることである。彼が蒔絵師の身で巷へでていき、いくばくかの画料を得るために人の似顔を画くのは相当心労をもたらす行為だったようだ。鯉之助は蓮花亭にきてからというもの、一度も絵筆をもったことはなく、毎日をゆったりとおだやかにくらしていた。

（鯉さんは今、こころと体を病んでいる。鯉さんに今必要なのは安住の場所なのだ）

おりくはそうおもっていた。養生の甲斐あって鯉之助が心身ともに立ちなおったとき、もし応じてくれるならば、夫婦になってもよいし、それをのぞまないならば今のままの暮しをつづけていけばよい。それがおりくのかんがえであった。

おりくには今、ほかで縁談がもちあがっていた。店の大事な客加納屋金兵衛がもちこんできた縁談だから、おりくは丁重にその意のない旨をあらわしているのだが、相手はそれでも見合いをのぞんでくるのだった。

越後屋藤市という大きな米問屋の主人が縁談の相手である。二年前に女房を病気でなくし、後添をさがしているのだそうだ。年齢は五十にちかいというが、家業も本人の人柄も申し分ないというのが加納屋の仲人口である。

鯉之助とはからずも再会した今、おりくがそんな話に耳をかたむけるはずもなかった。おりくが商売以外にかんがえることといったら、鯉之助のことしかないのだった。

夏がおわって、秋風が吹きだした。

蓮の季節はすぎたが、それでも商売は順調である。上野周辺は四季の景観が豊富なところだ。春の桜からはじまって、あやめ、花菖蒲、夏の蓮、秋の萩、菊、紅葉狩り、冬の梅見とこと欠くときがない。上野に人のむらがらぬ季節はないといっていい。

鯉之助の回復も順調である。血色もよくなったし、肌にツヤがもどってきた。

「もう以前の鯉さんにもどったわ。六年前とすこしもかわっておりませんよ」

おりくには鯉之助の回復がなによりもうれしかった。天から自分にあたえられた役目をようやくしとげたようなよろこびがあった。

「おりくには感謝するしかない。おれが元気になれたのはおまえのお蔭だ。もしおりくに明神境内で会ってなかったら、おれは今ごろどこかで野たれ死にをしていたかもしれない」

鯉之助もそういってよろこんでくれた。

「鯉さん、体がよくなったのだから、蒔絵をまたはじめたらどうですか」

蒔絵師としてふたたび世にでていきたいというのが鯉之助の本意であろうとおもっておりくはいった。

「蒔絵を本格的にやるのだったら、京都へいって一から修業をやりなおさなければ駄目だ。残念だが、もうおれはそれほど若くはないよ」

鯉之助には蒔絵についてかんがえていることがあるようだ。このときは自分の気持をそうおりくにつたえた。

その年があけた。

おりくと鯉之助との暮しはかわらなかった。見る者が見れば、夫婦同然という暮しが前年からつづいている。

おりくも鯉之助も、蒔絵のことはあれいらい一度も口にしなかった。

正月十四日。江戸ではこの日を〈十四日年越し〉という。正月の門松や七五三縄など屋外の飾りは七種にとりのぞくが、内部の輪飾りはのこしてある。その輪飾りをこの日にとりはずすのだ。それは江戸城三十六見附門、諸大名の屋敷の門もおなじである。

この日、おりくは正装に容儀をこらして、駕籠で蓮花亭をでた。年越しの挨拶のためではなかった。昨年からいわれつづけている越後屋藤市との見合いをとうとうことわりきれなくなって、仲人の顔をたてるためにでかけたのだ。

場所は懐石料理で有名な、日本橋〈箸長〉である。

箸長の座敷で仲人の加納屋金兵衛の立ち合いのもとに、おりくは藤市と一刻半（三時間）ばかり時間をすごした。予想したとおり、藤市は好感のもてる人物だった。おだやかでおちついた雰囲気をもっていた。風采骨柄も立派である。ちかくにいるだけで人柄のあたたかさがつたわってくるような感じがした。

こんな人の女房になれば、さぞしあわせな暮しがおくれるだろう、とおりくはおもった。けれども答ははじめからきまっていた。加納屋の顔をたてるためだけに、ここにきたのだ。

気ぶっせいな気持のままで、おりくは駕籠で蓮花亭にもどってきた。夕日がしずもうとするところである。
玄関を入るとき、なぜかかすかに胸さわぎのようなものをおぼえた。
それがなにかはおりくにもわからなかった。わからぬまま、玄関の戸をあけた。
「おかえりなさいませ」
玄関に仲居頭（なかいがしら）のよしみがでむかえた。
「かわったことはなかったかい」
よしみの顔を見ながらきいた。
「かわったことはありません」
よしみの返事をきいて、まずほっとしながら、鯉之助のいる八畳間の座敷へまよわずむかった。胸さわぎの震源はここらにあるような気がしていた。廊下をいくおりくの胸にまたさざ波のようなさわぎがおこった。
「鯉さん」
声をかけたが、返事はなかった。予感したとおりである。
おりくはおもいきって障子戸をあけた。
むろん鯉之助の姿はなかった。
夜具がしまわれずに、二つ折りにされて座敷に片寄せてあった。鯉之助の夜具はいつもおりくが出し入れをするが、今日ははやくでたためにしまっていかなかった。

座敷の真ん中にやや不自然な空間がひろがっている。これと似た光景をおりくは七年前に見たことがあった。鯉之助が失踪（しっそう）したときの本郷の旅籠（はたご）の座敷である。
おりくは胸をつかれ、両足の膝頭（ひざがしら）ががくがく鳴りだした。予感はまさにあたっていた。
「鯉さんは？」
たずねると、
「朝がたおでかけになりました。もう間もなくおもどりになるでしょう」
よしみののんびりとした返事がきこえた。
おりくはしばしのあいだ動転していた。
（鯉さんは、ここをでていった！　もうかえってこないだろう）
確信にちかいおもいがあった。
押入れをあけると、中はふだんとおなじ状態である。異状をつげるものはなにもない。
ところが、床の間に画帳から切りはなした絵が一枚おいてあった。
とりあげて見ると、昨年神田明神の境内で再会したとき、鯉之助が画いたおりくの似顔絵だった。おりくはしばらくそれに見入った。
「鯉さんは、きっと京都へいったんだ」
座敷に力なくすわりこんでおりくはつぶやいた。蒔絵の修業をしなおしにでかけたのだろうと想像した。

黄菊白菊

一

それは一瞬の再会だった。

おきくが気づいたとき、相手はもう遠くへ去っていた。呼んでも遠く、おきくは駆けもどることもできぬ船の中だった。

相手の高之助も船の中である。渡し船と渡し船とが遠くすれ違う一瞬、波のかなたに高之助の横顔を見たのである。相手はおきくに気づきもしなかった。

しかしおきくは、高之助がしるし袢纏、腹掛、股引の職人姿であることをしっかりみとめていた。九年前の若旦那とは想像もおよばぬ身のかわりようではあるが、おきくが高之助を見まちがえるわけはなかった。ながい歳月のへだたりがあるとはいえ、高之助は高之助だ。高之助はおきくにとってはじめての男であった。

船は本所中之郷竹町と浅草材木町とをむすぶ〈竹町ノ渡し〉である。おきくの胸はずっと鳴りどおしである。高之助の顔と姿がまるで焼印でおしたように瞼に焼きついた。

船がおなじ方向にむかっていたのなら、渡し場についたところで待つなり追いかけるなりの方法はある。しかし運命の神は皮肉である。たがいちがいの方向の渡し船でのすれちがいであるから、手立もなにもなかった。

おきくは材木町の桟橋に船がつくなり、駒形町の旅籠〈立田屋〉に駆けもどった。

「女将さん、どういたしました」

女中のおとねがきくのへ、

「今若旦那を見たんだよ、大川の流れの上で。植木屋の恰好をしていたわ。今は植木屋になっているんだわ、あの若旦那が。これから若旦那をさがすから、おとねも手つだっておくれ」

おきくは興奮をそのまま口にした。

「若旦那はやはり江戸にいらしたんですね。でも植木屋とは」

おとねにもおきくの興奮はよく理解できた。おきくは今でこそ立田屋の女将として立派に立身しているが、その昔は日本橋通旅籠町にある〈倉田屋〉という旅籠の女中であった。おとねは同年の朋輩であった。そして倉田屋の隣家が酒問屋で、高之助はそこの跡取息子だったのである。

「遠くからでもしるし袢纏、腹掛、股引ははっきり見えたからね。すこし年はとってたようだけど、そのぶんだけじつにイナセな男ぶりだったよ」

おきくの興奮はまださめやらぬ。

「若旦那が江戸にいることはわかりましたけど、しるし袢纏、腹掛、股引といえば植木屋以外の職人もいるじゃありませんか」

おとねのいうとおり、大工、左官だっておなじような恰好をしている。

「おちぶれた若旦那がやる仕事といったら、大工や左官じゃないとおもう。若旦那が似合

うとすれば植木屋ですよ」

　おきくは船で見たときから、直感でそうおもっていた。自分の直感にうたがいをいだいていなかった。

「女将(おかみ)さんのためですから、お手つだいいたしましょう。ですけれど、旦那さまにわからぬようにいたしませんと」

「そんなことはわかっています。わたしは亭主持ちですから。でもおとね、若旦那さがしを手つだって」

「はい、はい、わかりました。若旦那はわたしもなつかしい人ですから。でも見つかれば、世間がうるそうございます。世間は他人(ひと)の色恋には口うるさいものですから」

「わたしは色恋でいってるんじゃありません。勘当された若旦那の行く末が気がかりなんです」

「そうでしょうとも、それでも気をつけるにこしたことはありません」

　おとねはおきくが興奮のあまりはしゃぎすぎるのをたしなめたいのだ。おきくにもそれはわかっていた。おきくには立田屋藤七という亭主がいる。藤七が倉田屋ではたらいているおきくを見染めて二度めの妻にもらってくれたからこそ、浅草かいわいで一、二をあらそう旅籠の女将になれたのである。そうでなければ、おきくは今でも倉田屋でとうのたった女中として身を粉にしてはたらいているか、飯盛(めしもり)に身売りしているかのどちらかだ。今の亭主がおきくに幸せをはこんでくれたのだ。

「浅草かいわいにある植木屋をていねいにさがしていくか、それとも竹町ノ渡しを見張るか、どちらがいいだろうかねえ」

　身は十分につつしまなければならぬ人妻だが、おきくはどんなことをしても高之助をさがしだしたかった。一度会って顔を見て、話がしたかった。それは色恋というよりも、なつかしさである。さほどやましさはないのだった。

「竹町ノ渡しをつかって本所側の仕事場にでているのかもしれません。当座今日とおなじ時刻に渡し場へでてみてはどうでしょうか。それはわたしにおまかせください」

「おとね、たのむよ。恩にきるわ。一日中渡し場を見張るわけにはいかないのだから、とりあえず朝の見張りをたのむよ」

　今朝、おきくははやくおきて、竹町の南河岸にある青物市場へ朝の惣菜用の買いだしにゆき、そのかえりの船で高之助の乗った船とすれちがったのである。それから想像すると、高之助の住居(すまい)も浅草か、そのちかくにあるとかんがえてよさそうだ。今朝、おきくの船に乗った時間がすこしおそかったら、高之助とおなじ船に乗り合わせたかもしれない。

　翌朝から、おとねは今までより半刻（一時間）ばかりはやくおきて朝の仕事をすまして材木町の渡し場へでていった。一刻ほどのあいだ渡し場で乗り降りする客を見張りつづけて、毎日むなしくもどってきた。

「若旦那、あの日だけ渡し船に乗ったんじゃないかしら。一人も見のがさずに見張りましたけど、若旦那の姿は見つかりませんでした」

数日つづけておとねはいった。おとねも高之助のことはよく知っているので、見のがすことはない。

おきくもやや落胆していた。おとねが渡し場でさがす一方、おきくは浅草かいわいの植木屋をたずねては高之助の消息をさがしていた。けれども今までのところはなにも手がかりは見つからなかった。

「もう四、五日つづけてみておくれ。そのあいだに出会うかもしれない。わたしも、もうしばらく浅草の植木屋をさがしつづけてみるから」

おきくははじめからそう簡単に見つかるとはおもっていなかった。けれどもあの日、船と船ですれちがったのは高之助にちがいないと確信していた。わりあい身ぢかなところに高之助は住んでいるような気がした。まめにさがせば、いつか消息がつかめるとおもった。

二

以前の高之助は札付の道楽息子であった。

酒問屋〈上総屋〉は高之助の祖父がはじめた店で、暖簾をほこる問屋だった。そこの跡取息子だから、世間でもほうってはおかぬ。飲む、打つ、買うの世界のなかに仲間ができてしまった。しかし高之助はおごらぬ性質で、一本気なところがあった。そのうえさっぱりとした顔立ちだから、近所の娘たちや女中らには根づよい人気があった。上総屋と棟をならべた倉田屋の女中たちの噂にもよく高之助は登場した。

おきくもおとねも、その年三月の出替で倉田屋に奉公した。年もそろいの十七だった。しかしおきくのほうがなにかと才たけていて、器量もすぐれていたので、おきくが重宝がられ、おとねはよく主人夫婦から叱言をいわれていた。泊り客のうけもおきくのほうが格段にまさっていた。常連の泊り客など、わざわざおきくを名指してくる者もすくなくなかった。

浅草は浅草寺の膝元というばかりでなく、奥州街道、日光街道の入口でもあって、人の往来はさかんで、旅籠、木賃宿などはたくさんあるところだ。倉田屋も繁昌していて、奉公人の数もおおかった。

倉田屋の女中部屋から、垣根ごしに上総屋の屋内をのぞくことができた。とりわけ高之助の部屋は真むかいに見えた。高之助は女中をからかってよく声をかけてきた。

おきくも何度か声をかけられた。高之助は四人いた倉田屋の女中のうちでは、おきくをいちばん気に入っているようだった。声をかけるときの高之助の態度がほかの女中の場合とではちがうのである。

ある夕、女中部屋におきくが一人でいるとき、あけはなった窓の外から飛来してきたものがあった。手にとると、先に鈴のついた簪だった。このころ高価ではないが、先に鈴のついた簪がはやっていた。しかもそれには紙を折ってむすんだものがついている。

とんできたほうを見やったが、もう誰もいなかった。むすび文をとくと、

こんや　おうせがしたい　まどをあけておいて　おきくどのまいる　高のすけ

達筆ではないが、そうつたなくはない仮名文字がつらねてあった。つけ文というよりは投げ文である。しかしその内容は大胆なものだ。

(今夜、逢瀬がしたい。窓をあけておいて。おきくどのまいる。高之助)

その文字がおきくの頭のなかを駆けめぐった。胸が早鐘をうつように鳴りだし、体があつく燃えだした。夜這いを予告した文にほかならぬ。

(どうしようか、こまる……)

頭のなかが滅茶苦茶に混乱していった。となりの若旦那は好きではあるが、身分がちがう。しかも評判の道楽息子である。おもちゃにされて捨てられるのがオチである。先がはっきりと見えている。

(それにわたしは、そんな尻軽な女じゃない。女中だからって馬鹿にしないで)

そんなおもいもこみあげた。川柳では下女や女中をすぐに股をひろげる好色女のように詠んでいるが、それはとんだまちがいだ。そうじゃない女中だっておおいのだ。倉田屋の主人か女将さんにつげてやろうか。そうしたらすぐに上総屋に通報されて、高之助はこっぴどく親から叱られるだろうとおもった。

けれどもおきくはつげ口はしなかった。そのかわり、その夜窓もあけておかなかった。雨戸のコザルもしっかりおろしておいた。

さすがにその夜は寝つけなかった。布団に入っても頭の芯がかっかと燃えて寝つくどころではない。

(若旦那は本当にくるんだろうか?)

はじめてのことだけに、おきくはなにも予想がつけられぬ。張りつめた神経で窓の外をうかがって、まんじりともしなかった。隣家の庭を横切って、高之助が四つ目垣をこえてやってくる姿ばかりを想像した。

子の刻(午前零時)がちかづいたころ、

トン　トン

窓の雨戸がちいさな音をたてた。胸が張りさけるような思いでおきくはその音にたえた。布団のなかで体をかたくしていると、またちいさな音がひびいた。今夜は六畳におきく一人が寝ている。同室のおとねは実家の母が病気で二日前から暇をとっていた。高之助はそれを知っていて、この機をねらったのであろう。

雨戸の音がするたびに、身のちぢみあがるおもいをした。となりの女中部屋には年かさの女中が二人寝ている。そのむこうの部屋にも住みこみの手代がいる。音をきかれれば、おきくが男をひき入れているとうたがわれるおそれがある。

とうとうたまりかねて、おきくは布団からたちあがった。そして窓ぎわへ寄った。窓をあけて、高之助にすぐ立ち去るようにいうつもりだった。

窓の障子戸をあけ、さらに雨戸をそっとあけた。

（あっ！）

おきくが制止する暇もなかった。闇の中からとつぜん黒い影が突風のように部屋の中に入りこんできた。

言葉を口にする間もあらばこその早わざだった。高之助ははじめからこういう侵入法をかんがえていたようだった。

（いや、だめ！）

男が部屋の中に入ってきてからは、恐怖と動転で、おきくは自分がなにをしたかもわからなかった。ただ物音を倉田屋の者にききつけられないことだけをねがった。

あっという間に、おきくは布団の上におしたおされた。男のあらい息がせまってきた。声もなく必死であらがってみたものの、それははかない抵抗だった。

高之助は夜這い（よば）の方法、女に声をださせない方法をこころえていた。おきくの抵抗などまるで意味がなかった。たちまち組み伏せられ、寝巻の衿（えり）をひろげられた。乳房を吸われてすっかり観念してしまった。

高之助は嵐のようにおきくを翻弄（ほんろう）して、窓から垣根をこえてかえっていった。

その後も、二度高之助はおなじ経路、おなじ方法でおきくの部屋をおとずれた。その両度とも、おきくはただ嵐に翻弄される小舟のように、高之助の荒あらしい愛撫（あいぶ）に身をまかせていただけだった。

けれどもおとねがもどってきてから、夜這いの機会がうしなわれるとともに、二人のあいだは遠のいた。なにがなんでも密会しようとおもえば手立（てだて）は見つけられたとおもうのだが、高之助にはそれまでの熱意はなかったようだ。

秋風がたつとともに、高之助とおきくとの仲はおわった。まことにあっけない結末だった。高之助はそれまでつみかさねてきた道楽のかずかずがもとで、店の大金をつかいこんでいたことが見つかり、父親と大喧嘩（おおげんか）のはてに家をでていった。それいらい高之助は上総屋にもどってこなかった。勘当されていたことがおきくには後からわかった。

三

「女将さん、植木屋といったら、上総屋に入っていた植木屋をたずねたらどうでしょう。なにかわかるかもしれません」

おとねがそういったのは、高之助さがしになんの手がかりも見つけられず、二進（にっち）も三進（さっち）もいかなくなっていたときだった。

「そうだねえ、それはいい思案かもしれない。おとね、上出来だよ」

おきくはおもわずそういった。

竹町ノ渡しで見たので、浅草近辺に気をとられすぎていた。高之助のような若旦那が植木屋になるのだとしたら、なにかよほどの手蔓（てづる）がなければ不自然である。年季の入った修業をしているわけではないのだから、縁故をたよって植木屋の親方に弟子入りする方法しかかんがえにくい。

「上総屋のご主人は庭好きの方で、しょっちゅう植木屋が入ってましたよ」
「そうだよ、それにきまっている。おとねは頭がいいよ」
おきくの勘にもぴたりとくるものがあった。高之助はその親方と仲がよくて、菊の仕立て方などをおそわっていたことをおもいだした。
「上総屋へいってきいてみたらいいんじゃないでしょうか」
「それがいちばん手っとりばやい方法だねえ。わたしがいくのは気づまりだけど」
「わたしがいってきますよ。上総屋にはまだ知っている手代さんか番頭さんがいるでしょうから」
「わるいねえ、そうしておくれ。恩にきるよ」
おとねをおだてておくりだした。
その午後、おとねはもどってきた。
「上々吉のようだね、その顔は」
おとねのにこやかな顔を見て、そう読んだ。
「上総屋出入りの植木屋がわかりましたよ。日本橋、松枝町の植半だそうです。親方の半兵衛という人がおそらく若旦那の消息を知ってるんじゃないでしょうか」
おとねは余裕のある顔を見せていった。
「ありがとう、若旦那はきっと植半に身を寄せているんですよ。わたし今日いってきます。若旦那に会ってくるからね」

おきくはもう高之助が植半にいるものときめていた。確信にちかいものがあった。
「植半に若旦那がいるかどうかはわかりませんよ」
とおとねはいったが、ききながして、はやめに内湯につかり、さっぱりとした気持になって立田屋をでた。
松枝町で植半をさがしあてるのはわりあい簡単だった。町内の米屋できくと、すぐにおしえてくれた。
「こちらに、上総屋さんの高之助さんは厄介になっていないでしょうか」
おきくは小細工をせず、真正面から植半の玄関をたずねた。
でてきたのは半兵衛の家内らしく、いかにも職人の女房といった飾り気のない女である。
はじめはすこしおどろいた顔を見せたが、
「高之助さんならばうちにおりますが、今は仕事にでています。夕方おそくか、宵のうちにもどってくるでしょう」
あっさりとそういった。いぶかしんでいる様子もなかった。
「高之助さんにお目にかかりたくてやってまいりました。待たしていただいてよろしいでしょうか」
おきくは肚をすえてきたので、おちついていった。
「どうぞ、よろしければあがってお待ちください」
女房はすぐにそうすすめてくれた。

そう立派な家ではなく、建ってからかなり年月がたっていそうだが、女房がきれい好きと見えて、家の中はきれいに整頓され、敷居や廊下はよくみがかれていた。

　女房の言葉どおり、夕闇がだいぶ濃くなったころ、高之助は半兵衛やほかの職人たちとともにもどってきた。そしておきくが待っている部屋に顔をのぞかせた。

「若旦那……」

　先に声をかけると、高之助は一瞬棒立ちになった。

　九年の歳月は高之助の顔にも姿にもあらわれていた。それなりに年はとったが、男らしくおちつきがでていた。大店を勘当されておちぶれたのはたしかだが、その顔貌はすさんでもいないし、悲哀も感じられなかった。それがおきくはうれしかった。男くささとたくましさが高之助にはにじみでていた。

「倉田屋の、おきくさんだね」

　声音までがひくくおちついていた。

「おきくです。若旦那、おひさしぶりでございます」

　おきくは笑顔でいったが、胸のうちでは感きわまって泣いていた。

「おきくさんなら、玉の輿にのって大層出世をしたときいていた」

「………」

「おおきな旅籠の女将になったそうだが」

　皮肉でいっているのでないことは高之助の顔を見ればよくわかる。

「たまたま縁があって、今の主人の後妻に入りました」

　おきくも気取りも卑下もなく、素直にこたえた。

　高之助はうなずいた。彼はおきくを一目見ただけで、おきくの今の生活をおよそ想像することができたはずだ。倉田屋の女中をしていたころとでは、おきくの身形も容姿もかわっている。

「よかったじゃあないか。それに反して、おれはこのていたらくだ。道楽のツケがたまって勘当されたのは当然のむくいだろう。野たれ死ぬ寸前を植半の親父にたすけてもらった」

　そういう言葉のわりには高之助の表情はあかるく、力づよい。つらい時代をなんとかくぐりぬけ、今は多少の自信を身につけてきたからのようだ。

「一ヶ月ばかり前、竹町ノ渡しで船に乗っている若旦那を見かけました。しるし袢纏、腹掛の恰好をなさってましたので、植木屋をずっとさがしておりました。若旦那、わたしのことがわかってたのなら、一度くらいさがしてくださってもよかったのに」

　いうまいときめていた愚痴をついに口にした。

「おまえには詫びなければならないことが山ほどありそうだ。それに旅籠の女将におさまった女をさがしあるくのは罪だから」

「詫びなんて……、若旦那が詫びるようなことはなにもありませんよ。わたしはただ若旦那にひと目会って話がしたかっただけです。それで若旦那をさがしたんです」

「でもよかった。おきくがこんな立派になるなんて。おれがつきまとっていたら、ロクなことにはならなかった。おまえは運のつよい女なのだろう」

そういう言葉には真実感があふれていた。

「わたしもうれしい。若旦那がこんなに達者でいるなんて。しかも地道な仕事についていらっしゃる」

「半兵衛にたすけてもらったからだよ。まだ一人前じゃないが、ここで仕事を身につけようと思っている」

「若旦那が立派にやっていれば、いつか勘当がとけるかもしれません」

「上総屋は今じゃ妹の婿が立派にやっている。おれが上総屋にもどることはない。それでいいんだ。親父だってこれからおれの勘当をといたりしたら、世間に顔むけできなくなるだろう」

高之助は不用意におきくが口にした言葉をぴしゃりと断ちきった。そういう覚悟が今の高之助をささえているのだろう。

「一度、おとねと一緒に若旦那とゆっくりお話がいたしとうございます。若旦那の消息はおとねがつきとめてきてくれました」

おきくは純粋な気持でそういったつもりだったが、いくらかは昔の気持が尾をひいていた。

四

高之助が立田屋の庭をまかされるようになったのは、それから間もなくのことだった。

「若旦那、うちの庭の面倒を見てくれませんか」

おとねを入れて三人で浅草寺境内の茶屋で会ったとき、おもいつくままにおきくがそういったのがきっかけだった。立田屋の庭はそう凝ったものではないが、客が泊まりにくる商売だけに多少見てくれはととのえてある。各季節ごとには植木屋の手が必要なのだ。

「おやすい御用だ。おれが今できることといったら、そんなことくらいだから」

高之助は屈託なくわらった。

おきくは高之助が庭の手入れにくる日を指折りかぞえて待つようになった。

高之助が姿を見せた日は、植木鋏をつかう音におきくのこころはみだれとおした。高之助はかつての道楽息子ではなく、もう立派な一人前の職人であった。藍色のしるし袢纏、腹掛、股引の姿はぴたりと高之助の身についていた。仕事のはこびも身のこなしも職人のものである。

仕事をしているときの高之助の顔は男らしくひきしまって、精悍な雰囲気があった。かつての道楽息子の面影は微塵もなかった。よくこれほどかわったものだとおきくはおもった。

おきくの胸には九年前のおもいが芽ばえだした。それは当時よりももっとはげしく、や

る瀬ないおもいであった。

以前のおもいは一方的に高之助にふりまわされ、誘発されたものだった。今は自分のほうから男に寄せるおもいである。もう初心ではない。世間を知った大人の自分がいだく恋ごころだけに、余計始末がわるかった。

おきくのおもいをよそに、高之助は一日中無心に仕事をつづけていく。仕事をしているあいだは無駄口はきかないし、よそ見もしない有様である。ほかのときといえども、高之助は昔のことにつながる話はまったく口にしないのだ。そういう意味では、まるで隙を見せない。

（今、わたしのことをどうおもっているのだろう）

おきくはそれが知りたいのだが、高之助は心中をうかがわせようとしなかった。こころを閉ざしているという大袈裟なことではない。昔をわすれてしまったような態度がかえっておきくの胸をかきたてた。

「若旦那、ずいぶんいい男になりましたねえ。昔だって、それはもてたでしょうが、今のほうがずっとおもてになるんじゃありませんか」

おきくだって今は世間慣れしているから、それくらいの口はきける。

「そんなことはないようだよ。昔はでたらめだったが、今じゃこちらからちかづかないようにしてますからね」

昼餉の仕事やすみに茶を飲みながら高之助はわらってこたえた。

そういわれると、おきくはでたらめで体をおもちゃにされたようで面白くなかった。

高之助がどういう気持でいるのか、本心をえぐりだしてみたかった。かくしているなら、あばきたてて火をつけてやりたい気持だ。

主人の藤七は旅籠仲間の行司をつとめており、付き合いがおおく、昼も夜も家を明けていることがおおい。おきくさえその気になれば、藤七の目をぬすむことはそう困難ではないのだ。

つぎに高之助が立田屋にきたとき、折あしく、昼から雨になった。すこしくらいの雨ならば、濡れても仕事をしてしまうのが職人である。けれども、その日は天気の急変でどしゃ降りとなった。

「こいつはたまらん」

いいながら高之助は道具をもって軒下にひきあげてきた。

「それじゃあ風邪をひきます。湯殿でお湯をあびてきてください」

おきくはそうすすめた。旅籠だから、湯殿の湯はいつもわいている。

「そうさせてもらおう」

高之助は屈託なくうけた。

おきくの決断ははやかった。高之助が湯をつかっているあいだに、おきくは浴衣に着かえた。あらいたての浴衣の袖に手をとおしたときから、こころは燃えあがった。

湯殿からあがってきた高之助へ、おきくは真あたらしい浴衣をさしだした。

「若旦那、わたしを抱いて……」

うしろからささやいて、高之助に浴衣を着せかけた。湯あがりの高之助の体はたくましくひきしまっていた。その肩口のあたりにおきくは爪をたてた。

男の体が一瞬、ぴくりとうごいた。そのとき高之助も決意したようだった。姦夫と姦婦におちる決意だ。

藤七は留守だが、いつもどってくるかもしれぬ。もどってきたら、おきくの人生は破滅をむかえる。

しかし燃えあがったこころはその恐怖をわすれさせた。

「おきく、覚悟はいいのか」

高之助は一度念をおした。

(見つかったなら、仕方ないわ……)

用心に越したことはないけれど、最悪の場合をむかえたときは、そのときのこと。激情の燃えあがるにまかせて、おきくは自分を納得させた。今まで自分にこれほどのはげしさがあるとは、気づいていなかった。

二人はもつれ合うように夜具をのべた部屋へ入った。

おきくは自分が着せたばかりの浴衣を脱がした。九年前は、いつも一方的に高之助がおきくの寝巻をはぎとっていた。今度はおきくがそれをしたのだ。

おきくは浴衣のままで床に入った。

「おきく、いい女になったな。お前は立派だ、たいしたものだ」

高之助はうめくようにいって、全裸でのしかかってきた。

おきくは高之助の体の肌ざわりをおもいだした。記憶はあざやかにもどってきた。

「若旦那、すこしもわすれてはいなかったわ」

そういった口を男の口でふさがれた。

舌が口の中に入ってきた。この感触もおもいだした。以前は必死で侵入をふせいだものだが、今は自分のほうから吸い入れた。吸いこんで、自分もからめて、吸い合った。

その後はもう激情の嵐に身をゆだねるだけだった。

五

黄菊白菊が立田屋の庭の垣根ぞいに咲きほこっている。

この夏高之助が苗をもってきて、垣根ちかくに植えた大輪の菊が芳香をはなっている。

〈黄菊白菊そのほかの名はなくもがな〉

とよまれた句はおきくも知っている。自分の名からも、おきくはかくべつ菊の花に愛着をもっていた。群花のなかでもっとも豊麗で気高い花が大輪の黄菊ならば、もっとも気品あって清香な花が白菊であろう。

高之助は口にはしないが、おきくのうつくしさを黄菊白菊になぞらえて植えてくれたようである。

この菊花をながめていると、おきくは今のしあわせと、藤七への後ろめたさを同時に感じて息ぐるしさをおぼえてくる。黄菊はおきくのしあわせを祝福してくれているようであり、白菊の純潔さはおきくの不貞をとがめているように感じられた。

おきくは黄菊白菊どちらも好きで、どちらか一方をえらぶ気にはなれなかった。しかし双方を見ていると、どちらかをえらばなければならぬ自分の生き方をかんがえさせられた。

（今のままでつづくわけはない……）

しあわせを感じながらも、いつも不安とためらいに追いかけられていた。

藤七への後ろめたさばかりではない。おきくは生さぬ仲とはいえ二女の母親の立場だ。藤七と先妻とのあいだにはもうとついでいる娘が二人いる。その娘たちへの負い目もないではなかった。おきくは藤七よりも娘たちの目のほうがこわかった。藤七はなんとか誤魔化せても、娘たちをあざむきとおす自信がなかった。

このまま宙ぶらりんをいつまでもつづけてはいかれない。おきくは人生二度めのおおきな岐路に立っているのを感じた。一度めは藤七の後妻になるかどうかをきめたときだ。

ともかく、目下のいちばんの願いは、高之助に植木屋として一本立ちしてもらうことである。勘当された若旦那が立派な職人になれば、上総屋の両親もすくわれるだろう。反対に身をほろぼせば、両親の気持もすくわれまい。

おきくはどちらをえらぶにせよ、まず高之助が一本立ちするのを自分の目で見とどけなければならぬとおもった。見とどけたならば、どちらをえらぶかはおのずからきまるだろうとかんがえた。

その年が明けるころには、おきくと高之助との仲がぼつぼつ世間の噂になりはじめた。秘めていても、女の恋はどうしても色にでるものだ。いくら気をくばっても、どこかにでてしまう。女のほうが自分の気持に正直だからだろうか。

「おきく、話があるんだ」

藤七がそう切りだしたのは、正月が明けてまもないころだった。

おきくは藤七が高之助との仲に気づいたとおもった。観念しなければとおもいながら藤七の話をきいた。

「以前から、おまえはいっていたな、店をもう一軒持ちたいと。いい出物が見つかったよ。今戸橋のちかくの船宿が売りにでている。船宿としてそのままやってもいいし、場所柄、旅籠にしてもいい。どちらでもいいから、おまえやってみないか」

藤七は女房の噂についてはふれずに、そういった。

藤七が噂を耳にしていないはずはない。知っていて女房の気持をためしているのだ。

即座にこたえた。

「いい場所に出物があったものですね。わたしはぜひやってみたい」

立田屋は藤七が先妻とともにきずいた店である。後に入ったおきくがどう頑張ってみても、これから発展の余地のある店ではない。おきくはかねて、自分で一から商売をはじめてみたがった。

「おまえがその気なら、立田屋は娘にゆずるか、それとも番頭にまかせるかして、おれたちは今戸へうつってもいいんだ」

藤七の言葉をきいて、おきくは亭主の意図が読みとれた。藤七はあたらしい店をおきくに持たせて、高之助との仲を断ち切ろうとしているのだ。穏便で大人らしい藤七のやり方である。あたらしい商売をやるとなったら、男になぞかまってはいられなくなる。しかも夫婦して今戸に引っ越せば、高之助も簡単には寄りつけまいという料簡（りょうけん）であろう。

「あたらしい店をやるのは大変でしょうけど、わたしには長年の夢ですから」

おきくにとっては胸のわくわくするような話だ。藤七の言葉におきくはぐっとひき寄せられた。

今戸橋といえば、山谷堀（さんや）と隅田川の合流点にかかる橋である。奥州街道に沿っていながら、花の吉原へわかれるところである。船宿としてもいいし、旅籠としても絶好の場所である。

「おまえがやるなら、おれも後押しをしよう。おれには老後の一仕事だ」

藤七は苦労して立田屋を成功させた男である。これまでの苦労で性格もねれている。三人とも誰も傷がつかぬような解決法を藤七はかんがえたのだ。

（苦労をかけてごめんなさい）

亭主の気持がよくわかるだけに、おきくは胸のうちで詫びをいった。最悪の場合、姦夫（かんぷ）姦婦はかさねて四つに処断されかねぬ立場なのだ。

「ぜひ、やらせてください。立田屋よりも繁昌（はんじょう）する店をつくります」

おきくは旅籠の女中として苦労し、旅籠の女将に出世した女である。旅籠商売は天職といっていい。ぜひ自分の店を自分でつくってみたかった。

「この春から店をつくりなおせば、夏には店をひらけるようになるだろう。おきく、頑張ってやってみてくれ」

藤七はおきくを一言も責めたてずに改心させようとしているのだ。しかも同時におきくの夢をかなえさせようとしている。

おきくは藤七の気持がよくわかって、身のちぢむおもいであった。

六

あたらしい店をつくるには時間がかかった。

おきくは船宿よりも本格的な旅籠をやりたいので、建物は大改築しなければならなかった。おなじような商売とはいえ、用途がちがうので、内外にわたって手をくわえる必要があった。

三月から工事にかかって、四月にはだいぶできあがってきた。翌月中には開店にこぎつけられる目鼻もついた。

おきくはこの仕事に本腰を入れていた。一生一度（いっしょう）の仕事だとおもっていた。ほとんど毎日、今戸橋の工事現場にでかけていった。船宿にしろ、旅籠にしろ、主人よりは女将が表

にたってやる商売である。なにかにつけて、藤七よりはおきくが指図しなければならないのだ。

日々完成にちかづいていくのがなによりもたのしみだった。あたらしい商売で自分の腕がためされているとおもうと、わくわくするようなおもいがした。

高之助との密会の機会（おり）が減った。おたがいに仕事をもつ大人だから、時間のやりくりが大変である。

高之助にはあたらしい店をひらくことはまだ打ち明けていなかった。このつぎ、このつぎとおもいながら、つい機会をうしなっていた。

高之助と会わぬ日がつづいた。日を追って、おきくは多忙になっていった。しばらくは高之助に会えぬのも仕方がないとおもうようになった。

梅雨に入ってからの一夜、いやな夢を見た。おきくと橋をわたっていた男が、おきくが小石につまずいてたおれそうになったのをたすけようとして、はずみで男のほうが川におち、隅田川をながされていく夢だ。

おきくは大声をあげながら男を追って岸を駆けたが、誰もたすけにはきてくれない。自分でもたすけることができず悪戦苦闘し、もがいているうちに目がさめた。寝汗のために浴衣（ゆかた）はぐっしょり濡（ぬ）れていた。めざめてほっとするとともに、全身から力がぬけていった。

その日は高之助が庭仕事にくる日だったが、朝からおきくは建具屋、表具屋との打ち合わせで今戸橋へでかけていった。

昼下り、用事がすんでこれから立田屋へもどろうとおもっていたとき、おとねが店から駆けつけてきた。

おとねの顔を見たとたん、おきくはいやな予感を覚え、昨夜の夢をおもいだした。

「おとね、どうしたの?」

「女将（おかみ）さん、大変です。若旦那が高い木の枝からおちて、大怪我をしました」

おきくは自分の血相がかわるのがわかった。

「命には別状ないんだろうね」

まずはそれを心配した。命さえあればなんとかなるとおもったのだ。

「命は別状ありません。女将さん、ごめんなさい。わたしが余計なことをいったばかりに若旦那、とりみだしたのかもしれません。若旦那がおちたのはそのすぐ後でしたから」

おとねは申しわけなさそうに口にした。

「あたらしい店のことだね」

おきくは少々胸をつかれた。

「若旦那はもうご存知なのかとおもって、つい口をすべらしてしまいました」

「今までなかなかいいだす折がなくってね」

「若旦那はずいぶんおどろいたようでしたよ」

「そうだったの……?　そんなにおどろいたのかしら。若旦那にはわるいことをしてしまったわ」

いいながらおきくはおとねとともにいそぎ足で立田屋へむかった。今戸橋から駒形町はほどちかいところだが、それでもおきくは気がせいてならなかった。

立田屋にもどると、高之助は頭と顔を晒でぐるぐる巻きにされ、左腕をおなじく晒でつって寝かされていた。

「若旦那、ごめんなさい、内緒にしていて。ついいいだせなくって、ごめんなさい」

高之助がそれほどまでに自分を愛してくれていたのかとおもうと、おきくはやる瀬なくなり、感きわまって泣きだした。

「おきく、そんなに大袈裟に心配しないでくれ。木からおちるなんて植木屋の恥だ。おれが間ぬけだったんだ」

高之助は晒をまいた顔で照れてみせた。

「ほんとにわたしがいけないの。わたしがわるくて、若旦那に大怪我をさせちまったのよ」

鼻をつまらせながらおきくはいった。

「そんなことはない、おきくはなにもかかわりないことだ。おれが勝手に木からおちたんだ。みっともない話だぜ」

「いいえ、それはわたしがわるいからです。気にするななんて、水くさい」

そういうとまた感きわまって、涙がこみあげた。

「怪我といっても、死んだわけじゃない。日がたてばなおるさ」

高之助はおもはゆそうにいった。

そんな高之助の態度がいっそうおきくのこころをゆすぶった。すこしでも高之助をないがしろにしたことがこころに尾をひいた。

長い梅雨があけ、江戸に真夏がおとずれた。焼けつくような太陽がのぼるよりも前、竹町ノ渡し場にむかう菅笠と市女笠。男女二人の旅姿がまだ薄ら闇の大気のなかに浮かびあがった。一番船で駆けおちするおきくと高之助の二人である。

船は暁闇の桟橋にもやっている。

今戸橋につくられた立田屋のあたらしい店は、夏がすぎてもとうとう開店しなかった。

霧の大川橋

一

そのときよし江は、夢見ごこちの中だった。

ここちよい夜風が吹きこんで、よし江の顔をなぶっていった。風はひらいた障子戸のあいだから吹きこんできたようだ。

時候は五月も末の、むしあつい夏の夜中である。よし江が寝ているところは、階下の女中部屋である。

となりには朋輩女中のみつ代が布団をならべて寝ている。

夢とうつつのはざまの中で、よし江は目をさまそうか、それともこのまま寝入ってしまおうかとしばらくためらった。けれども昼間の仕事づかれと眠気のせいで、おきあがるのが少々億劫だった。

よし江はためらいながらひんやりとした風をたのしんだ。真夜中に障子戸がどうしてあいたかを、なによりもかんがえるべきだった。

夜風とともに黒い人影が部屋の中に侵入してきたことに気がつかなかった。

女中部屋は廊下に面しており、その廊下は勝手口につうじている。旅籠の勝手口は、泊り客の都合で夜どおし戸じまりをしていないのだ。

知らぬ間に、よし江はふたたび寝入ってしまった。

ねむりながら自分の体の重さがなんとなく不快であった。なにかにのしかかられてくるような、押えつけられているような圧迫感をおぼえた。それに太腿のあたりが妙にすずしいのが気になった。

よし江ははっと目ざめた。なんと自分の裾はまくりあげられ、太腿が大きくひろげられている。そのあいだに何物かが割りこもうとしていた。

（誰っ？）

といいながらはねよけようとした。が、声が口の中でくぐもった。相手の手で口をふさがれてしまった。

（いや！）

もう一度いって、手足をばたつかせたが、今度も声にはならなかった。手足はわずかにうごいたが、相手は強引に腹の上に体をのせてきた。

相手のうごきはたくみだった。よし江の抵抗をあるていど予想して、さきにそれを封じたのだ。声をだすことができなくなり、相手の体重で自分がうごけなくなった。

男の声が耳もとで低くささやいた。

「しずかにおし。見つかって恥をかくのはおまえのほうなんだから」

他人に見られたら、はずかしくて生きてはいけないとおもった。

それでも必死で太腿を閉じようとこころみたが、男の腰が割りこんでいて、どうにもならなかった。反対にますます大きくひろげられるばかりとなった。

「一時の間だから辛抱おしよ。悪いようにはしないから」
押えつけるようにふたたび男がいった。
よし江はその言葉にききおぼえがあるような気がした。
（若旦那……？）
確信はなかったが、この旅籠〈福助〉の跡とり息子の伊太郎ではないかとおもった。よし江が抵抗をやめたのはそのためである。
よし江は今年の春福助に奉公をはじめたときから伊太郎を憎からずおもっていた。身分ちがいだから、そんなおもいをあらわしたことはないが、ひそかに好意を寄せていたのである。
暗闇の中で、寝巻の衿をひろげられ、男の手で乳房をやわらかく揉まれ、乳首を吸われた。男に体を触れられるのははじめてだから、それだけでも衝撃で気が遠くなりそうだった。けれども自分の乳を吸っているのが若旦那の伊太郎だとおもうと、嫌悪だけでなく、甘やかで、ひめやかな気持がおこってきた。
よし江が抵抗をしなくなったので男は我が意を得たように乳房をもてあそび、乳首を吸いまわした。そうしているうちに、男の舌の感触がなんともいいようのない快感をもたらしはじめた。
「声をだすなよ。となりがおきたら、面倒なことになる」
男はよし江の胸から顔をあげてそういった。

やはり若旦那の声だという気がした。その声はまたしてもよし江の抵抗をうばった。男はもっと腰を深く割りこませてきて、固く熱くしたものを押しつけてきた。
よし江は二、三度体をよじって、それを避けようとしたが、それは申しわけていどの抵抗だった。かさねてそれがせまってくると、
「いやよ……」
口ではそういいながら、つい男にしたがっていった。
男のものが何度かそのあたりをいきつもどりつした。そして入口を見つけるや、さしたる遠慮もなく侵入をこころみてきた。
激痛をともなうものだということをかねてきいていた。肉を裂かれるような痛さがつぎにおそった。
よし江は暗闇の中で、歯をくいしばってこらえた。部屋の中の暗闇がありがたかった。見えないから安心していられた。羞恥にもたえられた。
いつかうしなうものだが、このようなかたちで喪失がおとずれようとはかんがえたこともなかった。しかもとつぜんおとずれてきた。けれどもよし江にとってかなしいことではなかった。とつぜんだけに、驚きはあった。衝撃もあった。
ふたたび激痛におそわれた。体を二つにされるような痛みである。
男はしきりに腰をうごかしはじめた。
よし江はひめやかで重くるしい儀式がおわるのを待つばかりであった。みつ代の存在は

すっかりわすれていた。

二

茫々十数年の歳月がすぎた。

そして今年もまた夏がおとずれてきた。夏はなんといっても、よし江にとって衝撃的な季節である。

よし江は今までにいくたびか人生における変転をむかえたが、そのかわりめはほとんど夏におこっている。生まれたのが、真夏だったということから、こういう運命をもっているのかと何度もかんがえたことがあった。

よし江が器量としっかり者の気質をのぞまれて福助から紅梅屋の若主人梅之助にとついだのは、あの夜のことがあった翌々年の夏だった。

福助は日本橋通旅籠町にある一級の旅籠であり、紅梅屋は浅草三間町にある三流の旅人宿である。格差のうえで両者のあいだには雲泥の差があるが、奉公人の女中から三流とはいえ宿屋の内儀にむかえられたのであるから、世間がうらやむくらいの出世である。よし江自身にしてもかんがえてみたこともなかった幸運だった。福助の主人夫婦善助とおそでも大層よろこんでくれて、一通りの嫁入り仕度は代々木村にある実家の両親ではなく、福助でととのえてくれた。朋輩や男の奉公人たちからもさんざんうらやましがられた嫁入りだったが、よし江はそれほど大喜びをしていたわけではなかった。相手からのぞまれたこ

とと、実家でも奉公先からもしきりにすすめられたので、重荷と感じながらとついでいったのだ。

福助を去るに際して、ただ一つだけ気にしていることがあった。できればたしかめておきたいことがあったのである。二年前の夏の夜の出来事だ。

あの夜の男が伊太郎であったかどうか、まだ確認はしていなかったのだ。よし江はてっきり伊太郎だとおもっていたのだが、彼からはそんなことがあったらしい節は感じられなかった。翌日も翌々日も顔を合わせたが、伊太郎はそれらしい素振りをすこしも見せなかった。

伊太郎のそんな様子をはじめは照れかくしかとおもったが、その後も彼はよし江にたいしてなんの変化も見せなかった。今までとまったくかわりがないのである。

よし江もようやくおかしいとおもいはじめた。自分がとんでもない勘ちがいをしているのではないかという気になった。伊太郎だとおもってまじわった男は彼ではなかったのかもしれなかった。

伊太郎だという確証はどこにもないのだ。ただよし江がそうおもっただけである。相手が名のったわけでもなかった。暗闇の中でまじわりをおえてから、男はなにもいわずに風のように去っていった。

よし江は自分の迂闊さを悔いた。そして日がたつにしたがい、自分の花の蕾をぬすみとっていったのは伊太郎ではなかったのではないかとかんがえるようになった。もし伊太郎

だったなら、その後も女中部屋にしのんでくるはずだとおもった。あのときのあの男はあの夜だけで、その後は絶えてしのびこんでこなかった。

もう一度きたならばたしかめられるのにと、内心ひそかに期待したが、そのおもいもむなしかった。たった一度蕾をむしったきりで、その後見むきもしない男がこころ憎かった。

よし江を見る伊太郎のその目にはその後も変化がまったくなかった。

伊太郎はよし江よりも三つ年上だが、御多分にもれぬ旅籠の道楽息子である。店に日銭が入るのをいいことに、帳場から金をくすねては道楽につぎこんでいた。体つきは細身で、顔もいや味がなくてすっきりとしており、気っぷもいいことから、女にもてていた。性格はわりあい素直なのだが、なんといってもわがままが欠点だった。跡取り息子としてなに不自由なくそだてられたのが仇になったようだ。

そんな伊太郎だから、なにも自分のところに手をださなくとも、女には不自由するはずがなかった。よし江もそうはかんがえてみたが、それでもあの夜自分の体にのしかかってきた男は伊太郎のような気がしてならなかった。暗闇で顔や姿は見えなかったが、耳もとでささやいた声は伊太郎の声にそっくりだった。

伊太郎ならば、暗闇の中でも旅籠の中は手にとるようにわかるはずだ。女中部屋に侵入することも容易である。

（もし伊太郎でなければ、あの夜の男は誰……？）

これこそ見当のつけられぬことだ。福助の主人善助がそのようなことをするはずがない。

男の奉公人がかねてからねらいをつけていて、あの夜実行したか。それとも泊り客の何者かが大胆不敵な夜這いをくわだてたのか。いろいろかんがえてみたが、状況からして、実行することはむつかしい。

よし江としては、どうしても伊太郎のような気がしてならなかった。

（一度、たしかめなくては……）

そうおもいながら、ききそびれて二年がたってしまった。とうとうきけないままに紅梅屋へとついだのだった。

とついでからも、よし江は梅之助とともに年に二度は福助へでかけて善助とおそでに挨拶をするのがつねだった。

梅之助はよし江より十歳も年上で、見栄のしない男だが、ともかく商売熱心で、骨身惜しまずはたらく男だった。どうすれば一人でも多くの客が紅梅屋にきてくれるかということばかりかんがえていた。そしてよし江をとても大切にしてくれた。

よし江も熱心に一日中はたらきまわった。ちいさな宿屋であるから、すこしは奉公人がいても、主人と女将が先頭にたってほとんどのことをやらなければならなかった。接客から帳場はもちろんのこと、料理の仕こみ、洗濯にもいちいち気をくばらなければやっていけない。

よし江の評判は上々で、彼女がとついできたころから、紅梅屋の商売がぐっと上むきになりだした。

「おまえがきてくれたおかげだよ。おまえのせいで紅梅屋が繁昌しはじめた」

これが梅之助の口癖だった。

「いいえ、旦那さまが一生懸命にはたらくからですよ」

というと、

「いや、おまえが嫁にきてくれたから、おれは一生懸命はたらくようになったんだ」

といつも花をもたせてくれた。

いそがしいが、しあわせな日々がつづいた。よし江にとってとても幸運な結婚であった。子宝にめぐまれないことだけが、唯一の不足だった。

いいことずくめの毎日がつづくなかで、ある夏、とつぜん不幸がおこった。

雨が何日も降りつづき、六日めに、雨をともなった嵐になった。大川は増水して、流れも急になった。

竹町の渡し船が転覆したとよし江がきいたのは午後の七つ半（五時）ごろだった。渡しは浅草材木町の大川橋の橋詰から本所中之郷竹町をむすぶ乗合で、古くは業平の渡しと呼ばれていた。大きな横波をくって船が転覆し、客十数人と船頭が川中に投げだされ、救助にあたっているが、半数ちかくはまだ行方がわからぬというのだ。

きいた一瞬、なんとなく不吉なおもいにとらわれた。その朝、梅之助は商用で本所へでかけていったのである。ふだん梅之助は渡しをつかわないのだが、ひょっとしたらという不安がかすめた。

梅之助はその夜とうとうもどってこなかった。そして翌朝、大川の下流三俣で土左衛門になって浮かんだ。

三

盆提灯の明りが夕闇の中ににじんでいる。盂蘭盆会とともに夏が行こうとしている。季節のうつりかわりには、いつでも、そこはかとない哀感がある。ましてよし江にとって夏はうらがなしい季節である。

今年は梅之助の七回めの盆である。竹町の乗合の水没者の川施餓鬼も今年で七回めだ。毎年盂蘭盆会には材木町の渡し場に二間四方もある精霊棚をつくり、四方に竹をたて、菰、筵をしき、菰縄を張りめぐらして、あの夏水死した者たちの位牌をならべ、縁者や近隣の者、知人たちが寄りあつまり、僧侶をまねいて供養をしている。今夕は送り火を焚き、みなで供養おさめをして、もどってきたところだった。

よし江は紅梅屋の女将というばかりでなく、女主人でもある。ところがよし江が女主人になってからというもの、以前にもまして紅梅屋は繁昌しだした。

水難で夫をうしなったという同情と、別嬪の若後家という興味が客のほうにあったこともたしかだ。そのうえよし江が必死ではたらいたために、部屋は毎日満員の盛況だった。蓄えもできて、昨年の春、となりの旅籠を買いとって、紅梅屋をとりこわし、真あたらしく立派な旅籠に建て替えた。そして今では、番頭の下に男女あわせて十人をこす使用人が

はたらいていた。浅草かいわいで屈指の旅籠になったのだ。

紅梅屋の隆盛にくらべて、福助には不運がつづいていた。よし江がとついでから五年めに善助が卒中でたおれ、死はまぬがれたもののほとんど寝たきりの病人になってしまった。それいらい古くから福助をささえていた料理人と番頭がつぎつぎにやめ、商売がすっかりかたむいていった。

伊太郎は先頭にたって商売をたてなおさなければならない立場もかえりみずに、相かわらず店の金を持ちだしては、博打と酒、女の道楽をつづけ、店の没落をいっそう早いものにしていった。よし江は福助に挨拶にいくたびに、おそでや昔なじみの使用人たちから愚痴をきかされ、胸をいためていたのであった。

その宵、よし江は居間につくった精霊棚をとりはらって、軒につるした提灯の明りをぼんやりながめ、美人画刷りの団扇をつかいながら一時くつろいでいた。盆提灯だけは七月いっぱいつるしておくのが習慣である。このごろでは使用人もふえたので、以前のようになにからなにまで自分でやらなくてもよいようになっていた。

宵がふかまったころ、盆提灯の明りの中をすっと影がかすめた。その影は木戸からきて庭のほうへ横切ったような気がした。

旅籠の客が涼みがてら庭へでていったのだろうと気にもしないでいたところ、しばらくたってから人々のさわぎたつ気配がそう遠くないところでおこった。男たちのわめく声と何人かが地を駆ける物音がなにやら物騒にきこえた。

よし江はいやな気がして、帳場へでていった。

「何事だろうね」

帳場では番頭の定之助が仕切りの帳付けをおこなっていた。

「さわぎがおこっているようですね。喧嘩か捕物じゃないでしょうか」

定之助は筆をおいていった。

このあたりは江戸のはずれの町中で、奥州街道に沿うところだから、こういうさわぎはときたまおこるのである。

「いやだねえ。大層なさわぎにならなきゃいいけれど」

旅籠という家業柄、物騒な事件には年に一度や二度巻きこまれることがある。

「まあ、今の様子では大したことじゃないでしょう」

定之助に気やすすめをいわれて、よし江は居間にひきかえしていった。

廊下をあるいているとき、今度ははっきり人影とわかるものが庭先の植込の陰に入りこむのが見えた。

よし江は立ちどまってそのほうを見た。盆提灯の明りが植込を照らしている。

男の姿が、かすかな明りの中に浮かんで見えた。男はじっと身をかくしている。

男の顔がわずかに見えたとき、よし江はその場に足が釘づけになった。その顔に見おぼえがあった。

よし江の胸は動悸にふるえた。

（若旦那！）

　おもわずそう呼びかけようとしておもいとどまった。丁度そのとき、店頭に何人かの駆け寄ってくる物音をきいたからだ。

「あぶないですから、そこにじっとしててください。うごいちゃいけませんよ」

　植込にむかって小声でいってから、帳場のほうへもどっていった。

　店内に四、五人の男たちが入りこんでいた。いずれも一目で目明しとその手下の小者とわかる者たちだ。

　よし江はさすがに膝頭ががくがくとふるえだすのをおぼえた。

「今しがた、この店に男が逃げこんでこなかったか。三十半ばの素人ふうの男だが、賭場あらしの常習だ」

　赤ら顔の目明しが帳場の奥をのぞくようにしていった。

「いいえ、さきほどから店には誰一人出入りした者はおりません」

　よし江は足がふるえているのをかくして、平然たる顔つきでいった。

「たしかに紅梅屋あたりに逃げこんだと見えたのだが、客にまぎれてやしないかね」

　目明しは不審の目でよし江を見つめた。

「番頭がずっとここにすわっておりますし、わたしも、今しがたまでここにいましたから、変な者が入ってきましたらすぐわかるはずです」

　よし江は目明しのいやな目をはねかえしていった。博打は御法度だし、まして賭場あらしには重罰が科せられている。だがいったん覚悟をきめると、足のふるえがとまり、気持もおちついてきた。

「女将がこうはっきりいうんだから、家さがしまですることはねえだろう」

　目明しは小者たちにいった。

「これからでも、おかしな者がまよいこんできましたら、きっとお上へ申しあげにまいります」

　よし江はかさねていった。

「女将、それじゃあたのんだよ」

　そういって目明しは小者たちをうながしてでていった。

　それからよし江は居間のほうへとってかえした。

（いるか、いないか……）

　伊太郎のことが心配だった。迷惑がかかるのをおそれて、いちはやく姿を消しているのではないかと案じた。

四

「女将さん、ご迷惑をおかけして、相すいません」

　伊太郎は何度も遠慮をしたあげく、よし江にしいてまねかれて、庭さきから廊下にあがり、さらに居間に入ってきた。

「若旦那、そんな他人行儀はおよしになってくださいませ。ここはわたしの家ですから、若旦那をあぶない目にあわせるようなことはありません。それに今でていったら、つかまるのは目に見えていますよ」

よし江は気持がたかぶっていた。伊太郎を居間に入れて、障子戸をぴたりとしめた。

「とんだところにとびこんじまって、女将さんに大変な迷惑を」

伊太郎は迷惑ばかりを口にしていた。

「わたしのほうこそ若いころさんざ福助でお世話になったのですから。今のわたしがあるのは、すべて福助のお蔭でございます。わたしのことなんぞ気になさらないでくださいませ」

よし江は本心からそういった。なんとしても伊太郎を危急からたすけだしてやろうという気持だった。

「面目なくて、会わせる顔もねえ……」

といいながらも伊太郎は居間にすわると、にこっと照れた笑いを見せた。

姿かたちはかわり、すっかり落ちぶれはてていたが、その顔には十数年まえの面影がありありとのこっていた。年も相当にとってはいるが、そのぶん男くささが増していた。

よし江は胸がじいんとしめつけられるようになって、おもわず涙がこみあげた。

「危険がなくなるまで若旦那のお体はわたしがおあずかりいたします。ご心配はなさらないでください」

「といっても、おれはお上のおたずね者だよ。いつまでもかくまえば、おまえにまで罪がおよぶ。しばらくしたら退散しよう」

「ここは旅籠ですから、人をお泊めするのに難儀はいたしません。二日でも三日でも、いや一ヶ月だって若旦那はここにいらしていいんですよ」

「よし江にたすけてもらうとはおもわなかった。でもありがとう。恩にきるよ」

伊太郎は素直に礼をいった。

生まれ育ちもいいこんな男が賭場あらしなんぞというおそろしい無法を常習にしているのが信じられなかった。死んだ善助がこんな伊太郎の姿を見たらどれほどかなしむことだろうとおもった。

善助はいったん死をまのがれたものの、たおれてから三年めにふたたび卒中におそわれ、二度めにはあっけなく他界してしまった。それいらいおそでのほうもすっかり気がよわくなり、病がちのくらしをつづけていたが、福助の疲弊が目に見えてひどくなったころから、神田佐久間町にある伊太郎の妹のとつぎ先へひきとられていった。そして福助は一昨年人手にわたった。

「福助には不幸なことがたびたびおこってしまったものです。若旦那がもっとしっかりしてくださってたら……」

伊太郎の姿を見ているうちに、口惜しくなって、つい愚痴がこぼれた。

「本当に面目のねえ話だ。おれにすこしでも甲斐性とまっとうなこころがあったなら、福

助だって、あんなみっともねえことにはならなかったんだが」

伊太郎は申しわけなさそうにいった。

「今からだって若旦那さえその気になったら、もう一度福助の暖簾をだすことだって無理じゃありません。わたしも少々はお手つだいができますのに」

福助に奉公していたころのことがおもいだされて、よし江は感慨にせまられた。

「女将さん、かりにもおれはおたずね者だよ。そんな夢のようなことはかなえられっこないんだ。よしんば江戸を逃げて、数年他国でほとぼりをさましたにしたって、一度こころと体のなまった者が地道な堅気の商売なんてできるわけはねえさ」

伊太郎は自嘲をこめていった。

「そんなことはありません。本人にさえ立ちなおる気があったら大丈夫です」

よし江は今はかつてのよし江ではない。浅草で繁昌している紅梅屋の堂々たる女主人である。その自信があるだけに、昔の若旦那にたいしてもいうべきことはきちんと口にすることができた。

「世の中そんなにあまいもんじゃない。一度世間から足をふみはずした者が容易に元へもどれる道理はないんだ」

「その気になればなれますったら。そのかわり、きびしくこころと体をきたえなおさなければなりません」

よし江はつい伊太郎の母か姉のような気になっていた。自分がそばについてきびしくき

たえてやれば、伊太郎は十分立ちなおれるような気がしたのだ。

「女将さんの気持はありがたいが、おれを立ちなおらせるのは大変なことだ。それよりもその前に、おれはつかまってお縄をうけるかもしれねえ」

「若旦那はきっとわたしがまもりとおします。安心なさってください」

よし江はあくまでもいいはって、伊太郎の安全をはかってやろうと決心した。罪がおよぶのも覚悟のうえだった。

五

よし江は暁のころ、目ざめた。といっても四更（午前一時すぎ）をすぎるころまで頭が冴えてねむれず、ほんの半刻（一時間）ばかりまどろんだだけだった。

準備はすでに昨夜のうちにととのえてあった。今朝は伊太郎が紅梅屋をでていく日である。

伊太郎は昨日まで三日間、紅梅屋の一室にかくまわれていた。よし江はほとぼりがさめるまでもっとひそんでいるようにすすめたが、伊太郎はもうこれ以上迷惑をかけるわけにはいかないと昨夕いいだしたのだ。よし江もそれを無理にとめることはできなかった。

よし江は手ばやく着替えて、廊下へでて、雨戸をほそくあけ、外の気配をうかがった。暁闇の中に濃い霧がでていた。逃亡に霧はかえって好都合だとおもった。

伊太郎は常陸水戸にいる知り合いをたよって、しばらくそこに身をおちつけるといって

いた。そこは伊太郎が今付き合っている女の実家で、女もそこで伊太郎がくるのを待っているのだと、昨夕うちあけた。それから先のことはむこうにおちついてからかんがえるつもりだといった。

待っている女がいるときいた一瞬、よし江の胸に大きな穴があき、そこを風がとおりぬけていった。

「そうなさるのがいいでしょう」

とこたえてよし江は旅の仕度をととのえてやったのだ。昔の伊太郎をかんがえるならば、一人や二人の女がいて当然だった。落ちぶれているとはいえ、女がいないとおもうほうがまちがいなのだ。よし江は顔色にあらわさぬようにするだけが精いっぱいだった。

物音がして、伊太郎が居間にやってきた。

「女将(おかみ)さん、大層世話になったもんだ。このご恩はきっとわすれないよ」

彼らしくなく、生真面目に伊太郎はいった。

「若旦那、気をつけていってください。あぶなくなったら、いつでもここにもどってきてください。わたしは待っていますから」

そこまでいうと、よし江は涙があふれかけ、感情に負けそうになった。

そして勝手口へ伊太郎をみちびいた。

戸をあけると、外は払暁(ふつぎょう)だ。しらじらと明けそめ、大気の中を霧がゆっくりとながれている。

霧の中へ二人はでていった。伊太郎は外へでるのは四日ぶりのことである。

よし江は外の様子をうかがった。見張りの者の姿はなかった。この時刻では、早おきの者でもまだおきてはいないのだ。

奥州街道のほうへむかってあるいていった。水戸街道にでるには亀有村から新宿へでるのが近道である。

よし江は大川橋の袂(たもと)までおくっていくつもりだった。

あるきながらよし江は伊太郎が最後にきりだしてくれるのを待った。自分のほうからはとてもたずねる勇気がなかった。もうかぞえてみると十四年も前の夏の夜の出来事だ。それだけの年数がたったにもかかわらず、まだよし江の胸にはこだわりがのこっていた。

うらんでいるわけではなかった。たった一度きりのまじわりだけでその後相手にされなかったことをかなしんでいるのでもない。今となっては、いい想い出にさえなっているのだ。一言うちあけてほしいのである。でなければ、自分の一生は不確かなままでおわってしまう。

伊太郎は無言でよし江の前をあるいている。

よし江は伊太郎の背中を見ながらあるきつづけた。

(本当に、伊太郎ではなかったんだろうか)

またしてもそんな迷いがこころのうちに浮かんだ。

霧の中に、かすかに大川橋の欄干(らんかん)が見えてきた。

そのときくるっと伊太郎がふりかえった。
「女将さん、ありがとう。ここでわかれよう。いつか、きっとお礼にくるよ」
そういってわらった伊太郎の顔は十四年前のままに見えた。
「伊太郎さん、達者でね」
こたえると、もう伊太郎は先をあるきだしていた。
よし江は伊太郎の後姿が大川橋の霧の中に消えるまで見おくった。

世話情浮名別離（よわなさけうきなのわかれ）

一

道がややぬかっている。雨あがりの道だ。ところどころに水溜りがある。

なおえは水溜りをよけながらあるいていった。

ここは深川黒江町の中通りである。

前方から男がきたとき、なおえの眸がその男の顔に吸いよせられた。

（いい男……）

ほっそりとしたやさ形で、目鼻だちがとりわけくっきりとしている。水溜りをよけてあるく身のこなしが、なんともさわやかである。すぼめた蛇の目を無造作に片手にさげている。

こういうのを粋な男っていうんだろう、としばし見とれた。

なおえは好き者ではないが、いい男を見ればこころがときめく。抱かれたい、とおもうことだってときにはある。

（あんな男だったら……）

今がそうである。両方の乳房の下がずきんとうずいた。

エッ、ホー　エッ、ホー

そのとき後方から威勢のいい掛け声がきこえてきた。

黒江町から先へいったところに、辰巳岡場所とよばれる深川遊里がある。駕籠で遊里へいくのが粋とされていた。

（なんだい、まだ明るいうちから）

なおえはこころのうちで毒づいた。

掛け声はたちまちちかづいてきた。

前から男もちかづいた。

駕籠をよけようとして、なおえは足もとがくるい、体勢をくずした。

「おっと、ねえさん」

男はとっさに足をはこんで、よろめいた彼女をささえてくれた。

なおえの体がそのとき男にかかえこまれたようになった。一瞬、目のくらむようなものをおぼえた。

「大丈夫かい、ねえさん」

言葉をかけられたとき、おもわず男からはなれていた。声も澄んでいて、歯切れがいい。

「申しわけありません」

そういったとき、駕籠が勢よく二人の前を駆けぬけていった。

無遠慮に水溜りを蹴っていったために、男の着物に泥水がはねあがった。

「あっ」

男となおえは同時に声をあげたが、駕籠かきはそんなことで止まって詫びをいうような

手合いではなかった。

「ちぃっ」

男は舌打ちをしてにらんだが、駕籠は傍若無人に黒江橋のほうへむかって駆けぬけていってしまった。

なおえは呆然（ぼうぜん）と立ちつくした。男の白っぽい単衣（ひとえ）はしたたかハネをあびていた。どうしていいか、とっさには言葉がでなかった。

「無作法なやつだ」

男は腹をたてている。

「すいません、わたしのせいで」

怒気をまじえた男の顔はきりっとしまっていて、なおえにはいっそう好もしかった。

「いや、ねえさんのせいじゃない。気にしないでくれ」

といってそのまま立ち去りかけた。

「もし、あの……」

「いいんだ」

「でも」

男にこのまま去られてはこまるとおもってひきとめた。

「あらえば、かわくだろう」

「わたしの家はすぐそこです。ちょっと寄ってってくださいまし」

いいながら顔があからんだ。男は三十手前の年ごろだ。なおえが好きな男の年ごろでもある。

男の顔が一瞬、ためらいを見せた。

「さ、どうぞ」

ここでひるんではひっこみがつかぬとおもって、さっさとあるきだした。

なおえはこの先の表通りで、小女（こおんな）を一人つかってちいさな糸屋をやっている。

「そんな心配はいらないんだが」

男はそういいながらもついてきた。

なおえはなんとなくこころが浮きたってきた。

（なにをする男なんだろう）

目いっぱい垢（あか）ぬけていて、嫌みがない。素直なところもあるようだ。男についての興味がわいた。

ごくわずかな期間だが、なおえは所帯を持ったことがある。ほかにも多少男を知っている。男についての目はこえているつもりである。

店から部屋の中へ男をあげた。はじめての家にあがっても、男はおちついていた。

「脱いでくださいまし。すぐすみますから」

遠慮なくいうと、男はだまってなおえにしたがった。

着物をぬいで男は襦袢（じゅばん）と裾除（すそよ）けだけの姿になった。見かけによらず、筋肉がついている。

さむい季節ではないので、かわりの着物をだしてやる必要もない。なおえは男をそのままの姿にしておきたかった。

手拭いで泥水をぬぐい、汚れのおちないところは飯粒を練ってそくいをつくり、そこにぬりこんでいった。「すまないな。家へもどれば、やってもらえるんだが」

男はなおえの手さばきに見入っていた。

「内儀(おかみ)さんがいらっしゃるんですか」

「いや」

「それじゃあ、まだお独身(ひとり)で」

「うむ」

「ずいぶんおもてになるでしょう」

蓮っ葉(はすっぱ)な問いだが、それをゆるしてくれるような雰囲気が男にはあった。

「それほどじゃないよ」

男はもてることには慣れきっているようだ。

「女がほおっておくはずはありませんよ」

「そうかなあ」

男はなにがおかしいのか笑いだした。

つられてなおえもわらった。商売をしているので、なおえも気さくだが、こんなに人なつこい気分になったのもひさびさのことだ。さいぜん、中通りでよろめいて男にかかえら

れたときのいい感じをおもいだした。

「お住居(すまい)は」

「木場(きば)さ。おれは、木場の新之助(しんのすけ)って呼ばれてる」

聞かないのに、男が名のった。

「木場の新之助さん……、いい名ですね。わたし、なおえっていいます」

その名前はこの男にふさわしいとおもった。

「ねえさんは亭主持ちかい、それとも独身(ひとり)？」

「人なみに一度は所帯を持ちましたよ。たった半年でしたけどね」

「半年？」

ときいて男はまた愉快そうにわらった。

「わたしも相手の男もおたがいにわがままでしたからね。そのうえ男は浮気者でした」

なおえはぬりこんだそくいを濡(ぬ)れ手拭いでとっていった。泥水のはねはそれでほとんどきれいにぬぐいおとされていた。

「でも、女一人で立派に店をやってるんだからたいしたものだ」

新之助は本気でいっている様子である。

「たいした店じゃありませんよ。女一人生きていくだけでやっとです」

「それがたいしたことじゃあないか」

彼も長年の知り合いのような言葉で応じた。

そしてなおえからわたされた着物を着ていった。

「ねえさん、どうもありがとう」

「一本おつけしましょうか」

このままわかれてしまえば赤の他人にもどってしまう。もう会うことはないだろう。それがこころのこりだった。

「酒の仕度ができるのかい」

「わたし一人で飲むことがありますもの」

「そりゃあ上出来だな。じゃあ、一本いただこうか」

新之助はなおえの調子に合わせてきた。

そこで手ばやく酒の仕度をし、簡単な肴もみつくろってはこんだ。

「わたしも少々お相伴させていただきます」

いいつつまず新之助の酌をしてやり、二人は気の合った男女の気分で飲みだした。

二

「ご馳走になった礼をいいに、きっとくる」

といって新之助はかえっていったが、その後はなしのツブテだった。

なおえもそう期待していたわけではなかった。ゆきずりのひょんなことがきっかけで、たった一度酒をくみ合っただけの男女である。しかも自分のほうから呼び入れたのだ。

本当に礼をいいにくれば上等だが、こなかったからといってうらむべきほどの筋ではない。そうとわかっていながら、

(嘘つき)

なおえは胸のうちで新之助をののしった。

それだけあの男の印象がつよくこころにきざみこまれていたのである。蛇の目を下げて立った新之助の、はじめて見たときの姿が脳裡から消えなかった。

なおえは今が女ざかりの二十三歳である。肌ざみしさをおぼえたときは、きっと新之助の顔がおもいだされた。

深川でうまれて、そだった。

十七歳で、気っ風が売り物の火消しの小頭にとついだ。けれども夫が縁組みした当初から家をあけて女あそびにうつつをぬかしているのに我慢がならず、半年めに勝手に実家にもどってしまった。

女房のほうから離縁の申したてはできないが、夫からすぐに三行半がおくられてきた。

なおえはその年の暮、深川門前仲町から〈直次〉の名で芸者にでた。実家の両親は反対したが、子供のころから意地と粋を売る辰巳芸者にあこがれていたのである。

四年ばかりのあいだ、なおえは土地でも有数の売れっ妓をつづけたが、母親の死を機会にして、惜しまれながら芸者の足をあらった。芸者をやめてほしいという、いまわの際の母の遺言にしたがったのだ。

黒江町に糸屋をだすにあたって、本所の顔役本郷院の源右衛門が資金の面倒をみてくれた。
なおえは芸者時代、源右衛門に口説かれて、何度か寝たことがある。源右衛門は年は四十代だが、なかなかにがみばしった男前なのである。
源右衛門はなおえを手活けの花にしたかったようだが、そこははっきりとことわった。しかし、今でもときたま源右衛門との体のかかわりがつづいている。なおえとしてはもう切れたかったが、借金をかえせないので、そうつよいことはいえなかった。
それになおえも生身の女ざかりだ。しつこくもとめられると、時によってはどうしてもいやとはいいえずくずれてしまう。源右衛門はたくみにまた狡猾にそこのところをついてくる。
新之助と出会ってからというもの、
（源右衛門ときっぱり手を切りたい）
なおえのこころはしだいにかたまっていった。
季節は初夏の五月初旬である。ちいさな庭では杜若花が小糠のような雨にぬれている。それがなんともいいえずなまめいた風情であった。
（あの男、わすれちまったのかしら……）
なおえはまだ新之助をわすれかね、ときたまおもいだしていた。
（木場の新之助だなんて、きざな名をいいのこして）

少々腹をたてながらも、日暮れになると妙になつかしさをおぼえ、悩ましい気分になったりするから不思議だった。そんな日には店をはやじまいして、小女をかえし、一人で酒を飲んだりするのだ。
その夜も、半刻ばかりのあいだ手酌でやっていた。
ところがこの日にかぎって、飲むほどに気がはれるどころか、悩ましさがつのってきた。こんなことが月のうちに一、二度はきっとある。
往生して、銚子をおいた。そしてその場に身をよこたえた。
手はしぜんに腰のほうにおりて、着物の下へくぐっていった。湯文字の下の肌がほてっている。
手は内腿へすべって、股間へのびた。そのあたりはじっとりとぬくもっている。
指先が足の付け根をはって、股間のやわらかな中央部をとらえた。すでにしめり気を十分ふくんでいた。
ふれただけでなおえはぴくんとなった。体が敏感になっている。そろそろと指先をうごかした。
快感がずずず……と上体へはいあがってきた。
（新さん……）
胸中でつぶやいて、男の顔を瞼の裏に浮かべた。指は裂け目から体の中へするりと入っていった。

あらたなる快感の波がよせてきた。なおえはそれに身をまかせた。年中こんなことをしているわけではないので、快楽の味は新鮮である。

瞼の裏では新之助がおしかぶさってきて、なおえを一気につらぬいた。

目をとじ、口を半びらきにした唇のあいだから、かすかに吐息がもれはじめた。

「ああ……」

吐息にまじってあえぐような声がでた。

呼吸に合わせて指先は微妙にうごいた。そのうごきは瞼の裏の新之助の動作とおなじものである。

（……）

恍惚（こうこつ）の状態がつづいた。その中で、物音をきいた。

戸口をたたく音である。

なおえの手のうごきがとまった。が、まだ吐息はつづいている。

そしてしだいに恍惚がさめてきた。

（おまきかしら）

小女がわすれ物かなにかを取りにもどってきたのではないかとおもった。しかしそれにしては時間がたちすぎている。それに戸口のたたき方が女らしくなかった。

なおえはいやな感じをおぼえた。体をおこし、身づくろいをした。

立っていき、戸口をあけた。

予想したとおりの男が立っていた。

「旦那さん……」

本郷院の源右衛門である。

「なおえ、どうしたんだ」

源右衛門はなおえの様子をうかがった。彼には女がどういう状態にあったかわかるのだろう。

「気分でもわるいのか」

「ちょっと気が滅入っていたものですから、お酒を少々いただいていたところです」

源右衛門にはかえってもらいたいが、適当な理由がすぐにでてこなかった。

「いい女が宵の口に一人酒とはいただけない。おれが付き合おう」

いいながら源右衛門はあがってきた。

なおえはことわれぬ理由があった。これまでも大体、月に一度は源右衛門に抱かれている。双方で約束をかわしたわけではなかったが、そういう習慣がこの二年ばかりつづいていた。

妾（めかけ）になることはことわったが、借金のかわりに仕方なくそんなことで妥協していたのである。

「今日は体がすぐれないので……」

今夜は源右衛門に抱かれたくなかったのでそういったが、相手はきこえぬふりをして長

火鉢の前にすわりこんだ。
「いっぱい、いこう」
源右衛門につがれて、今度はなおえが酌をした。これでもう男はなおえの前にすっかりおさまってしまった。
なおえは何度か銚子をとりかえに台所へ立った。
源右衛門は抱いてかえるつもりらしい。口にはしなくても、男の様子でわかるものだ。
「旦那さん、おねがいが……」
なおえは前からいおうとしていたことをきりだした。
「なんだい、ことあらためて」
源右衛門はなんとなく察したようだ。
「旦那さんにはこれまでいろいろお世話になりましたから、申しあげにくうございますが、お付き合いはこれまでにしたほうがおたがいのためではないかと……」
なおえらしくない遠まわしな言葉で口にした。
「おれを縁切りにしようってのかい」
源右衛門はおだやかにいったが、その目はかすかに怒りをふくんでいる。
「そんないい方はよしてください」
「どんないい方をしようと、おまえのいいたいことはおなじだろう」
というや、男の手がいきなりのびてきた。そしてなおえの手首をつかんだ。その手に力

がこもっている。
「旦那さん、およしになって」
といったが、体が前にくずれた。源右衛門が想像以上の力でひっぱったのだ。ひきよせられて、なおえは男の膝の上におちた。
「おまえのかんがえているとおりにはいかないぜ。おれはおまえとわかれる気はないんだ」
いうなり源右衛門はなおえをあおむけにたおした。こんな乱暴な振舞にでたのははじめてだった。
源右衛門が本所の顔役であることを、はじめて意識させられた。おきあがろうとしたが、男は強引におしかぶさってきた。
裾がめくれて、足がひらいていった。いったんひらいた足はとじようがなかった。しっかりと男の腰が入りこんでいた。
湯文字は腹の上に押しあげられた。
すでに十分すぎるほど濡れていたので、なおえは簡単に男の侵入をゆるしてしまった。

三

翌朝、勝手口におとずれる気配がした。
なおえは御用聞きだとおもった。おまきはまだやってきていない。

勝手口へでていった。

戸をあけると朝日のまぶしい光の中に、新之助が立っていた。

「まあっ、新さん」

なおえは声がつまった。

新之助は桶をさげており、その中には背をぴんと反りかえらせた大きな海老が生きたまま入っていた。

「すぐに礼にくるつもりが、よんどころない仕事のつづきでとうとう一ヶ月もおくれちまった」

そういって新之助は人なつこい笑いを浮かべた。

「もうこないとおもってたのに、よくきてくれましたねえ」

なおえは嬉しさがこみあげてきた。

そして取るものもとりあえず、新之助を部屋にあげた。

「お礼にくるなんていったって、その場かぎりのお世辞かとおもってましたよ。当世は口先ばかりの人がおおいから」

「ねえさんのことはずっと気になってたよ。一日のばしがこんなにおくれちまってすいませんでした」

新之助は案外折目ただしい男のようだ。

「お礼を待ってたんじゃないんですよ。新さんにもう一度会いたいとおもってたから」

「そうですか、そいつはうれしいな。こいつを食べてください」

新之助は桶ごとさしだした。

「ずいぶん生きのいい海老ですね」

「家には魚屋からたくさんくるんだ」

「新さんの家、なにをしてるんですか」

「なにって、いうほどのことじゃあないが」

新之助は家業についてははぐらかしてこたえなかった。

人にはいろいろと事情があることとおもって、強いてはたずねなかった。

新之助は身なりも持ち物も、どれといって粗末なものはなにもなかった。みな吟味しぬかれた一級品ばかりだ。

「新さん、おねがいがあるの」

なおえはおもいきって口にした。

「どんな」

「もしよかったら、これからときどきここに顔をだしてくれませんか」

言葉こそあっさりしているものの、これはいうならば女のほうからの求愛である。

「ねえさんがそういってくれるとはありがたい。おれも寄らせてほしかったんだ」

おもいのほかの言葉だった。

「どうして」

「好きだからさ」
「まあ、人をからかったりして」
「からかいに人の家へなぞくるもんか」
「まあ……」
と、なおえは赤くなった。
「水溜りの道ではじめて会ったとき、見とれてたんだ。泥水をよけそこなったのも、ねえさんに見とれてたからだよ」
「お上手な、でも、わたしもあのとき新さんに見とれてたんです。そうでなければあんなドジは踏まない」
「じゃあ、初っからの相思相愛じゃないか。幸先は上々吉だ」
二人は声をあげてわらった。
わらいながら、新さんをどうしてもわたしの〈いい男〉にしてやろう、となおえはおもった。こんな好もしい男は滅多といるものじゃない。そうすれば源右衛門ともわかれられるとかんがえたのだ。
「新さん、今度一緒に芝居を見にいきましょう。ちかごろお芝居はとんとご無沙汰してるんです」
といったとき、新之助の顔を一瞬動揺の色がかすめた。
「芝居か……」
新之助は歯切れわるく口ごもった。なにか事情がありそうな感じだった。

「嫌いですか」
「じゃないが……」
「だったらお寺参りか、蛍狩りにでも」
なおえは娘のような気分になって男にねだった。
「芝居だってかまわないんだ。だが、すこし待ってくれないか」
「いそぎはしません。いつかいけたらいいなとおもっただけです。わたし新さんとときどき会えるだけで幸福です」
言葉とともに切ないおもいがこみあげてきた。
今この男に抱かれたいという情熱がにわかに体のうちからおこった。昨夜、源右衛門にいいようにもてあそばれ、情欲をほりおこされたものが今にのこっているのかもしれなかった。
「ねえさん、おれもだ」
新之助の声もやや高くうわずった。
「新さん、わたしを情婦にして頂戴」
なおえは情熱と欲望をおさえかねて、おもいきり蓮っ葉にいった。
そして自分から体を投げだした。たった二度しか会ってない男にたいしてはしたないとおもったが、自分のこころに嘘はつけなかった。
新之助はなおえを抱きとめた。

「わたしをいいようにして」
あえぐようにして夢中でいった。男がそれにこたえてくれるだろうという自信はかろうじてあった。
二人はしばらくじっと抱き合っていた。それだけでなおえは陶然となった。
いつしか体を横たえられていた。
「抱いて、新さん」
うながされて、新之助は自分の着物をぬぎすて、おおいかぶさってきた。
昨夜、不本意な情事をしいられただけに、いっそう今新之助がほしかった。おもいきり抱かれ、彼のものにされたかった。
ねがったとおり新之助は振舞ってきた。
なおえは歓喜のおもいでしたがっていた。
激情のときが去って、しずかな時間がもどってきた。なおえはみちたりた気持で身を横たえていた。
いつまでもこうしたままでいたかった。
新之助は立ちあがって、身づくろいをはじめた。ぬぎ捨てた着物を身にまとっている。
そのとき背中の一つ紋が目に入った。紋としてはきわめてめずらしい飾り海老の柄だ。
隠し紋、飾り紋というやつである。
しばらくかんがえて、なおえは息がとまりそうになった。

「新さんっ、あなたは……」
途中で絶句した。飾り海老といえば、江戸っ子の一枚看板、歌舞伎の総本家市川宗家を意味する。
「気づいたか」
新之助はなおえの顔色からそう察した。
「市川、団十郎……」
なおえの声がふるえた。一瞬、気が遠くなりかけた。
「新之助はおれの幼名さ」
新之助はしずかにいった。市川宗家の嫡男は新之助、海老蔵、団十郎と襲名していく。
それに団十郎の家は木場にある。
「そうだったんですか。八代目団十郎……。道理で並みの男とはちがうわけでした」
信じられぬ気持だった。この一ヶ月こられなかったのは舞台のせいだったのである。
「だまっていてわるかった。だが、隠してたんじゃあないんだ。嘘もいってないつもりだよ」
「信じてます。新さんが嘘なんかいうはずはないと」
虚勢でいったのではなかった。
「よかったら、これから付き合ってもらいたい」
どういう返事をしようかとまよったとき、縁側のほうで物音がした。

「誰！」
　声をあげてなおえは障子をあけた。
　人影がかすめて、勝手口から逃げていった。

四

　おまきに留守をたのんで、店をでていった。
　千鳥橋のちかくで町駕籠をひろい、
「猿若町」
　とつげた。猿若町は天保の改革で日本橋の堺町、葺屋町、さらに木挽町の芝居小屋が浅草にうつされてできた芝居町である。
　なおえは河原崎座の前で駕籠をおりた。
　団十郎、粂三郎、高麗蔵らの幟が風にひるがえって、市村座の長十郎、菊次郎、中村座の小団次、彦三郎らの幟とともに芝居景気をさかんにあおっていた。河原崎座の軒上には〈巷談柄三桝太夫〉〈伊勢音頭恋寝剣〉の絵看板がかかっている。
　木戸を入ると、折よく幕間であった。これから昼の幕があがるところだ。
　なおえは人の視線からかくれるように桟敷席の隅にすわった。
　芸者時代になじみ客につれられて団十郎の舞台を何度か見にいったことがあった。その後はずっと見ていない。

　舞台化粧をした役者の顔と素顔とではまったく別人のおもむきがある。飾り海老の一つ紋を見るまで新之助が団十郎であると気づかなかったのも仕方がなかったのだ。
　八代目団十郎は江戸歌舞伎を背負ってたつ千両役者である。とくに婦女の人気は絶大であった。たぐい稀な美貌にめぐまれ、今年二十九歳の独身で、そのうえ浮名をながしたことのない身持ちのかたさが好感を呼んだのだ。
　今も河原崎座の見物席は七割方は女である。
　幕があがって座頭団十郎の口上がはじまったとき、
「よっ、成田屋！　女たらし日本一」
　いつになく、最前列の桟敷からだみ声の野次が入った。
　これでなんとなく客席全体がざわめいた。ふだんとはちがった空気がながれた。
「いよっ、好色団十郎、待ってましたっ」
「助平団十郎！」
　おなじく最前列の左右からきたない野次がとんだ。猿若三座ではめずらしいことである。
　団十郎の口上がみだれた。
「黒江町の糸屋の女将とはいつからできた」
「どうやってたらしこんだか、舞台でやって見せろ」
　悪意にみちた野次に団十郎はたまらず絶句した。
　なおえもとつぜん自分のことが野次にのぼって、息もとまりそうなほどの衝撃をうけた。

身のおきどころがないおもいだ。
舞台の団十郎が困惑し、立ち往生しているさまも痛々しかった。
「誰かあいつらをだまらせろ」
「ひきずりおろせ」
桟敷席のうしろからたまりかねた客の声がとんだ。
「今いったやつ、表にでろ。相手をしてやろう」
すかさず無頼者とわかる風体(ふうてい)の男が最前列からいいかえすと、もうほかの客の声はつづかなくなった。
「団十郎、他人(ひと)の情婦(おんな)をだましてぬすみ食いした味はどうだった。一盗(とう)二婢(ひ)とはよくいったぜ、さぞうまかっただろう」
「市川宗家の面よごしっ、ひっこめ！」
「見ぐるしいぞ」
最前列に陣どった無頼者たちは矢つぎ早やな罵声(ばせい)をあびせ、団十郎の口上に水を入れた。こうなっては舞台はぶちこわしである。つづけるもならず、ひっこむもならず、団十郎は進退に窮した。初舞台いらい団十郎がはじめて見せた醜態であろう。
河原崎座の男衆(おとこしゅう)が三、四人桟敷の最前列にかけつけ、男たちをたしなめたが、なんのききめもあらわさなかった。逆におどしつけられ、中の一人は鉄拳を顔面にうけてたおれ、もう一人は払い腰で投げとばされた。さらに無頼者が左と右から舞台へかけあがった。

二人が団十郎につかみかかろうとしたところで、急遽幕(きゅうきょまく)がおりた。団十郎は幕で急場をすくわれたのだった。
なおえはとても正視していることができなかった。自分のことが声高(こわだか)にいわれたことによって、騒動の原因は自分にあるかのような負い目をいだいた。
無頼者が源右衛門の息のかかった連中であることはあきらかである。先だって、新之助となおえの情事をのぞき見して逃げていったのは、法印(ほういん)の伝兵衛(でんべえ)という源右衛門の子分であった。
舞台が混乱しているさなか、なおえは観劇をあきらめて、早々に木戸口からでてきてしまった。
家にもどると、おまきがかたい顔色で店番をしていた。
「どうかしたの」
たずねると、
「お客さんがきて、待っています」
という返事だ。留守にあがりこんで待っている客といえば、一人しかいない。いやな気分になっていった。部屋にあがると、案の定源右衛門が待っていた。
「留守にあがりこむのはよしてください」
顔を見るなりいった。
「おまえ、おれにそんな口がきけるのか」

男の言葉と態度には重大な覚悟をしていることがうかがわれた。

「大層お世話になったお方と、感謝いたしております。だから、わたしもこれまで旦那さんを大切にいたしてきました」

なおえも覚悟をきめていた。

「それはどういうことだ」

「旦那さんを見そこないました。こんな卑劣な方とはおもっておりませんでした。もうここにはおいでにならないでくださいまし」

「世話になったうえ、返すものもかえさずに、大きな顔ができたものだな。そして芝居者と乳繰(ちちく)り合っておれの顔をつぶしてくれた」

源右衛門の顔が朱(しゅ)をおびてきた。

「旦那さんからお世話になったぶんは、わたしも精いっぱいおかえししてきたつもりです。それにわたしが誰とお付き合いいたそうと旦那さんにとやかくいわれる筋合はありません」

河原崎座からの怒りがおさまらず、なおえもはげしくいった。

「おまえは体で金をかえしたつもりかもしれないが、おれはおまえを情婦(いろ)だとおもってるんだ。好き勝手な男と乳繰り合うのは許さねえ」

さすがに源右衛門の言葉はドスがきいていた。

「勝手な情婦呼ばわりはよしてください」

「だったら耳をそろえて金をかえすか、それとも団十郎ときれるか」

「お金は今すぐにはかえせません。好きな男と切れるつもりもありません」

いったせつな、源右衛門のはげしい平手打ちがとんできた。首と頰(ほお)のあたりにまともにうけて、なおえの体はたまらず横にとんだ。壁にぶつかってとまったが、頭がぼうっとなった。

「あまくみるなよ。おれは本郷院の源右衛門だ」

「……」

「団十郎だって、ゆるしちゃおかねえ。きっちりと始末をつけさせるつもりだ」

「どうしようっていうんです」

なおえはそれでも後へひかなかった。

「女を寝取ったつぐないはさせてやる。場合によっちゃあ舞台に立てなくなるかもしれねえ」

「そんなこと、世間や公儀(おかみ)がゆるすはずはありませんよ」

「本郷院の源右衛門がどんな男か見せてやろう。おまえだって、あまり勝手に羽根をのばすと、本所、深川で生きていかれなくなるぞ」

源右衛門の一語一語には無頼者の正体をむきだしにした迫力があった。

なおえは本当に新之助とともにころされるかもしれぬとおもった。

五

なおえは秋まで我慢した。新之助に会いたい気持には炉の中でもえる火のようなものがあったが、それを必死でおさえたのだ。

やはり源右衛門がこわかった。源右衛門がこれほど怒りをむきだしにするとはおもわなかった。自分のこともそうだが、もし新之助が源右衛門の子分たちに傷つけられるようなことがあってはとりかえしがつかぬからだ。

澄んだ空にさざ波を刷いたような鰯雲を今年はじめて見た日、夕暮れちかいころになって初嵐が吹いた。

（秋がきたら……）

とかねてなおえはおもっていた。

夏のあいだ中、新之助と一度も密会をしなかったばかりか、音信を交換することもひかえていた。

河原崎座の夏興行〈児雷也豪傑譚話〉〈蘆屋道満大内鑑〉も千秋楽を打ちだしていた。

その夕、新之助から飛脚に託した手紙がとどいた。

翌日、夕景がちかくなったころ、なおえはひっそりと店をでた。そして、手紙にかいてあった深川森下町へむかった。

弥勒寺橋のちかくをさがすと、料理茶屋〈万久〉が見つかった。

玄関を入って女中に名をつげると、離れ座敷へ案内された。

襖障子をあけると、床柱を背にして、なつかしい新之助の姿が見えた。

声をかけるまえに呼びかけられた。

「やあ、なおえ。なつかしいぜ」

「新さん」

「会いたかったぜ」

新之助の顔を見て、声をきいただけで胸がきゅんと痛くなった。自然に涙ぐんでいった。

「よくわすれないでいてくれましたね」

「そんなところに立ってないで、入っておいで」

まねき入れられ、手をにぎられた。

なおえはそのまま男の胸へたおれこんでいきたかったが、女中の手前ようやくこらえた。

女中がたち去ってから、激情のおもむくままに新之助へ身をなげていった。

新之助はなおえをうけとめた。

二人がかたく抱き合っているとき、後の襖があいた。

女中がもどってきたものとおもったが、それにしては振舞が乱暴だった。

にわかに新之助の体がこわばってくるのがわかった。

「やっぱり切れてなかったようだな。この前いっておいたことを二人ともわすれたのか」

ききおぼえのある源右衛門の声がしたかとおもうと、三、四人の男たちの乱入してくる

足音がひびいた。

なおえは新之助からとびのいた。

新之助の顔は血がひいて蒼白になっていた。

源右衛門は子分たちにずっと見張らせていたようだ。

「八代目、この女と茶屋にしけこむにはそれ相当の覚悟があったんだろうな」

ドスのきいた声で源右衛門はせまった。背後には三人の無頼者が立っているだけですごみをきかせている。

「源右衛門さん、なおえは団十郎が心底惚れこんだ女だ。どんな事情があろうと、自分の女にするつもりだ。おまえさんにはわたさないよ」

おもいがけなく歯切れのいい啖呵が新之助からほとばしった。舞台とおなじ張りのある声だ。

「そうかい。他人の女を堂々とぬすもうって魂胆だな」

源右衛門はあざけるようにいった。

「ぬすもうってんじゃない。正々堂々とおれの女にしようというのだ。場合によっちゃあ女房にしたっていいんだ」

つづけて新之助の声がほとばしった。

「八代目そんな啖呵をきるについちゃあ、覚悟はできてるんだろうな」

源右衛門はかさねていった。

「どんなことでもしてやろう」

「よくぞいったな、八代目」

「おれも成田屋の当主、市川団十郎だ。半端なことはしないつもりだよ」

二人の応酬をきいて、なおえは肝がちぢみあがりそうになった。

「おい、八代目さんにきっちりと挨拶をしてやれ。水もしたたる男前を台なしにしてやりな。顔を斬りきざんで簀巻きにして、大川にぶちこんでやるんだ」

源右衛門は躊躇なく子分たちに命じた。

新之助の顔が斬られるときいただけで、なおえは動転した。やつらならきっとやるだろう。顔は役者の命である。新之助だけの問題ではとどまらず、江戸歌舞伎全体を震撼させることになる。ことによったら江戸歌舞伎に致命傷をあたえることになるかもしれない。

八代目団十郎はそれほど大きな存在の役者なのだ。

なおえは恐怖のなかで思案し、決断をせまられた。

さまざまな思惑や恐れが交錯した。この瞬間が、自分の人生の最大の岐路になるだろうとおもった。

新之助が自分を女房にするといった言葉が感激的だった。その一言をきいただけで自分は十分だとおもった。

最初から新之助にそんな期待をしていたわけではなかった。まして、新之助が団十郎だとわかったときから、まったくべつの局面をはらんでいた。

「旦那さん、新さんとは今日かぎり会わないことにいたします。ですから、新さんには指一本ふれさせないでください」
なおえは源右衛門をにらみすえるようにしていった。
「なおえ、なにをいうんだ」
新之助が顔色をかえたが、決意をかえなかった。
「新さんとはきっぱりわかれます。わたしは旦那さんの情婦になりましょう。そのほうがわたしには似合いですもの」
薄笑いを浮かべてなおえはいった。哀しみはすべてのみこんでいた。

八代目団十郎一代の名作〈与話情浮名横櫛〉が初演されたのは、翌嘉永六年、中村座の正月興行であった。
木更津の浜辺で土地の顔役赤間源左衛門の妾になっていたもと深川の芸者お富を与三郎が見そめ、源左衛門の留守中に密会して見つかり、体中を斬られ、簀巻きにされて海へ投げこまれるという巷間に膾炙された例の物語である。これは団十郎が三世瀬川如皐につくらせた。
団十郎の人気はこの一作でさらに熱狂的なものとなったのである。

かげろう絵師

一

前をいく男の背恰好に見おぼえがあった。おりうはその男の後姿に視線を吸い寄せられた。

いかり肩が寒空の下にそびえている。肩を見ただけで、おりうはその男がわかった。

（勇さん……）

声をかけようとしたが、男の背中は人波にのみこまれて見えなくなった。

浅草寺の境内や参道は人人人……でごったがえしている。追いかけていこうにも、容易にちかづくことはできない。今日は年の瀬十七日、浅草寺の年の市である。境内ばかりでなく、南は駒形あたりから御蔵前通りまで、西は門跡前から下谷車坂近辺までびっしりと露店がならんで、注連飾、裏白、お酒徳利、桶類、餅台、羽子板、凧、鞠、破魔弓、暦、箒……などを山のように積みあげてあきなっている。一年を通じてもっとも浅草がにぎわう日である。

しばらく人波についてあるくと、ふたたび男の背が見えてきた。見まちがえるはずがない。何年か前まで、男女の付き合いをつづけてきた相手である。おりうはなつかしさがこみあげてきた。

前の人々をかきわけて男にちかづいていった。男は人波のうごきに身をまかせて、雷

門から仁王門にいたる長い参道をゆっくりとあるいている。露店にならぶ品々へ視線をあそばせ、年の市のにぎわいをたのしんでいるのだ。

ときたま横顔が見えた。以前はそぎおとしたようにとがっていた男の顔に今はいくらかふくらみがでてきていた。横顔にはあきらかに自信があふれていた。

男が羽子板を売る店の前で立ちどまった。

「勇さん」

声をかけると、男が見かえった。

「あっ……」

旧い名を呼ばれて意外に思ったのだろう。おりうをみとめて一層おどろいた様子だ。男は今では師匠だとか、先生と呼ばれつけているのだ。世間が彼を呼ぶ名は『歌麿』である。

「ずっと後をあるいていたのよ」

数年もの空白をまったく意識しないでおりうは言葉をつづけた。別離いらい勇助には会わなくても、歌麿の作品は錦絵でなじみだったからである。

「久しぶりだな。とても元気な様子じゃないか」

つかの間のかたさが消え、勇助も笑顔をむけた。が、その笑顔にはまだ多少の屈託がのこっていた。

「元気なのは勇さんじゃないの。このところ、だす作品だす作品みんなすごいじゃありませんか。世間がみんな勇さんを見まもってるわ。きっと勇さんの時代がくるわよ」

おりうは一気にいった。勇助にたいしていってやりたいことが胸いっぱいにつまっていたからだ。

「それほどじゃないさ、おれの時代だなんて。おりうだって頑張ってるじゃないか」

勇助がそういったとき、彼の前に清長の羽子板がならんでいるのに気づいた。勇助は清長の羽子板を見るために立ちどまったのだ。今、錦絵の世界を清長が風靡している。清長の時代がずっとつづいているのである。

「勇さん、よくやったわ。わたし、とてもうれしいの」

嘘ではなかった。本音だから、そういったとき胸のうちがあつくなった。この一、二年の歌麿の成長はめざましかった。誰もが歌麿に目を見はっていた。以前から才能のうえで若い絵師たちのなかでは群をぬいていたが、このところ天性の資質が一気に花ひらきだしていたのだ。自分も絵師だけに、おりうには歌麿の進境ぶりが手にとるようにわかるのである。

「おりうにそういわれると、なにか妙な気がするが」

勇助の顔にややかたさがもどってきた。彼のうちにこだわりがあるのは仕方がなかった。それだけの経緯が二人のあいだにあったのである。

人波におされて二人はおなじところに立っていられなかった。

「今日会えて、うれしかったわ。もう一度、勇さんと会いたいわ」

そういうと、勇助はうなずいた。

「以前の、あそこで会いましょうよ。明日の八つ」

「海老正かい。おりうはかまわないのか」

勇助の視線がそのときちらと清長の羽子板へながれた。

「かまわないわ。わたし、たのしみにしてるわよ」

笑顔をむけていった。このままわかれてしまったらいつまた会えるかわからない。おりうはこの再会を無駄にはしたくなかった。

「わかった。いくよ、かならず」

勇助はそうこたえて、人波に押しながされていった。

二

障子をとおした午後の日ざしがまぶしい。おりうは自分から先に帯をといた。はじめからそのつもりで海老正の二階座敷にやってきたのだ。

勇助もごく自然におりうを抱きにきた。

「勇さん、相かわらずね。女に先に帯をとかしちゃ駄目よ。わたしだってはずかしいんだから」

それだから自分の女を他人に奪られちゃうんだわ――、そういいたいのをおさえて言葉をのみこんだ。

「わるかったな。おまえにはいつも先手を打たれちまうんだ」

勇助はいいながらおりうの上に押しかぶさってきた。
男の舌が口内に入りこみ、手が胸にまわってきた。
おりうは男の愛撫に身をまかせつつ、勇助の肌ざわりをおもいだした。肌が男をはっきり記憶していた。男にしてはすべすべとした肌だ。そして弾力もある。触れ合うだけでも気持のいい肌をしてる。
「また会えてうれしいわ」
乳を吸われながらおりうはいった。ふたたび勇助に抱かれるよろこびをおぼえていた。
「勇さん、今付き合っている女はいるんでしょ」
といったが、男の口が乳首をはなさないので返事はきけなかった。おりうには男の返事はどうでもいいのである。勇助に女がいないはずはない。いつでも、どこでももてる男なのである。そのうえ女好きだから、勇助の身ぢかにはつねに女の影がちらついている。けれども勇助が今までいちばん夢中になった女は自分だという自信がおりうにはある。また付き合いをはじめたら、もう一度夢中にさせる自信もあった。
勇助がおりうの中に入ってきた。体がざわざわとふるえるような快感がわきおこった。以前おぼえていたものとおなじよろこびである。男はこれまでに何人も知っているが、相手によって体の感じかたが微妙にちがう。自分の体が知っている勇助をまたおもいだした。
「清長とはどうなんだ」
勇助がいきなりおりうの現在の男のことをきいてきた。が、おりうはうわの空だからききながした。今はふわふわした雲の上をあるいているような境地である。何をきかれても、こたえる気がしない。おりうはどこまでも雲の上をあるいていった。

「勇さんと付き合いたいわ」
これが現在の本音である。
「二人一緒じゃいやだぜ」
勇助がまたいった。いいながら力づよく攻めたててきた。
おりうは雲の上をはしりだした。
「清長はどうするんだ」
以前、勇助から清長へうつるあいだの一時期、同時に二人と会っていたことがある。勇助はそれを知っているのでこだわっているのだ。
「勇さんが付き合ってくれたら、清長とはしぜんに切れるわ。今だってそんなにたびたびは会っていないの」
これは本当である。が、勇助は半信半疑のようだ。
「おまえはおれを裏切って清長のもとへはしった女だ」
とうとう勇助がそれをいった。それが勇助のこだわりの根源だから、一度はいわなければ気がすまないのだ。
「ごめんなさい。ゆるして……、やっぱり勇さんがいい。仲なおりして頂戴」
一体になっている最中だから、素直に本当のことがいえる。そうでなければ、これほど

素直な言葉がでてくるわけがない。

「おりう、可愛い女になったなあ。以前はそんなじゃなかった。意地っぱりで、気のつよい女だった。おれは手を焼いたものだ」

勇助も素直に本音を口にした。

(今だって意地っぱりで、気のつよい女よ)

腹のなかでそういい、男の首に両腕を巻きつけ、つよく抱きしめていった。もう言葉を口にするのが億劫になったのだ。勇助とよりをもどすことに成功したという自信があった。また勇助は自分からはなれられなくなるだろうと思った。かつての勇助がそうであったし、清長もそうだった。二人以外におりうが体をまかせた男たちすべてがおなじだったのである。

「好きよ、勇さん。大好き……」

「おれだって、おまえが好きだ。大好きだ。もうはなさない」

勇助も夢中になって言葉をほとばしらせた。そしてはげしく腰を躍動させ、情熱的におりうを恍惚の境地へみちびいていった。

「勇さん、たくましくなったわね。本当に惚れなおしたわ。また抱いて頂戴」

陶酔からさめてから、おりうはいった。ほかの女が口にしたら歯の浮くような言葉でも、自分がいえば男を虜にすることができると信じていた。

「清長と切れなければ駄目だ」

勇助はおなじことをいった。

おりうは可笑しくなって、おもわず声をもらしそうになった。そういう言葉は、ふつう女が男にたいしていうものだからだ。

勇助が吉原を舞台にして放蕩三昧をつづけているのは以前も今もおなじであろう。世間では歌麿のことを遊蕩が骨の髄までしみこんだ絵師だとおもいこんでいる。けれどもおりうは色恋の手練手管で勇助にひけをとるようなことはなかった。今でも一枚も二枚も自分のほうが上手だとおもっている。勇助に色恋の手管をいろいろとおしえてやったのは自分だという自負があった。

年齢は十以上も勇助のほうが上だが、男女のことについてはおりうのほうが経験が豊富で世なれていた。勇助も色恋のことでは相当苦労をかさねてきたようだが、自分とくらべれば勝負にならないとおもいあがった気持でいた。

「勇さん、ずいぶんあそんでるようだけど」

おりうはそうたずねたが、かくべつ気にしているわけではなかった。

「おれは女絵をもっぱら画く絵師だから」

勇助もいいわけがましくはいわなかった。

「そうね、歌麿は女絵の絵師だわ、歌麿が芝居絵や風景画を画いたって、ちっともおもしろくないわね。女を知らなきゃあ、女絵は画けっこないわ。画けたとしてもそれは偽物よ。これからもおおいにあそぶといいわ」

「女を数多く知っても駄目なんだ」
「そうよ、いい女を知らなきゃあ駄目よ」
おりうはそれ以上はいわなかった。いわなくてもわかるはずだとおもったからだ。
「おりうの絵もよくなってきてるじゃないか」
おもわぬ言葉が勇助の口からでた。
「見ていてくれたの」
「浜田竜の絵はよく売れてる。錦絵問屋や絵草紙屋へいけばいやでも目につくからな」
「女絵師だって技倆がなければ、あそこまではいかない。ずいぶん腕をあげたものだ。たいしたものだ」
おりうはおもわずほろっとなり、胸のうちがあつくなった。色恋はおりうにとって半ばあそびのようなところがあるが、絵のこととなると本気である。真剣勝負のつもりで今までつづけてきた。男の絵師たちにひけをとらぬつもりでこれまでやってきたのである。
「ありがとう、勇さん。でもほかの絵師たちは、清長の女だから売れてるんだと陰口をいってるわ」
憤りに似た気持に駆りたてられ、触れたくないことをあえて口にした。

三

おりうが生まれた家は、浜町河岸にある浜田屋という江戸小紋の染問屋である。父の松市は自分の手で小紋の型紙を彫ったり、染料まで自分でつくるといった職人としても一流の腕をもった商人だった。松市はなにかにつけて凝り性で、そこを見こまれ多くの顧客ができ、商売は繁昌していた。人気役者や評判の高い絵師、落語家、戯作者、柳橋の売れっ妓などが店に出入りをしていて、おりうは幼ないころから世間の人気者たちを身ぢかに見てそだった。
おりうは器量がよくて、物怖じしない性格なので、店の使用人にも客にも可愛がられた。それだけにわがままで、奔放な気性が助長された。琴や三味線、踊りなどの芸ごとはいくら両親がうるさくいっても身を入れなかった。女中がついて師匠の宅まで稽古にいっても、気に入らなければ途中でかえってしまう始末で、親の手にも負えなかった。寺子屋がよいも熱心ではなかった。読み、書き、ソロバン、手習いなどは駄目だったが、ただひとつ絵を画くことが好きだった。好きこそものの上手のたとえどおり、寺子屋の師匠が舌をまくほどいきいきとしたいい絵を画いた。五つ六つ年上の子供よりも絵はうまかった。
店にきている絵師がたまたまおりうの画帳に目をとめて、
「こりゃあ、すごい。いい師匠につけば本物になるかもしれない」
とおどろいた。
それいらい、おりうは本気になった。そして当時浮世絵師たちの頂点にいた勝川春章を自分でたずね、作品を見てもらった。春章はおりうの絵に感心し、なかなか素晴らしい

天分だとほめてくれたが、

「女の絵師は大成しないから」

といって弟子入りの希望をことわった。女は嫁にゆき、夫につかえ、子供を生んで立派にそだててゆく使命があるから、絵師になることは無理だという理由である。女絵師というものがこれまで生まれていないのもそういうまっとうな理由があるからだと春章はいった。

父からも女は手に職をもつ必要はないのだと説教をされた。

おりうは春章や父のいうことを十分納得はしたが、それでもどうしても絵師になりたいのだとかさねて三度も四度も春章の家へ足をはこんだ。

とうとう春章が根負けして弟子入りをゆるしてくれたのは、おりうが十五の年だった。そのころ春章の門には春好、春英、春山、春童など多士済々の弟子がいたが、彼等からもおりうはものめずらしがられた。なかにはわがままなお嬢さんそだちの気まぐれと見る者もいたが、そのような偏見がつづいたのはわずか一年くらいのうちだった。二年もたったころには、弟子たちの誰もがおりうに一目おくようになった。おりうの天分は誰の目にもあきらかだった。

けれども絵師になろうとおもうような者には誰でもいくらかの天分はそなわっているものである。天分があるからといってすぐに絵師になれるものではなかった。その者たちのなかからえらばれたわずかな者が絵師として世間にみとめられてゆく。その過程に大きな

難儀があり、多くの者が落伍していくのだ。おりうとほぼ前後して、数人の弟子が春章の門に入ったが、三年をへて師匠から画号をもらったのはおりうのほか春海ただ一人であった。

おりうが歌麿という絵師に興味をいだいたのは、浜田竜という画号で作品を発表しはじめたころだった。

「ねえさん、小紋で着物をつくりたいんだが」

といってはじめて店にきたのが勇助との最初の出会いである。

おりうはあまり店頭には立たないのだが、そのときは偶然そこにいた。店頭には番頭の清兵衛や手代の利吉もいたが、勇助はためらいもなくおりうにちか寄ってきて、小紋の反物の品をえらびはじめた。おりうも番頭や手代に勇助をわたさず、最後まで品えらびに付き合って、こまかい縦縞の小紋で勇助の着物をつくった。この勇助が歌麿だったのだが、彼は『豊章』から改名したばかりのころで、まだほとんど世間に名を知られていなかった。

だからおりうが勇助にひかれたのは、絵師としてというよりも、一人の男としての魅力にたいしてだった。ほかの男にはまったくない彼独自の男くささを感じたためである。自分を素裸にして世の中と対峙しているような男のにおいをこの男は体から発していた。

「あんたの絵を見たよ。感じのいい絵だったな」

着物が仕立てあがった日に、勇助からいきなりそういわれたのが、おりうのこころの琴線にふれた。浜田竜という画号を名乗ってはいたものの、作品らしいものはまだ一つか二

つしか発表していなかったのだ。
それからときたま勇助は浜田屋をおとずれるようになった。そのころから勇助は遊廓や岡場所などに頻々と足をふみ入れていたようだが、彼の体から発するものに淫蕩な雰囲気はすこしもなかった。むしろ禁欲的で克己的なものさえ感じられた。
浜田屋の外で二人が会うきっかけをつくったのはおりうのほうだった。おりうは勇助にひかれ個人的なつながりをもちたくなったのだ。自分の作品を媒介にして勇助と会う機会をつくり、批評を乞うた。勇助の批評は春章門ではみたされなかったおりうのこころを満足させた。このころ春章はやや老境にいたり、時代は清長の天下へとうつっていた。清長と一歳ちがいの勇助はまだ自分の画風を確立していなかった。混迷のなかで立ち往生していた時期だった。けれどもおりうは勇助がちかいうちに混迷の時期を脱し、余人の追随をゆるさぬ画境をつくりあげるだろうと予感していた。その男と身ぢかに接することによってすべてを自分のうちに吸収したいとおもった。
そのころおりうは絵のうえではなく、女としての岐路に立っていた。日本橋室町にある武蔵屋という江戸屈指の物産問屋の若旦那がおりうの器量に惚れて縁談を申しこんできていたのだ。孝太郎という若旦那は評判のいい男で、見合いをしたときおりうも好感をもった。申し分のない玉の輿である。ところが唯一の問題は、あたりまえのことだが、武蔵屋も孝太郎もおりうを商家の内儀としてのぞんでいることだった。絵師としての将来にはなんの期待もしていなかった。今まで星の降るほどあった縁談をすべてことわってきたのは、

おりうのわがままによることだったが、今回だけは気持がだいぶかたむいた。女としてのごく普通の幸福をえらぶか、それとも女絵師への野心をとるか、選択にせまられた。
勇助との出会いがなかったら、おりうは絵筆を折って武蔵屋にとつぐ決心をしていたかもしれなかった。それは今までわがままをつづけてきて両親にたいする最後の親孝行をする機会だからだ。けれども結局絵筆を折ることはできなかった。勇助との出会いによって、絵画への意欲はいっそうやみがたいものとなり、従来以上に身をけずってはげむようになっていた。両親の説得にたいしても頑として応じなかった。母親のおもんはそれがために寝こんでしまった。松市もこのときばかりは本当におこって、おりうを一時春日部の親戚へあずけたが、そこでもおりうは美人画や芝居絵を画いていた。両親の目がとどかないのをさいわいに、絵筆三昧にすごしたばかりでなく、勇助へ手紙をだして春日部の旅籠に長逗留してもらい、濃密な恋の日々を楽しんだ。もうおりうは女絵師への道を後もどりすることはできなくなっていた。

四

外からもどったおりうは自分の部屋の仕事机の上に一通の手紙がおかれているのをみとめた。
机の上には小春日がうらうらとあたっている。勇助と浅草寺で再会してから一年ちかくがたっていた。今朝も、神田久右衛門町にある勇助の住居へでかけ、午後になってもどっ

てきたのである。

　日本橋浜町河岸

　　浜田屋内おりうどの

と達筆で書いた文字は清長のものにまぎれもなかった。

封を切るおりうの胸にかすかな動揺がおこっていた。清長とは月のうち三度くらいかならずおりうが段取りをつけて逢っていた。けれどもここ一ヶ月以上、おりうはついつい億劫さにとりまぎれて清長と会っていなかった。勇助との密会が頻繁になるにしたがい、清長との付き合いが億劫になっていた。

――最近おりうとあまり逢わなくなったので余暇をもてあましている。身の上になにかおこったか、それとも病気でもしているのかと心配もしている今日このごろである。なにか事情でもあるならば知らせてもらいたい。絵のほうの精進はぬかりなくやっているかどうかも気になっている。女が男に伍して絵師の道をすすんでいくことは大変難儀である。それだけに女は男以上の努力が必要だと思う。おりうの絵をひさしぶりに見たいので、ぜひ持ってきてもらいたい。

手紙の文面は以上のような内容である。いかにも清長のものらしい。すべてを察していながら、怒りを一言も文字にはしていない。かえっておりうへのおもいやりをしるしている。

おりうは一瞬、自責の念をおぼえた。清長への同情をもよおした。清長の心情がこの文

面どおりでないことはよくわかっていた。清長はたとえ心中で怒りくるっていたにしても、その感情をそのまま表にあらわすような人ではない。彼は自分の女がほかの男へこころをうつしてしまったことを知っているのだ。それだけに、おりうは清長の文面から彼の怒りとくるしみをくみとることができた。

ともかく返事をしたため、清長へ宛てて町内の飛脚に託した。その内容は数日後おりうが清長の仕事場をおとずれるというものである。清長の本宅は本材木町の新場にあるが、そこからさほど遠くない呉服橋のちかくに別宅をもち、そこを仕事場にしていた。そこはおりうとの関係ができてから仕事場につかいだしたものだった。おりうと会うための便宜に買ったのである。

約束した日の午ごろ、おりうは呉服橋のちかくまできた。そのとき、大きな芝居看板をかついだ男たちが何人も清長の仕事場からでてくるのに出会った。

（……？）

なんとなく胸さわぎをおぼえて、別宅の玄関へ入っていった。

まだ何人かの客が仕事場にきていた。ここの場所にはめずらしい騒々しさと活気があふれている。清長はもう何年も第一人者の流行児をつづけているので、版元たちの出入りはさかんだが、一度にわっと押しかけてくる客は今までいなかった。

「おりうかい」

清長の声がきこえたので、仕事場へ入っていった。八畳間と六畳間をぶちぬきにした部

屋である。
そこには大きな芝居看板がいくつももちこまれ、清長は鳥居派の絵師たちを指図して絵看板の製作にかかっていた。
おりうはその場に立ちつくし、しばし呆然となった。こんな仕事場の光景を今まで一度も見たことがなかった。第一、清長は今まで何度も乞われながらも芝居看板の筆はけっしてとらなかったのである。そして女絵だけを画きつづけてきた。
「三座の顔見世看板だよ」
おどろいてだまっているおりうに清長はいった。
「芝居看板を、お画きになるんですか」
「そうだ。今度の顔見世からやることになった」
清長は無表情でいった。
「でも、芝居看板をおやりになると、先生はご自分の絵を画く暇が……」
「そう、なくなっちまうかもしれない」
「まあ……」
おりうは絶句した。清長がなにをかんがえているのかわからなかった。ともかく彼が今までの方針をまげて、鳥居派のために中村座、市村座、森田座の絵看板を手がけはじめたことはたしかだった。
「芝居看板と女絵の両方は、やれない」

清長はあらためていった。
よほど重大なことが清長の身の上におこったのだろうとおりうはおもった。
芝居の看板絵や番附絵などは鳥居派のお家芸である。鳥居派の絵師しか手に染めぬことになっている。それは鳥居派の元祖清元、初代清信いらいの伝統である。芝居絵看板というものは清元と清信が創始したものであり、その伝統が現在までまもられている。
清長は鳥居派の三代目清満の高弟であった。けれども清長を有名にしたのは、看板絵や番附絵などではなく、彼がその余暇に画いていた美人画だった。美人画で名をなした清長は何年ものあいだ看板絵から遠ざかっていた。ところが清満が三年前に歿していらい、清満に後嗣ぎがいなかったために鳥居派の四代目はずっと空席になっていた。その三年間、鳥居派の弟子たちがそれぞれ三座から依頼をうけて芝居看板と番附絵を画いていた。しかしそれでうまくいっていたのではなく、不都合はたびたびあったのだが、その都度お茶をにごしていたのだ。
「よんどころなくて、師匠が今度、四代目をお継ぎになるんですよ」
清長の高弟の清重がそのときさりげなくおしえてくれた。
「とつぜんそういうことになっちまったんだ」
清長も言葉をそえた。
「大変なことになりましたね」
おりうはそういう以外の言葉を知らなかった。

三代目清満が歿したときから、清長は四代目に推されていたのだが、彼は鳥居本家と血縁がないことを理由にことわっていた。けれどもそれは便宜的にもうけた名目であった。彼の真意はすでに形式化してしまった鳥居派の家流儀に魅力を感じなくなり、圧倒的な人気を得ていた自分独自の美人画をつづけていくことにこころがかたむいていたのである。誰がかんがえても、そのほうが清長にとっての利益であった。

来月は三座の顔見世興行である。このときを機会にして、清長は鳥居派四代目をついでお家芸をまもっていくことにしたというのだ。おりうには清長の心境の変化がいかにも唐突におもえた。

「どうして四代目をお継ぎになることに……」

夕方を過ぎて、清長の弟子たちがかえっていってから、おりうはたずねた。

「時の勢いというものだろう。そうすることが自然だから、そのようにしたんだ」

いかにも清長らしいいい方だった。その答に不自然さはまったくない。けれどもその答は清長のこころを正確にいいあらわしてはいないと感じた。これは女の勘である。

清長はまだ四十路(よそじ)にとどかぬ年齢だというのに、おりうは彼の貌(かお)からはやくも老いの翳(かげ)を感じていた。清長の才能は二十代後半から花ひらき、その後十余年間全盛をつづけ、今衰退期にさしかかったのだとおもった。四代目をついでお家芸をまもっていくほうが、錦絵の第一線ではげしい勝負をつづけていくよりどれほど楽であるかしれない。鳥居派のお家芸をまもっていくことは清長の力からすれば楽々とこなせるものである。

「よくご決心がつきましたね」

さびしさを感じながらおりうはいった。

「あたらしい絵師たちがどんどん伸びてきている。これからの江戸絵はそういった者たちがきそって画いていったらいい。おりうもそのうちの一人だ」

「……」

「自分で画かなくたって、おりうの絵は見てあげられる。わたしのやらなくなったぶんはおりうにはたらいてもらいたい」

「それだけの技倆(ぎりょう)がありますかどうか」

「わたしが後押しをする。すぐには無理だろうが、何年かのうちにおりうを第一人者にしてみせよう」

清長は自分はしりぞいて、そのかわりにおりうをそだてていこうというつもりなのだった。みずから第一線の鍔迫(つばぜ)り合いに勝ちぬいていく気迫と自信をうしなったのだ。

清長をこのような気持に追いこんでいった相手は歌麿だろうとおりうは察した。歌麿の昨今の躍進ぶりは見事の一語につきた。いちばん身ぢかにいるおりうがそう感じるのだった。勇助が今年だした『絵本歌まくら』はいわゆるワ印(じるし)で、公に版行されたものではないが、単なるワ印の域を越えた〈絶品〉としての評価をかちえた。勇助はこの作品で絵師として清長を越えたというのがもっぱらの評判であった。

おりうはこの約一年間、勇助と清長とのあいだをいききしてすごしてきたので、二人の

男の勢いのちがいを手にとるように感じることができた。

「女絵のほうはおりうにまかせよう。『清長』の名前をおまえにゆずってもいいとおもっている」

清長はそうまでいったが、おりうの気持はうごかなかった。

「ありがとうございます。身にあまる光栄です」

丁重にこたえたが、清長への気持はこれを境にますます冷えていった。清長へ礼をいったのは今まで世話になってきた歳月の中で、吸収すべきものはすべて身につけたという感謝の念からである。

「これからの江戸絵には力のある絵師たちが大勢でてくるだろうが、おまえに天下をとってもらいたいんだ。それがわたしのねがいだよ」

清長はなおもかたりかけた。

自分が隠退したあと、歌麿の天下になることを清長ははばもうとしているのだ。

「そんな大それたことを……」

一応おりうは謙遜したが、できればそうありたいと野心をいだいていた。けれども清長の助力や名前をつぐことによってその目的がはたされるとはかんがえていなかった。清長との関係はもうこれまでと決心した。

清長は隠退によっておりうというもっとも大切なものをうしなうことになったのである。

「おりう、今夜はとまっていかないか」

清長は久々に、同衾をもとめてきた。

「今夜は父がわたしのかえりを待っております。父もこのごろはだいぶ老けこみまして、すっかりわたしをたよりにするようになっています。今度折りをみて、ここへうかがうつもりです」

別離をきめた以上、はっきりとものをいった。今の言葉は清長にたいする別離の挨拶であった。

清長の顔から目に見えて力がうしなわれていくのがわかった。

「そうか、元気でやってくれ。おりうならば相当のところへゆけるだろう。今後がたのしみだ。わたしも傍でみていよう」

清長はおりうのこころがうごかしがたいのを察したようだ。

「わがままを申して相すみません。先生にはずいぶんお世話になりました。これからもご壮健で」

そういったときはさすがに胸のうちが切なくなった。清長という一時代をきずいた絵師の臨終を見とどけた気がした。

五

歌麿の黄金時代がはじまった。それはかつての清長の黄金時代よりももっと力づよく、きらびやかであった。

もう彼を勇助という名で呼ぶ者は一人もいなくなった。寛政の初年から彼は洪水のように版画を発表していった。『婦女人相十品』『婦人相学十躰』『青楼十二時』『青楼七小町』『逢身八契』『風俗浮世八景』『北国五色墨』『当時全盛美人揃』『娘日時計』『高名美人六花撰』『名所腰掛八景』『歌撰恋之部』『六玉川』『錦織歌麿形新模様』……などを息つく暇もないまでつづけざまにだした。そしてそのことごとくが名作の名に恥じぬ出来ばえをしめしていたのだから驚異といってよかった。凡作はひとつもなかった。

錦絵の世界はもうほとんど歌麿の一人舞台であった。かつて世を清長風が風靡したように、今度は歌麿風が世をおおった。歌麿が美人画にえがいた難波屋おきた、高島屋おひさ、富本豊雛、小伊勢屋おちえ、扇屋花扇などの美人たちがそれぞれ江戸っ子の渇仰する人気者になった。

歌麿の黄金時代とともに浜田竜の時代がやってきた。はじめは歌麿の絵をほしがる版元たちが歌麿の歓心を買うためにおりうに絵の注文をしたのだが、元来おりうは天分にめぐまれ、その後の精進で実力を身につけていたため、その絵が着実に売れだしたのである。いったん人気がでるや、版元たちは歌麿に関係なくおりうの絵をほしがるようになった。女絵師というものめずらしさも手つだって、おりうはしだいに独自の地歩をきずいていったのだ。

「おれは公儀に目をつけられてるらしいぜ」

勇助がにがにがしくそういったのは、彼ともっとも関係のふかかった版元蔦屋重三郎が

殁した翌々年の寛政十一年のことである。

「そのようなことはとっくにご承知のくせに」

おりうはそうこたえた。今更勇助がそんなことをいうとは意外だったからである。

「うすうすと感じてはいたが、どうも相手は本気のようだ。おれを引っくくるつもりかもしれねえ」

「公儀は歌麿が目の上のたん瘤なんですよ」

「そうだな、おれほど公儀にとって可愛い気のねえ絵師はいないもの」

「そうですよ。それがわかってるなら少々加減すりゃあいいんです。あんたって人は公儀の癇にさわることばっかりやってるんですから」

「わざとやってるわけじゃねえさ。公儀があれはいかん、これもいかんとお触れをだすもんだから、よんどころなくべつの思案で工夫してやるしかないんだ」

「それが公儀の気に入らないんです。おとなしくいうことだけきいてりゃあいいものを、すぐに裏をかこうとするから」

そういってやると、勇助はにやりとわらった。彼の真骨頂がその笑いの中に秘められている。

おりうと勇助の付き合いは長い歳月をへて、二人のあいだに夫婦にちかい感情がながれていた。あんた、おまえ、の仲なのである。

幕府の浮世絵への圧迫はすでに享保の時代からはじまっていたが、松平定信が登場して

寛政の改革をはじめてから、ほとんど毎年のように浮世絵弾圧のお触れをだすようになった。勇助はお触れにたいしてあからさまな反抗はしなかったが、素直に屈従もしていなかった。錦絵は十何種もの色彩をもちいて華美であるという理由で色数が制限されたとき、勇助は雲母摺(きらずり)という手法を考案して、地味ではあるが従来以上に贅沢(ぜいたく)な錦絵をつくりだした。ついで水茶屋女や遊女の名などを麗々(れいれい)しく絵の中に摺りこんではならないというお触れがでたので、今度は名前を謎絵(なぞえ)にして、謎をとけば女の名がわかるように工夫して、かえって人気を博した。ついで大首絵の禁令がでて、勇助は得意手を封じられたが、窮余の一策として女の全身像を描き、それをならべると五枚も六枚もつづく風俗画を考案し、世間の喝采をあびたのである。公儀と勇助は近年ずっとこのようなイタチごっこをつづけていた。

「公儀の命ずるままにおとなしくしてたら、江戸絵なんぞはすぐに命を絶たれちまうんだ。おれたちは飯の食いあげだよ」

「けれどもいい加減にしておかないと、公儀を本気でおこらすことになりますよ」

「そうさな、かんがえておくとしよう」

と勇助はいったが、おりうは不安をぬぐうことはできなかった。きっとまた公儀の鼻をあかすことを勇助がしでかすような気がしてならなかった。もしそんなことにでもなったら、自分にもとばっちりがおよんでくるかもしれないとかんがえた。

「くれぐれも用心なすってくださいよ」

おりうは釘を刺しておいた。

「それより今年の番附でおりうはとうとう小結(こむすび)まであがってきたじゃないか。大変なことだぜ」

と勇助は話題をかえた。今日勇助はこれがいいたくておりうの家にやってきたのだ。

おりうはもう数年前から浜田屋をでて、人形町に洒落(しゃれ)た家を買っていた。勇助は月に何度かこの家に足をはこんでいたのである。

「あんなもの、版元連中のたわむれごとじゃありませんか」

おりうは受けながしたものの満更(まんざら)ではなかった。

「そういったって、あの番附は大体正鵠(せいこく)を射ている。そうまちがっちゃあいないぜ」

その番附は毎年版元仲間が寄り合ってつくる浮世絵師人気番附というものである。今年の行司は通油(とおりあぶら)町の鶴屋喜右衛門、馬喰(ばくろ)町二丁目の西村屋与八、芝三島町の和泉屋(いずみや)市兵衛がつとめ、東の大関歌麿は例年不動である。西の大関に細田栄之(えいし)がすわり、東西の関脇を栄松斎(えいしょうさい)長喜(ちょうき)と北尾重政が占め、さらに東の小結には三役常連の勝川春好、それに相対して西に浜田竜の名があがっていた。昨年、一昨年、一昨々年とおりうは三年間前頭筆頭に据えおかれていただけに、ひそかにこの番附を見たときから、小躍りするばかりにうれしかったのである。前頭筆頭とか小結とかいっても、今江戸には有象無象(うぞうむぞう)をふくめて千人からの浮世絵師がいるといわれているから、その地位のおもさが想像できようというものだ。清長の名はもう何年も前から番附から消えていた。

「まだ当分歌麿の大関はうごかないでしょう。あとは関脇と小結がかわるくらいのものじゃないでしょうか」
「おりうが上にあがってくるかもしれない。これは強敵だぜ」
そういって勇助は声をあげてわらった。

六

およそ十年ぶりにおりうに縁談がもちあがった。おりうの美貌と色香は三十路にいたってますます冴えて一向におとろえることを知らなかったが、さすがに縁談はもう十年くらい絶えていた。それが新春早々、七種の日に仲人をとおしてもちこまれた。
相手の名をきいて、おりうはおどろいた。
「鶴屋さんの若旦那が？」
仲人の通油町の町名主北村屋仁兵衛が、
「若旦那の亀太郎さんです」
とこたえたとき、おりうは唖然となった。
鶴屋といえば江戸最古といってもいい地本問屋で、現在でも名実ともに江戸随一といわれている版元である。絵草紙や錦絵の多くを発行し、勇助も蔦屋重三郎亡き後はおもに鶴屋を版元にしている。
「亀太郎さんがどうしてわたしに……」

亀太郎はおりうも何度か顔を合わせているが、年齢はまだ三十歳前で独身である。おりうのほうが四、五歳は年上である。亀太郎は鶴屋の後継ぎでいたって評判のいい青年だ。老舗の若旦那らしくおっとりしているが、商売上手でもとおっている。それにこの世界の者であったら、誰だって歌麿と浜田竜の関係を知っているはずである。
「おりうさんを気に入ってるからでございましょう。どうでしょうか、唐突なお話ですが、ひとつおかんがえになってみていただけませんか」
仁兵衛にいわれて、おりうはだまりこんだ。いやな縁談であれば、どんな仲人からもちこまれたものであれ、その場でただちにことわりをいうのがおりうの流儀である。おりうは仁兵衛を前にして一時思案した。心中はおどろきだけではなかったのである。
「ありがたいお話ですが、年齢などから申してわたしには不釣合な縁談だとかんがえますので、ご辞退いたしたほうがよろしいかと存じますが」
とりあえずそうこたえたものの、未練が言葉の端にのこった。
おりうにとっては幸先のいい年だった。縁談は後日あらためて仲人へことわったが、そのかわりになにか大きな幸運が舞いこんでくるのではないかとおもった。
その思惑どおり、春先からたてつづけにとび切りよい仕事の注文がきた。一つは鶴屋からの十二枚揃、もう一つは西村屋から続物、その直後、近江屋から十二枚揃だ。しかも破格の画料で、大物絵師としての待遇であるから文句はなかった。
灌仏会のちかづいた一日、おりうは十二枚揃の下絵をもって、両国薬研堀にある版元近

江屋へでかけていった。浜町河岸にきかかり、浜田屋がちかくにある千鳥橋をわたろうとしたとき、背後に妙な視線を感じた。浜田屋の者かとおもってふりかえると、おりうの知っている顔はなかった。そのかわりに正体のわからぬ男の影が橋の袂から河岸へそれた。

近江屋からのかえり道、今度は自宅ちかくで、やはり背後に人の視線を感じた。

（つけられてる）

とおもうと、体がこわばった。人形町通りは人通りのすくないところではないが、このときは俗にいう逢魔が時で、一時人通りがたえていた。長谷川町の角をまがるとき、さりげなく後を見たが、ちかくに人影はなかった。それでも人の視線が背中にからみついてくるいやな感じがなくならないのだ。

早足で家にかえりつき、女中のおまつにいうと、一度外へでてからもどってきて、夕闇の中に男の影がすうっと消えたとおびえた顔でいった。

だが、その後はなにもおこらなかった。おりうはその日の尾行者のことについていつしかわすれた。勇助へもそのことははなさなかった。

半年くらいがすぎた。江戸の町に初時雨が降り、お十夜が過ぎたころ、おりうの家のちかくにある三光稲荷の鳥居の前で、とつぜん見知らぬ男から声をかけられた。

「わたしはあなたを存じませんが」

おりうが気味わるそうにいうと、

「あんたは知らなくたって、おれは知ってるんだ。あんたは女絵師の浜田竜だろう」

乞食のような姿の男はそういっておりうにいっそうちかづいてきた。

「わたしになんの用があるんですか」

弱みを見せまいとして、きびしくいった。

「こんな姿をしちゃあいるが、おれは目明しだよ。それであんたに少々たずねたいことがある」

いわれてみると男の目には権柄ずくで人を見くだしたような光がひそんでいた。悪いことをしているわけでもないのに、おりうはややひるんだ。

「あんた、歌麿の居所を知ってるかね」

男はそうきいた。

「先生なら、弁慶橋の家にいるはずですが」

こたえてからおりうはここ十日ばかり勇助に会ってないことに気づいた。勇助は神田久右衛門町から馬喰三丁目、さらに神田弁慶橋へと転居していたのである。

「一昨日までたしかにそこにいたんだが、昨日一日目をはなした隙に姿をくらまされちまった」

にがにがしく目明しはいった。

「先生がなにをしたんですか」

「なにをしたっていっても、人をあやめたり、ぬすみをしたわけじゃねえさ。だがな、歌麿はいつかお白洲に引っぱりだされる運命になってるんだ。あんた、本当に居所を知らね

えんだな」
「家にいないんだったら、知りませんね」
たとえ知っていても口なぞ割るもんか、と肚のうちで毒づきながらこたえた。
「やつはこっちのうごきに感づいてたようだ。もし歌麿の居所がわかったら、町奉行所までおしえにきてくれ」
そういうと男は鳥居の反対方向へ消えていった。

七

おりうにとっても勇助にとっても、おもわぬ運命の変転であった。
勇助は翌年、白洲できびしい詮議をうけて、入牢三日手鎖五十日の刑をうけた。理由となったのは彼が大錦三枚続で画いた『太閤五妻洛東遊観之図』が幕府の忌諱にふれたのだった。この錦絵は太閤秀吉の醍醐の花見をえがいたもので、桜の下に幔幕を張りめぐらし、中央に秀吉がすわり、周囲に淀殿、北の政所、松の丸殿、三条殿、かな殿の五美人がはべり、そのほか小姓、腰元と石田三成が居ならんでいる酒宴の図である。とくに他意はない歴史人物画であるが、公儀はこれを将軍家斉を諷刺したものではないかという疑いをいだいたのである。もう一つは太閤にかかわる錦絵がもし流行でもして、徳川家の先祖にたいして批判がましいものが世間におこることをはばかったためだといわれた。
ともかくこの刑で勇助は三日間入牢したうえで、でてきてから五十日間町名主の屋敷にあずけられ、重い鎖を両手にはめられ大小便も食事も自分でできぬくるしい生活を余儀なくされた。

この刑がいかに過酷なものだったかは、刑期が満了し町名主の屋敷からもどされたときの勇助のすっかり様がわりした容貌から想像することができた。別人とおもえるほど憔悴しきっており、目の光をうしなっていた。足腰も萎えて、満足には立てなかった。
弁慶橋の家で勇助をむかえたとき、おりうは一瞬言葉をうしなった。呆然として立ちつくした。
(この男は立ちなおることができるだろうか)
まず勇助の再起をあやぶんだ。それほどまでにいたましい姿であった。
「さすがは公儀だ。手鎖ってのはそれほど馬鹿にしたもんじゃなかったよ」
勇助はおりうを見てそういったが、その痩せ我慢が空々しくきこえた。
その夕、したしい知人たちがかえった後、二人でこころばかりの祝いの膳をかこんだ。ところが勇助は満足に箸も口へはこべなかった。
「おりう、おれと一緒になってくれないか。所帯をもってくれ」
箸のあいだから食べ物をぼろぼろこぼしながら勇助がいった言葉におりうは愕然となった。これほど勇助らしからぬ言葉はないからだ。
「あんたらしくもない。あんたは遊蕩に一生をすごす人じゃなかったんですか」
そういいながらおりうは、勇助はもう立ちなおれないだろうと考えた。勇助の言葉を歌

魔最期の言葉とうけとった。

「な、どうだろう。おまえ、この家にうつってきちゃあくれまいか。おれの女房になってくれ」

おりうにはその言葉がむなしかった。張りと意気地をうしなった勇助が情けなく、腹だたしかった。

「わたしのような女にも親がいますから、一両日だけ相談の時間をください」

といったおりうの肚はほとんどきまっていた。勇助にはこれまでさんざん世話になってきた恩がある。おりうがこれまでの絵師になれたのも、勇助の力によるところが大きい。不本意ではあるが、このあたりで体力と気力をうしなった勇助の世話をしてやろうかという気持になった。一度は裏切ったことのある勇助をここで捨てるわけにはいかなかった。

一夜をともにすごして、翌日家の中の掃除などもきちんとすまして昼ごろ、おりうは自分の家ではなく、浜田家へもどっていった。

浜町河岸にはゆらゆらと陽炎がたちのぼっていた。陽炎の中に河岸の柳の枝がゆれているのが見えた。

千鳥橋のちかくまできたとき、おりうははっとして足をとめた。前方をいく男が北村屋仁兵衛と鶴屋喜右衛門であることがわかったからだ。しかも二人は黒羽二重の紋付小袖に白足袋、雪踏という格式ばったいでたちだ。

ある予感がかすめた。見ていると、仁兵衛と喜右衛門は案の定浜田屋へ入っていった。

どんな用事で二人が浜田屋をおとずれたか、おりうにはすぐわかった。鶴屋亀太郎はおりうをまだあきらめていなかったのである。折りも折り、今日ふたたび正式に縁組を申しこみにきたのだ。

おりうは陽炎の中にしばらく立ちつくした。頭の中をなにかがぐるぐるとはげしくまわりだした。

惑乱がおこり、たちくらみをおぼえた。脳裡にあった勇助の姿が消え、それにかわって自分の花嫁姿が浮かんだ。

（勇さんを裏切るなんて……、もうできない……）

おりうは必死にこころのうちでつぶやいた。が、そのつぶやきには力がなかった。

「おりう」

そのとき老いた父松市の姿が店頭にあらわれた。

「そんなところで、なにをしてるんだ。大事なお客さんだ。はやく中へお入り」

松市のうわずった声にうながされ、おりうは浜田屋へ入っていった。

翌々年の秋九月、勇助は誰も看取る者もないなかで衰弱死をむかえた。終世独身のままであった。

萩の間の客

前の座敷の酒がいくらかのこっていた。それでもきみ江は酔ってはいなかった。かるい足取りでえびす屋の階段をとんとんとのぼっていった。

つれの年増芸者増喜代はすこし後からついてきていた。

二階座敷から三味線の音と唄声や合の手がきこえてくる。柳橋の料理茶屋えびす屋は今がにぎわいの真っさかりだ。

廊下はつきあたりで、左右にわかれる。

（ええと、菊の間……）

一瞬ためらって、きみ江は左へいった。増喜代の声がきこえたが、かまわずいった。

いちばん奥の座敷の前まですすみ、ひとつ呼吸をしてから、

「失礼いたします」

声をかけて襖をあけた。

座敷の中は宴たけなわである。贅沢な燭台のかがやきの中で客が三人と太鼓が一人、それに仲居がくわわって、豪華な膳や台の物をならべて興じ合っているところだ。

（……）

大勢の視線をあびて、きみ江は棒立ちになった。

座敷の床の間には、萩の枝がいけてある。座敷をまちがえたのだ。入口の柱を見あげる

と、〈萩の間〉と書いた札がかけてある。

（失礼申しあげました）

とっさにいおうとしたとき、正面の若い客と視線が合った。若い客の顔がわらっている。あそびなれた感じの若旦那だ。

「姐さん、待っていたぜ。立ちん坊はいけないよ。入ってきておすわりよ、ここに」

男はそういって手まねいた。それが絶妙の呼吸である。

その瞬間、きみ江のこころもきまった。

座敷に芸者は入っていない。

「そうだ、姐さん、丁度いい」

「いいところにきてくれたな」

あと二人の客も調子を合わせてくれた。若旦那のあそび仲間だろう。

太鼓がすばやく立ちあがって、むかえにきてくれた。

「姐さん、菊の間のお客さんが……」

増喜代が追いかけてきて、袖をひいたが、もうこころはかわらなかった。

「おそくなりました。君香でございます。おはつにお目にかからせていただきます」

きみ江はにわかにはなやいだ気分になって挨拶し、座敷へ入って、手をついた。

「姐さん、伊三さんがお待ちですよ」

増喜代が小声でふたたびいったが、意に介さなかった。伊三次はなじみの客だが、ここ

ろはずむ相手ではない。金には不自由していないようだが、さえない風采の五十男だ。あそび方も粋じゃない。

「君香姐さん、ご機嫌うるわしくなによりだ。姐さんの席、ここに空けてあるんだ」

若旦那はそういい、自分のとなりに席をつくってくれた。

きみ江は初対面の最初の一目でこの男に好意をいだいた。かくべつ美男ではないが、嫌味がなくて、闊達で、素直そうなところがいい。きみ江はとなりの席におさまった。すると座敷中に歓声がわいた。きっといい客なのだろう。

こうなったら、後はなりゆきにまかすしかない。増喜代もしぶしぶ部屋に入ってきた。

「こちらのお客さまは通油町の旅籠浜田屋さんの若旦那で、豊之助さん。ごらんのとおりいい男。姐さんとはお似合いだ」

太鼓が紹介した。

「こちらはおれのあそび友達で、筆屋松月堂の久七郎、そのとなりは菓子屋虎屋の勘吉だ。そろいもそろって親不孝をきそってる仲間だよ。三人ともいまだに勘当されないのがみっけものだ」

豊之助が太鼓にかわって、あとの二人を紹介した。

「お座敷をまちがえてようございました。まちがえたばっかりに、こんな素晴らしいお客さまがたとお会いできました」

きみ江はすっかりうれしくなっていた。こんな客の座敷なら、ただでも付き合いたいく

らいだ。料理茶屋の客は大抵金満家のいやらしい男がおおく、きみ江はいつも辟易している。身代を自慢している者、人を馬鹿にしている者、威張っている者。どういうわけか、金満家にはそんな男たちがおおいのだ。

増喜代が太鼓にうながされて、三味線を手にとった。バチが自然にうごきだした。

〽素顔櫛巻前垂れだすき
　世話やかしゃんすな
　ぬしの女房といわれたい
　よけいな仕事で暇いらず……

きみ江の喉からつややかな声音がながれだした。巷ではやっている小唄の一節だ。

唄いとおすと、座敷がどっと沸いた。

興にのってもう一節つづけた。

唄いおわると、みなはすっかり馴染み気分になっていた。とても今が初会の、しかもまねかれざる座敷の雰囲気ではなくなった。

豊之助も唄い、久七郎と勘吉がかわるがわる三味線をひいた。その後をひきとって、増喜代の三味線で、きみ江は〈柳橋舞扇〉をおどって喝采をあびた。

その夜は、一刻（約二時間）ほどの遊興でおひらきとなった。

「またくるよ」

と豊之助はかえりぎわにいってくれたが、五分の期待しかかけていなかった。いくら気

が合ったといっても、座敷の付き合いはそんなものだ。

　ところがその数日後、えびす屋から置屋蓬莱（ほうらい）に差紙（さしがみ）がとどいた。客の名に〈はま田屋とよの助様〉とあって、とびあがりそうなほどうれしくなった。

「本当に呼んでくれたんですね。こんなにはやく裏をかえしてくれるなんて」

　えびす屋の萩の間で豊之助に会うなりいった。

　この日は豊之助一人だった。

「ほかの二人は遠慮したようだ」

　豊之助は微笑（わら）っていった。

「まあ、どうしてですか」

　とぼけてたずねると、豊之助はそれにはこたえず、

「ちょっと耳を貸してくれ」

といった。

　きみ江が体を寄せて顔をちかづけると、

「姐さん、好きだよ、大好きだ」

　いきなりささやかれた。

　まさか急にそんなことをいわれるとはおもわなかったので、意表をつかれた。そして後から顔を紅（あか）くした。

「若旦那のような男（ひと）を間夫（まぶ）に持ちたい。ねえ、かんがえてみて頂戴」

　相手の調子についのせられて、冗談と本音のないまざった返事をし、わがことながらその言葉の大胆さにあわてた。

「姐さんずるいよ。おれの言葉を先まわりしていっちまった。おれはもういう言葉がないじゃないか。ひとつつけくわえると、おれは間夫だって、亭主だって、どっちでもかまわないんだ。姐さん、どうする」

　男の顔は微笑っているが、眸（め）の色が本気だった。

「芸者をからかうと、罰（ばち）があたりますよ……」

　いいながらこみあげてくるものに言葉をつまらせた。あとは胸がつかえて、何もいえなくなった。

　豊之助の手がのびてきて、ひき寄せられた。きみ江はたまらず男の胸の中へたおれこんでいった。

　浜田屋といえば、以前は通油町でいちばんはやった旅籠（はたご）だ。ちかくに通旅籠（とおりはたご）町や馬喰（ばくろ）町の旅籠街があるが、ちょっと気のきいた客はわざと大路を二筋か三筋それて、浜田屋まで足をのばしたものである。

　それが主人の富之助（とみのすけ）が長く病みだしてから、しだいにそういう贔屓（ひいき）の客が減っていった。女房のお加代が今までとおなじ商売をしているにもかかわらず、年ごとに繁昌（はんじょう）に翳（かげり）が落ちてきた。女中や料理人、若い者の数も減らさず、畳、襖（ふすま）、障子も従来にかわりないようま

めに取り替え、商売に精をだしていたが、おもわしくなかった。跡継ぎの豊之助が家業に身を入れず、あそび呆けていたのも評判がよくなかった。

ところが豊之助がきみ江と所帯を持ち、代替りしてから浜田屋はしだいに昔の繁昌をとりもどしてきた。女将になったきみ江の評判がいいせいである。

縁組みしたばかりのころは、あながちそうではなく、前身をとやかくいわれたものである。ところがきみ江はその悪評をわずか半年ほどのうちにくつがえした。

芸者時代の衣装や手道具、装飾品などはことごとく簞笥や行李にしまって、木綿物しか身につけなかった。ふつうの商家の女房よりも地味で質素な身仕舞で店頭に立ち、客の応対から帳場まで取りしきり、板場にまで気をくばって、朝はやくから夜おそくまではたらきづめにはたらいた。芸者あがりと後指さされることを覚悟して嫁にきただけに、その頑張りは大変なものだった。たちまちきみ江は評判になった。

その上芸者時代に身につけた客あしらいのよさと愛嬌を気に入られ、一度きた客はそのつぎ、またつぎと浜田屋にくるようになり、顧客がふえていった。よくしたもので、こうなるときみ江の前身についていろいろいう者もいなくなってきた。座興のものはづけで、〈評判のよいもの……〉の中に〈浜田屋の女房〉と近所でいわれるくらい株があがり、それとともに浜田屋も昔の繁昌をとりかえしてきた。

縁組みするときにはいちばんきみ江をきらってさんざん邪魔をしたお加代もこのごろは、すっかりたよりにするようになった。当初のころは何かといやがらせをしていたが、最近

は何をするにも相談をもちかけてきた。自分の持物をくれたり、値のはらない装身具を買ってきてくれたりした。

子の豊市が生まれてからは、きみ江が浜田屋の女主人同然となった。きみ江自身も浜田屋を婚家というよりも、生家と錯覚をおこすくらいにとけこんでいた。

豊之助とはとてもむつまじくいっていた。けれども豊之助は当主になってからも相かわらず商売に身を入れることもなく、外出がおおかった。

「きみ江、たのむよ」

が豊之助の口癖である。

「おまえにまかせておけば大丈夫だ。きみ江がきてから浜田屋は大繁昌だ、おまえは福の神だよ」

こんなお世辞がうまく、きみ江に店をまかせて、自分は小唄、清元の稽古、句会だのと理由をもうけては家を空けていた。けれどもきみ江は客商売が性に合っているので、豊之助に不満はいわなかった。自分が浜田屋をささえているという喜びと、その日その日のいそがしさに月日がとぶように過ぎていった。

何よりも、きみ江は豊之助に惚れていたし、自分を女房にしてくれた夫に感謝をしていた。豊之助が所帯をもってくれなければ、きみ江はいまだに芸者づとめをつづけていただろう。若くて容姿のいいあいだの芸者はいいけれど、ちやほやされなくなってから年増芸者をつづけるのはよほど難儀である。それをかんがえただけでも、贅沢をいってはいられ

なかった。

「女将、あんたの亭主の女の噂をきいたよ」

難波屋平兵衛という顧客からそういわれたのは所帯をもってから三年目の秋だった。

「そうですか、そんな噂がながれてますか。あの人は以前から道楽者でしたから、噂の一つや二つあったっておかしくはないんですよ」

きみ江は強気でそういったが、内心では血が逆流するようなおもいだった。

「女将がその気なら、ほかの者がとやかくいうことはないんだが……」

平兵衛は勝手のちがった顔をした。

「それさえなければ、申し分ない人なんですけれど」

つとめて内心をさとられぬようにいった。豊之助が外で女とあそんでいることはうすうす想像していたが、他人の口からはっきりとつたえられると、気持はおだやかでなかった。芸者づとめをしていただけに、男にたいしては寛容だろうとおもわれがちだが、実際は逆である。本当は普通以上に嫉妬ぶかい性質なのだ。それをあらわにしない術をこころえているだけである。

「女将の亭主はしあわせ者だよ」

平兵衛はなかばあきれていった。

嫉妬を表にあらわさない術を、きみ江は母におそわった。母の生き方を見て、しぜんにおぼえたのだ。

きみ江の母も芸者だった。柳橋で名の売れた芸者だった。ものごころついたころから、きみ江に父はいなかった。いうところの、てなし子であった。いろいろ父についての噂をきいたが、本当なのかどうかわからなかったし、母にたしかめたこともなかった。平兵衛から豊之助の女について聞けばきけたのだが、意地を張ってたずねなかった。わかれば二人のあいだはおしまいになるとおもったからだ。

その後の一、二ヶ月のあいだはさすがに豊之助としっくりいかなかった。こだわりがどうしてもぬけなかった。豊之助と将来うまくいかなくなるのではないかという予感も生まれた。

四月下旬の午後、きみ江は女中のおむらをつれて、日本橋十軒店へ豊市の初節句の幟や武者人形などの見立てにでかけた。本当は豊之助と一緒にいく約束になっていたのだが、当日になって豊之助が他用をいいたてたので、女中とでかけることになったのだ。

うらうらとあたたかい日ざしが大路に降りそそいでいた。十軒店は本町と石町のあいだの大通りで、室町三丁目に隣接している。三月と五月の節句の前には、ここににぎやかな市がたつ。節句飾りをもとめに江戸中から人々があつまってくるのだ。

きみ江は人波にもまれながら一刻ちかくもかけてあれこれまどいながら品えらびをし、浜田屋にとどけてもらうよう依頼して帰途についた。

途中買い物に寄り道し、大伝馬町の大路に入ったとき、前方の四つ辻が騒然とし、そちらへむかって人々が駆けていくのが見えた。

「何があったんでしょう」
「喧嘩でしょうか。この騒ぎの様子じゃあ、怪我人でもでてるんじゃないでしょうか」
きみ江もおむらとともに人々が駆けていくほうへついていった。
大伝馬町一丁目と二丁目のあいだの四つ辻に野次馬が大勢たかって、さわぎたてている。
「人が馬に蹴られたらしいよ。腹をまともにやられたんで、命があぶないそうだ」
野次馬たちの言葉から察すると、通行人がたけりたった馬に運わるく腹を蹴りあげられて、瀕死の怪我を負ったようだ。
他所の者がきいたらめずらしい事件のようにおもうかもしれないが、大伝馬町あたりでは年のうちに一人や二人は馬に蹴られて、大怪我をしたり、あたりどころがわるくて死んでしまう者がいるのである。町名がしめすように、伝馬往来の町だけに、そんなことがおこるのだ。
「本当に運のわるい、気の毒な人だねえ」
といいながらきみ江も野次馬をかきわけて、人だかりの中へ入っていった。様子を見きわめたい好奇心にかりたてられたのだ。
（あ……）
大勢の人の輪のほぼ中央に、男がうずくまるようにたおれている。
瀕死の男が身にまとっている着物に見おぼえがあった。見おぼえどころか、今朝、豊之助が着て外出した銀鼠色に細縞の入ったお召しと同色同柄のものではないか。きみ江はその瞬間、背といわず体中が鳥肌立った。夢中で人々をかき分けて前へでていった。

「あ、あなたっ……！」
悲鳴のような叫びがほとばしった。
横顔しか見えなかったが、豊之助にまちがいなかった。
きみ江は見栄も外聞もなく、はしり寄っていった。

「君香姐さんに、差紙がきてますよ」
階段の下から半玉の声がきこえた。
きみ江は簾を巻きあげた窓の手摺にもたれて、神田川を往来する小舟を見るともなくながめていた。神田川は橋のむこうで大川に合流する。その橋が柳橋である。
きみ江が蓬萊にもどってきてから、ほぼ一ヶ月がたっている。浜田屋をでて芸者の暮しにもどるのに悔しさも抵抗もなかった。芸者が芸者にもどっただけのことだ。かえって住みなれた暮しへもどっていくなつかしさと気楽さがあった。
もどってみると、ここはすこしも以前とかわっていなかった。窓の外の景色もおなじならば、住んでいる人間たちも四年前とかわっていない。今きみ江がいる部屋も前とおなじである。
浜田屋でくらした歳月がうたかたの夢のようだ。四年間におこった出来事がまるで自分の身の上のことではないような気がした。

豊之助が不慮の事故で急死してから、きみ江の環境が一変した。商売は相かわらず繁昌をつづけたが、浜田屋でのきみ江の立場が日に日に息ぐるしいものになっていった。

義父の富之助は相かわらず、ずっと寝たきりである。きみ江が切りまわしていた商売にお加代がなんだかんだとクチバシを入れるようになった。そして半年後に、豊之助の姉のおしずが出もどってきた。お加代が浜田屋をおしずにやらせたがっていることはあきらかだった。

頑張って意地をとおせばそのまままきみ江が浜田屋をやっていくこともできたのだが、女所帯の中で角つき合わせて生きていくのは鬱陶しいし、自分の性に合わないので、いさぎよく身をひいたのだ。豊市を浜田屋にのこし、着物類と身のまわりの手道具だけを行李と風呂敷につつんで蓬萊へもどってきた。豊市はこころがのこったが、嫁はよそ者で孫は自分の家の者だというかんがえがお加代にあって、つれて家をでてくることはとてもできなかった。若いうちに夫を亡くした嫁の立ち場ほどよわいものはない。

きみ江は増喜代とともに置屋をでた。

柳橋が夕霧にかすんでいる。この時季、夕暮ちかくなると神田川に霧がわく。

柳橋の袂をとおりすぎて、えびす屋へ入っていった。

「君香姐さん、伊三次さんは菊の間ですよ」

「女将さん、またお世話になります」

えびす屋は以前から勝手知ったるところだ。客の伊三次も気のおけない昔からの馴染みである。おそらくきみ江がもどってきたのを聞いて呼んでくれたのだろう。よく四年前をわすれずに呼んでくれたものだとおもった。

階段をとんとんのぼっていった。えびす屋も四年前と様子がまったくかわっていない。上り框や神棚、階段の手摺、襖の把手まで記憶のままのたたずまいだ。以前の有様をおもいだすにしたがい、なつかしさがこみあげてきた。

廊下のつきあたりで、きみ江は立ちどまった。

（菊の間……）

左へいけば、萩の間である。萩の間からはにぎやかな遊興の声がきこえてくる。一瞬、きみ江はそれにきき入った。

おもいだされてくるものを断ちきって、廊下を反対へまがっていった。

吉原菊人形

一

煌々たる百目蠟燭の明りがまぶしい。引手茶屋千草の座敷は〈不夜城〉の言葉どおり、賑わいのさなかである。

三味の音、芸者の唄声、遊女、タイコの嬌声が座敷のなかをとびかい、銚子がさかんにはこびこまれている。酒宴は今がたけなわである。百目蠟燭の残りが三寸ほどの長さになっている。酒宴がはじまったとき、それは五寸くらいの長さであった、それで一刻（二時間）以上たったことがわかる。

（歓楽きわまって、哀情多し……）

千之助はそんな感じをもよおした。そのとき、千之助の下手にすわる和助が仲居におくられて手水へ立った。

その機会をとらえて、千之助の前にすわっている女将のおりくが視線をむけてきた。

「若旦那、どのおいらんがお気に召しましたか」

おりくは小声でそうたずねた。

座敷には客が四人、おいらんが四人いる。その中から今夜の敵娼をえらべといっているのだ。

千之助は、千草屋は初会である。というよりも、相伴以外で自分が正客となって吉原の

大門をくぐったのは今宵がはじめてだ。なじみのおいらんなどいるわけがない。初会の客には茶屋のほうが遊女を見つくろって座敷へだす。今宵は客が四人だったので、とりあえず遊女を四人座敷に呼んだのだ。

遊女四人のうち、二人が吉原最高位の呼びだし昼三で、あとの二人がただの昼三である。

千之助はどの遊女を敵娼にえらぶかまだきめていなかった。呼びだし昼三の二人はどちらも妍をきそうがごとく甲乙つけがたい美形だ。一瞬いいよどんでいると、

「若旦那のお好みはわかっていますよ」

おりくが目尻に笑いを浮かべていった。客の胸のうちはすべてわかっているといったふうな心得顔だ。もっとも、千草屋の繁昌はもっぱら女将の商売上手によるところという定評が世間にある。

「あててごらんよ」

千之助は女将をからかうようにいった。

おりくはにじるように一膝、二膝寄ってきて、

「踊りをおどったおいらん」

千之助の耳へささやいた。

「さすが、いい勘だ」

千之助はほめてやった。しいていうなら、千之助は踊りをおどった呼びだし昼三かとかんがえていた。もう一人の呼びだし昼三は踊りもちょっとはおどったが、あとは三味線を

少々ひいただけで、芸事はあまりやらなかった。どちらかというと取り澄ました感じだ。

「ではそのように、有明屋へいっておきます」

　おりくはそのようにいい、あとの三人の客の敵娼もてきぱきときめていった。今夜は千之助が正客で、あとの和助、金五郎、平吉はいずれも相伴である。

　この時代（宝暦年間）、吉原で長年つづいてきた揚屋は影をひそめ、高級な客は引手茶屋へいったんあがって遊女たちと酒宴をもよおし、それから遊女屋へあがるしきたりになっていた。

　一行は千草屋のある仲ノ町から江戸町一丁目へむかった。有明屋は江戸町一丁目にある大見世である。

　千之助は有明屋の二階の、遊女の座敷に案内されて、しばらく待った。

　金五郎はそのとなりの座敷で敵娼を待ち、和助と平吉はとば口の座敷に案内された。

　千之助は大見世の遊女の部屋というものに興味をいだいた。ここは遊女が寝おきをして、客をむかえる場所である。呼びだし昼三の部屋であるから、さすが豪儀なもので、十畳と八畳の座敷に四畳半がついている。客をむかえる十畳の座敷は床ノ間つきで、壺の置物と達磨の掛軸、碁盤、将棋盤がおいてあり、屏風が立てかけてある。となりの八畳は本間といい、遊女がふだん生活する部屋である。ここには定紋蒔絵、金具をうったかさね簞笥、用簞笥がならべておかれ、となりには立派な鏡台があり、その横に琴と三味線が立てかけられ、煙草盆、菓子折などが隅におかれている。調度といい、諸道具といい、いずれもふんだんに金のかかった華美なものばかりだ。

　そのとき、部屋の襖がしずかにひらいた。

　そして遊女が姿をあらわした。

「内所に呼ばれ、女将さんの話をきいておりいした。お待たせしいして、すいません」

　遊女は客を待たせた詫を廓言葉をまじえていった。

　その遊女の顔を見たとき、

「あ……」

　おもわず千之助は声をもらして、唖然となった。そして狼狽に一瞬おそわれた。遊女が自分の部屋をとりちがえるはずがない。

「白菊……」

　この座敷は白菊の部屋だった。

　遊女の顔にも、困惑の色が浮かんだ。

「ちがうんですね」

　白菊はすばやく状況を読みとった。

「あらあ、こまった。千草屋の女将さん勘ちがいして……敵娼をまちがえたんですよ。女将さんわたしには、若旦那をといったんですもの」

　とっさに白菊は地の言葉で取りちがえを説明した。その顔が恥じらいでうっすらと赤くなっている。

「おれは、はっきりとおいらんの名をいわなかった」
返事に窮しながら、千之助はこたえた。
千草屋の座敷で千之助の右どなりにすわったのが白菊で、左どなりにすわっていたのが若紫である。かんがえてみると、座敷で踊りをおどったのは若紫だが、白菊もおどっていた。おりくはあいにく、若紫がおどっているとき座敷をはずし、階下におりていた。おりくは丁度白菊がおどっているときもどってきたのである。勘ちがいしたおりくも商売上手に似ぬ迂闊さだが、判じ物のようなこたえ方をした千之助もわるいのだ。
「若旦那、ごめんなさい。とんだ粗相をしてしまって。これから若紫さんのお部屋へご案内いたします」
白菊は困惑と恥じらいが去ると、一時もはやく千之助を本来の敵娼のところへつれていこうとした。
が、千之助のほうはすぐにその気にはならなかった。
「おいらんが粗相をしたんじゃない。なにもおまえがあやまることはないんだよ」
「でも……」
「おれはここに居すわってもいいとおもってるんだ」
千之助はこころがわりしはじめていた。白菊ににわかに好意をいだきはじめたのである。
「でも、若旦那、若紫さんがおこのみなんでしょう」
そういわれても、千之助はすぐには返事ができない。若紫をいいと思ったことはたしか

だが、白菊が駄目だというのでもなかった。初対面で女のいい悪いをそう簡単に判断できるものではない。まして呼びだし昼三となればいずれもえらびぬかれた遊女たちだ。どちらも遜色なしだ。茶屋の女将に問われて、とりあえず敵娼に若紫をかんがえたのだ。けれどもこんな男の胸中を女に話したところで、簡単にはわかってもらえない。
「間違いもなにかの縁だろう。おれは今まで縁を大事にしてきた。これにさからうとロクなことはないんだ」
千之助は微笑っていった。
「まあ、若旦那。縁なんかのせいにして」
白菊も微笑ってこたえた。顔からようやくかたさが消えている。
その顔を見て、やはりこのままでよかったと思った。
「はじめから白菊といっておけばよかったんだ」
「そうですよ。わたしははじめから若旦那にお名指しされたいとおもってたんです。でも、そのようになれたんだからうれしい」
白菊の言葉は世辞や愛想ではなさそうだ。本音が顔にでるおいらんである。

二

千之助が家にもどってきたのは十三年ぶりのことだった。十二の年で檜屋をでて、江戸屈指といわれる材木問屋の老舗冬木屋へ奉公にあがった。小僧、手代を十三年つとめ修業

を一応おえて、このたび檜屋にかえってきたのである。

千草屋、有明屋での酒宴は千之助の帰参を祝うために、父の千太郎が番頭の和助にもよおさせたものだった。金五郎は千之助が世話になった冬木屋の番頭であり、平吉は千之助が冬木屋から檜屋につれてきた手代である。千之助は檜屋にもどれば若旦那であり、いずれは家督をついで材木問屋を切り盛りすることになるので、冬木屋の主人が好意で平吉をつけてくれたのだ。

「和助、ちょっと様子がちがうな」

店にもどった最初の印象はそれであるが、口にしたのは数日たってからのことである。

「そうお感じになりますか、若旦那」

和助はそういった。和助の上には大番頭の利兵衛がいるが、和助も檜屋ではたらきはじめてもう三十余年になる。檜屋で小僧からつとめあげてきたのだ。

「檜屋はすこしかわったな」

千之助としては少々あてがはずれたおもいである。

「表むきはかわっていませんが」

「もっと活気のある商いをしていると思ったが、そうでもなさそうだ。親父も年をとった」

檜屋は冬木屋ほどではなくても、かなり世間に知られている店だから、構えは大きく、使用人も多いし、あつかう材木も大量だが、どことなく店内に生彩が感じられなかった。

「そりゃあ、旦那さまもやがて六十路をむかえるお年ですから。けれども、商いは以前とくらべて落ちているわけじゃありません」

「だったら、十年一日か……」

和助は昔、千之助の子守りやあそび相手をしてくれた間柄だから、こころのうちをそのままぶちまけることができた。

「時世がかわりましたよ。もう材木問屋が大儲けをする世の中じゃあなくなりました。若旦那だってそれはおわかりでしょう」

「それは十年も二十年も前からいってたことじゃないか。親父が年をとったのはこの十年来だが」

千之助が冬木屋から檜屋に呼びもどされたのは、父が年をとってこころぼそさをおぼえてきたからではないかとおもった。

材木問屋がウケに入って大儲けをしていたのはもう数十年も昔のことだ。元禄のころは本当に材木問屋の全盛期だった。紀文、奈良茂などの豪商をはじめ、成金の材木問屋が輩出して黄金期をきずいた。江戸で豪商といえば、まず九分どおり材木商と相場がきまっていた。特権商人としてその前の時代を席捲した金座の頭人後藤や呉服師の茶屋四郎次郎などでさえ全盛の材木商の前では顔色がなかった。江戸城下町の建設期と幕府の放漫政策とがかさなって、材木問屋は濡れ手に粟の大儲けをし、一夜のうちに一攫千金の夢をはたした者が大勢いた。

元禄のあとにきた享保の時代は幕府の緊縮政策による景気の冷えた時期だったが、それでもまだ前時代の余熱がのこっていて、材木問屋にとってそうわるい時代ではなかった。檜屋はそのころ千太郎が開業して、大きくなっていった店である。奈良茂、紀文などはこのころ凋落していったが、やり方によっては材木商はまだうまみのある商売だった。

ところが将軍が八代吉宗から九代家重になったころから、世の中が本当にかわった。これは政治ではなく、しいていうと生活上の面からいえた。交通網が整備されて、商品の流通が全国的な規模になり、商売のあり方が従来とかわってきた。

「旦那さまは今、おまよいになっていらっしゃるんじゃないでしょうか」

和助はやや遠慮がちにいった。

「今更まよったところでどうなるもんでもないだろう。世の中がかわったことは仕方がない。材木屋は材木を売るしかないんだ」

「旦那さまはいろいろおかんがえになっていらっしゃるとおもいます」

「これからは考えて商売をする時代だよ。なにもかんがえなくても右から左へ材木が売れた時世はすぎた」

「旦那さまがおかんがえになっていらっしゃるのは、そうではありません」

和助は千之助の言葉に水をさすようにいった。

「ほかの商売に手をひろげようとしているのか」

「それもおかんがえになってはいらっしゃるでしょう。いずれ若旦那へお話があるとおもいます」

「これからも材木屋がどんどん大きくなっていく商いの仕方はあるはずだ。おれはこれからそれをやっていきたい。この世に人間がいるかぎり、材木はどうしたって入り用なんだ。檜屋の先は十分あかるい」

千之助は意気に燃えて檜屋にもどってきたのだ。かつての奈良茂、紀文は夢のまた夢だが、これからの檜屋を大いにさかんにしてゆこうという野心をいだいていた。それでこそ冬木屋で十三年ものあいだ修業をかさねてきた意味がある。檜屋にもどってからの数日間に、顧客先や材木問屋仲間などへ挨拶まわりもほとんどすませた。挨拶先の手ごたえも十分だった。

「旦那さまも若旦那にもどってもらって、こころづよくおなりでしょう。わたしども奉公人もおなじです」

「これからはおれたちの力によって店が浮きあがりもすれば、しずみもする」

「左様です。檜屋の将来は若旦那の肩にかかっております」

「ところで和助、今夜はおれに付き合わないか。先だってのおかえしだ」

千之助はにこっとわらって、急に話題をかえた。

三

「あの夜いらい、わちきは千草屋の女将さんのほうへ足をむけて寝たことはありいせん」

白菊はあまえるかのようにいい、一つ夜具の中にいる千之助の首に手をからめてきた。
「女将さんの勘ちがいがなけりゃあ、おれたちはこんな仲になっていなかったな。若紫が踊りをおどっているとき、女将さんが階下へおりていったのが幸いだった」
千之助は夜具の中で腹這いになって、長煙管で煙草をやっていた。
白菊の部屋にはしらじらと朝の光が障子をとおしてさしかけている。
「世の中、本当に不思議な縁でありいす。若旦那とこんな仲になれたなんて、わたしとても幸せ……。お座敷で一目見たときから好きになりいした」
白菊は自分の体を横向きにして、千之助をうっとりと見つめてきた。
初会からすでに二ヶ月がすぎている。そのあいだに二人はなじみをかさねた仲になっていた。白菊は座敷の酒宴の席いがいではほとんど廓言葉をつかわなくなっていた。千之助と二人のときは大抵、ふつうの娘のような話し方をする。
「おれはどうも一目惚れというのに縁がなさそうだよ。二度、三度会ってるうちによくなるんだ」
これは千之助の今までの体験だが、白菊との出会いにたいするいいわけでもあった。
「わたしはとてもわがままなおいらんです。娘のころとすこしもかわっていません。いやなことはいやだといってそだってきたのがいけないんです。だから愛嬌がないって、女将さんからも番頭さんからもいわれています」
そういって白菊は微笑った。わらいながら抱きついてきた。

「有明屋の女将はおまえを酒のみで、気のつよいおいらんだといっていたよ。そのうえ愛嬌がないとしたら、まるで商売にならないおいらんみたいじゃないか」
千之助がからかうようにいうと、
「でも本当なんです。わたしおいらんにむいてないんです」
白菊はあっさりといった。
「じゃあ器量だけで呼びだし昼三やってるようなもんじゃないか」
「器量に気だてもくわえておいてください。器量だけではおいらんをやっていくのは大変です」
「すまなかった。それをわすれていたよ。存外気だてがいいんで、おれはおいらんにぞっこん惚れちまった」
煙を吐きだしながらいったが、これは千之助の本音である。白菊の器量のよさは見てわかるとおりだが、気がつよくてわがままなりに気だてはいいのだ。千之助はそれを初会のときに見ぬいて、裏をかえした。二度めでいっそう気に入って、なじみとなったのである。
白菊は若紫とともに有明屋をささえている遊女である。が、二人のうちでお職を張っているのは一つ年上の若紫のほうだ。器量ならば、どちらかといえば白菊に分があるが、若紫にはそれにまさる愛嬌がある。人あたりがよくて、人の気をそらさない。それなりの苦労をつんでいるので、若紫は客うけがいいのである。若紫の悪口をいう客は滅多にいない。店としてはいちばんありがたい遊女なのである。

白菊のほうにはぞっこん夢中になってかよってくる客もいるが、はじめから相手にしない客もいる。それは白菊のほうが気に入らないとまるで見むきもしないからだ。気がつよいうえに美貌だから、客に敬遠される場合もある。

白菊の実家は神田で履物屋をやっていた。けれども白菊が十四歳のとき、身代がたおれ、その後父がわずらい床についてしまった。母が住みこみの女中奉公にでたが、家計をささえきれなかった。白菊はおきくという名だが、その下に弟と妹が一人ずついた。おきくは母の苦労を見かねて、十六になった春、自分からツテをたよって有明屋をたずね、女将のおつねにわたしを遊女にしてくれとたのんだのだ。おきくはそのとき縁談がもちあがっていたが、一家をささえるため破談にして、自分から廓に身売りをしたのである。おつねはおきくの器量を見て二つ返事で身柄をひきうけ、白菊の名で見世にだしたわけである。

白菊は呼びだし昼三の位にふさわしい器量と人柄、さらに芸事の素養ももっていた。おつねは白菊が有明屋の米櫃になってくれるものと期待したようだが、そこまでの期待にはこたえられなかった。白菊の持ってうまれた自意識が邪魔をした。限度以上には自分をころすことができなかった。世辞も愛想も普通なみには持ち合わせていたが、それ以上となると駄目だった。そのためにお職を若紫にゆずることになったのである。

「こんなおいらんに惚れてくれて、若旦那ありがとう。でもそのうちに愛想をつかされるかもしれない」

そういって白菊はくっくっとわらった。

そんなところが千之助にはいっそう可愛くてたまらないのだ。

白菊を可愛いとおもうのは千之助ばかりではない。白菊にぞっこん惚れている客はざっとかぞえても五指にあまるというのが廓での噂である。もっともそうでなくては、呼びだし昼三などやってはいられない。その五指のうちから、身請け話などもちらほらときこえているのだ。

「愛想をつかされるのは、おれのほうかもしれないよ。白菊にはいい話もあるときいているが」

今まで口にしたことはなかったが、千之助も身請け話が気にはなっていた。白菊の気持がどんなであれ、遊女にとって身請け話は最高のよろこびである。それが実現するかしないかは別としても、そんな話がでるだけでも遊女には名誉なことであり、ほかから羨望をいだかれるのだ。

「身請け話をくださるのは、そりゃあうれしいにきまっています。けれども十あって一つが本当というのが身請け話なんです。どれもこれも本気にしてたら、年中がっかりしてなきゃあならないですよ、若旦那」

白菊は千之助をさとすようにいった。

「そうかもしれない」

「世の中、あまいものじゃあありません。まして廓の中はなおのこと」

「そうだろう」

「わたしが身請けされるなんて、まずないことだから、若旦那心配しなくても大丈夫」
白菊はそういって、千之助の手をとり、自分の乳房へみちびいた。

四

千之助は白菊から朝餉の馳走をうけて、六つ半（七時）をまわったころ、後朝のわかれをおしんで有明屋をでた。

大門をでると、急に店のことが気になってきた。駕籠をひろって、檜屋のある日本橋材木町へはしらせた。

千太郎が老けこんで弱気になっているのは、年齢のせいばかりではなかった。千太郎は千之助が店にもどって一ヶ月ばかりたったころから寝こんで床についていた。病名ははっきりしないが、医者は身心の衰弱だといった。つまり気苦労がかさなって、それに老いがくわわった老人病である。効果的な薬や療法もかくべつにはなく、静養と食餌とによって気力の回復をはかるのがいちばんいいといわれた。

病の床にある父が千之助に話があると昨日来いっていたのだが、昨夕登楼し家を空けたためまだ話をしていなかった。そのときはたいした用件のようにはおもえなかったのでつい廓にとまってしまったのだが、朝をむかえて急に気になりだしたのである。

店にもどって、衣服を着かえて父の病間へ入っていった。脂粉の香のついたもので父の前にでるのが気がひけた。

千太郎は夜具の上にすわって、おもったよりも元気な様子だった。このところでは今日がいちばん気分がよいそうである。痩せて頬や首筋の肉がおちてはいるが、血色はさほどわるくはなかった。千之助をむかえて、わずかに顔をほころばせた。

「前からおまえと相談したいとおもってたことがあるんだ」
千太郎はゆっくりと切りだした。
「なんでしょう、お父さん」
千之助はさりげなく受けたが、商売のことだと直感した。
「そう遠くないうちに、檜屋の主人はわしからおまえにうつることになるだろうが、その前にきめておきたいことがある」
「はい」
「檜屋の身代はかなりあるから、主人がかわっても、また世の中が少々かわったにしても、びくともするもんじゃない。けれどもだからといっていつまでもだらだらと商いをつづけていくと、いつかは財産もすり減って、しまいには身代のたおれるようなときがくるかもしれない。それでわしも思案しぬいたすえに、檜屋の身代を末の世まで絶対にまもりぬく手立を講じることにきめた。これをやっておかないことには、あの世へも旅だてぬ」
「そのような手立が……」
ひくい声ながらも、千太郎の執念としずかな気迫がこもる言葉であった。
「あるんだ。これをやれば檜屋は永遠に安全だ」

そういわれて千之助は父の顔に見入った。狐にでもつかれたのではないかとおもったからだ。

「檜屋はおもいきって商いをやめ、店をたたんでしまうんだ。この先材木商売をやっていたら、儲かるときもあるだろうが、しくじるときもある」

「え……」

父が手立を口にしたとき、千之助はすぐにはその意図がつかめなかった。

「暖簾をひっこめ、看板もおろし、奉公人も手ばなして、檜屋はしもた屋になるんだ。そして檜屋は地代、店賃、利子だけで生計をたてていく。一家がやっていくだけのものは十分あがるだろう」

「檜屋がしもた屋になる……。商売をやめてしまうんですか。奉公人たちにも暇をだして」

千之助は唖然とした。とんでもないことを父はかんがえだしたものだ。が、たしかに一理はある。身代だけを後生大事にまもるのならば、これはいい方法かもしれない。身代はすこしも減らぬ。なにもしないのだから減らなくて当然だ。そのかわりふえることもない。これは商人のかんがえ方ではないのだ。

「暇をだすにあたって、奉公人には年季に応じて手当てをしてやる。あまった金で地面を買い、家作や店をつくる。そこからあがる金だけでくらしていくんだ。それでのこった金はまちがいのないところに貸して、利子をかせぐ」

千太郎は自信にみちた言葉でいった。

「身代はずっとのこるかもしれません。けれどもそれでは檜屋は商人でなくなってしまいます。材木問屋檜屋は消えてしまうではありませんか」

千之助は父のかんがえにとても同意することはできなかった。檜屋が材木問屋をやめてしまえば、元も子もない。身代だけがのこってもなにもならない。商人として大きく飛躍するために十三年間も他人の釜の飯を食って、きびしい修業にたえてきたおれはどうなるのか、と父に詰め寄りたかった。この大事な十三年が白紙にもどってしまう。

「身代をまもり、家を今後ものこしていくためだ。奈良茂や紀文が没落したのは、最後まで暖簾や看板にしがみつき、家業を捨てなかったためだよ」

「そうはおもいません。紀文、奈良茂が没落をしたのは商いのやり方にしくじったためです。時世に合った商いをしていたら、紀伊国屋も奈良屋も今までつづいていたでしょう」

千之助は反駁した。しないわけにはいかなかった。父のやり方は千之助の将来と商人としての命を断つも同然のことだ。これを断たれたら、千之助はほかに生きようがない。父の言葉は寝耳に水というより、青天の霹靂というべき衝撃だった。

「おまえの気持もわからぬことはないが、お家のためだ。わしのいったようにするのがいちばんいいことなのだ。商いはやめても金に苦労する心配はない。なに不自由なくくらしていける。今すぐに暖簾をおろして、しもた屋になるわけじゃない。これから準備をして、おいおいそのようにしていく。二、三年のうちに店を仕舞えたらいいとおもう」

千之助は絶望的なおもいにおそわれた。

父も若いころは野心に燃え、かつての奈良茂、紀文をめざして檜屋を開業し、しだいに店を大きくしていったはずである。その父は今や老いて、気力をうしない、ひたすら安全の道をさぐるのに汲々としている。千之助の気持はむなしいかぎりであった。

五

千之助の廓がよいがさかんになったのは、この後からだった。父とのいい争いは何度かおこったが、双方とも立場をゆずらなかった。あゆみ寄りは父も子もしなかった。しないかわりに、千之助は家をよく空けた。月のうちに十日も廓へかようような月日が半年ちかくつづいていた。

「白菊、深酒は体によくない。いい加減にしたほうがよくはないか」

千之助は自分のほうが自棄酒におぼれていきたいのをおさえていた。白菊の深酒はちかごろたびかさなっていた。元来酒が好きでつよい体質なのだが、このところの深酒は悩みくるしみをわすれるために飲む酒である。だから後でいちばんこたえる酒なのである。酔いにわれをわすれているときはいいが、醒めるといっそう悩みくるしみが増す。それをわすれるためにさらに深酒をかさね、悪酔いをする結果となる。

「若旦那にはわたしの気持なんかわかりいせん。間夫だなんていったって、所詮は他人ですもの」

酒くさい息を吐き、投げやりにいって、白菊はまた盃の酒をあおった。ほかの座敷でも酒を飲むようだが、千之助の座敷となるとあまえもくわわって盃をとりあげるまで飲みつづけることになる。

「おまえのそんな姿を見ると、おれの胸もはり裂けるようだ。おいらん、あまりおれを責めるようなことはよしてくれ」

千之助もたまりかねてつい白菊を責めた。

白菊が深酒をするようになったのは、身請け話が具体化しはじめてからである。今までも途切れることなく身請け話はあったのだが、今度はそれが実現しそうな形勢になってきた。

「ああ……、あと何ヶ月かしたら、わたしはこの世でいちばんいやな男に請けだされ、そいつのなぐさみものになって生きていかなくてはならなくなる。あんな男の妾にされるくらいなら、一生苦界に身をしずめてたほうがどれだけましかしれない」

捨て鉢のようにいう白菊の目には本当に涙が浮かんでいる。それを見ては千之助も生半可なぐさめの言葉などかけられなかった。

身請人は、よりによって白菊がいちばん毛嫌いしている甲州屋孫兵衛という男である。白菊は今まで孫兵衛を振りおとしてきて、ついぞ一度も肌をゆるしたことがなかった。理由をかまえて孫兵衛の座敷にでないようにしていたのである。普通ならこれだけおいらんから毛嫌いされれば客のほうでも断念して、ほかの相手を敵娼にのぞむものだが、孫兵衛

はちがっていた。何度振られて蛇蝎のようにきらわれても、いっこう懲りることなく引手茶屋をとおして白菊を名指してくるのだ。

引手茶屋でも白菊が孫兵衛をきらっていることを知っていて、多くの場合には座敷にでているとかほかの理由をもうけてことわってくれるのだが、有明屋や茶屋などでも商売をしている以上いつもことわるわけにはいかぬ。それに孫兵衛は小石川で大きな薪炭問屋をやっていて金には不自由することがない。遊女屋にとっても引手茶屋にとっても、本当はいい客なのである。たまさかにはおつねが白菊をいいなだめて、孫兵衛の座敷にだすことがある。そんなときでも白菊は座敷で急に腹痛をおこしたり、階段から二、三段落ちたりして、孫兵衛のもとめには応じなかった。そうしたあげく、孫兵衛がくりだした奥の手が身請けだった。

ふつう呼びだし昼三の身請けには七、八百両（現代でいうと約一億五千万円）という大金がかかる。それだけの金をだせば遊女屋としては利益が十分でる。人気の呼びだし昼三でも身請けに応じたほうが得なのである。孫兵衛は七百五十両で有明屋に白菊の身請けをもちかけたのである。

白菊が必死でこばんでいるので、身請け話は今のところは頓挫しているが、いつまでもその状態がつづくとはかぎらない。孫兵衛が是非にといって有明屋に再度掛け合えば、遊女屋のほうとても顧客の意志をそうないがしろにすることはできなくなる。実際、白菊はそうなるのではないかと臆測して、自棄になっているのだ。

「白菊、すまない。若旦那などと呼ばれてまわりからおだてられていても、おれにはいっこうに力がない。おれはまだ跡継ぎの身だ。店の主人にならなけりゃあ、何百両という金はうごかせないんだ」

千之助は自分を責めるようにいった。檜屋の身代がどれだけ大きいからといって、今の身分では遊女を身請けするような金がだせるはずがないのだ。

「心配かけてごめんなんし。わたしは若旦那に身請けされようなんて大それたことはおもってやしません。若旦那とわかれるのがつらいだけなんです」

「まだわかれるとはきまっちゃいない。有明屋は孫兵衛に承諾をしているわけじゃない」

「といっても孫兵衛はしつこい男だし意地にもなっているから、けっしてあきらめたりしませんよ。有明屋のほうがしまいに根負けするにきまっています」

白菊は涙声でうったえた。

「孫兵衛は一筋縄じゃあいかぬ男だからな」

千之助は白菊の涙にまた哀れをさそわれた。

「いっそ、ころしてやりたい。あの男……」

「白菊、馬鹿なことをいうんじゃない」

そういいつつ、千之助もおなじ気持にかりたてられた。材木問屋には気の荒い手代がごろごろしているし、命知らずの木場人足もたえず出入りしている。人間一人消してしまうくらいできぬことではないのだ。それだけに、ふとそんな気持にさそわれかけた。

「それができなきゃ、死んでしまいたい。もし若旦那と一緒に死ぬことができたら本望だけど」
白菊は平静さをすっかりうしなっていった。
蛸足膳と獅噛火鉢を前にして、白菊は千之助にしがみつくように上体をたおしてきた。
そのときである。千之助は体をどんとつきあげられるような衝撃におそわれた。
「ああっ……」
悲鳴のような甲高い声を白菊があげた。
となりの本間の箪笥の上からなにか落ちた音がした。三つ足の燭台の蠟燭の炎がぐらぐらと揺れている。
地震だ。それもよほど大きいやつである。上下におそってきた震動がいったんおさまったが、すぐまたおなじくらい大きいのがやってきた。
「千さん、こわい、どうしよう」
白菊はうろたえて千之助にしがみついてきた。床ノ間の掛軸の達磨がゆれている。本間にたてかけておいた三味線のたおれる音がきこえた。
「大丈夫だ、おちつけ」
千之助は白菊の肩を抱いてそういったが、自分でも今の一瞬、どうしてよいかわからなかった。いそいで外へ飛びだすべきか、それともこのままの状態でおさまるのを待つべきなのか、判断にまよった。火の用心に蠟燭を消せば座敷は暗闇になってしまうので、それ

はできなかった。
「若旦那、大丈夫？」
白菊はいっそうつよくすがってきた。
「このくらいなら、大丈夫だ。じっとしてたほうがいい。すぐにおさまるだろう」
周囲の様子をうかがいつつ千之助はいった。
けれども、地震はすぐにはおさまらなかった。震動がしばらく止むと、今度は横揺れのやつがおそってきた。それが断続的に何度もやってきた。
「火事がおこらなければいいが」
地震の被害はそう大きいものでないとおもったが、火事をおこせばべつだ。季節的にいうと江戸の正月はまだ空気が乾燥している。風にのれば大火になる危険もあった。
息をひそめるようにして、二人は肩を寄せ合って地震がおさまるのを待った。
そのうちにあわただしく階段をのぼってくる数人の足音と、
「大きな地震でしたが、なにか支障はございませんでしたでしょうか」
女将の声がきこえた。おつねが番頭や遣手、新造らをつれてあがってきたのだ。
これで白菊の緊張がようやくゆるんだ。
遠くの空から半鐘の音がきこえてきたのは、それから間もなくのことだった。
その一瞬、みなは一様に沈黙した。みなのおそれていたことがおこったのだ。半鐘の音はしだいにけたたましさを増していった。

窓の障子戸をあけると、西の空が赤く焼けている。

「大事にならなければいいが」

千之助がいうと、

「ほんとに火事はおそろしゅうございます。なにかわかりましたらお知らせにまいります」

おつねはそうこたえてひきあげていった。

「火元は日本橋のほうらしゅうございますよ」

おつねがふたたびつげにきたのは、それからもっとたってからである。半鐘の音はそのあいだずっと鳴りつづけていた。

「若旦那のお家は大丈夫でしょうか……」

白菊が心配そうにいった。

「ともかく家へもどってみる」

千之助はあわただしくかえりの身仕度をした。白菊はそれを手つだった。

六

千太郎が死んだ。

火事の夜死んだが、焼死ではなかった。圧死である。

火事の火元は日本橋元大工町だった。檜屋のある材木町とはかなり距離をへだてたところであるが、北西の風にのって火の手がのび、数寄屋町、箔屋町を焼き、さらに福島町を燃して、材木町にせまった。火消組が出動したが、火の勢がつよくて容易に鎮火することができなかった。町家は軒並燃え、焼死者や怪我人を大勢だし、人々は材木町のほうから紅葉川をわたって逃げようとした。そのため紅葉川にそった材木町の長い目抜き通りに避難の群れが殺到した。

檜屋でも利兵衛が大勢の使用人たちを指揮して千太郎をはじめ家族の者たちを避難させるべくあわただしくその態勢に入った。安全を期して千太郎を戸板に乗せて、和助のほか三人の使用人がそれをかついだのがかえって裏目にでた。白魚橋から江戸橋へまっすぐにつらぬく目抜き通りには風上から火の手に追われてきた人々や大きな荷物をつんだ大八車が密集していた。怒号、泣き声、悲鳴があがり、煙もせまってきて、凄惨な様相になっていった。その中で戸板をかついだ先頭の手代亀二郎が足をとられてたおれたために、ほかの三人も同時に前へつんのめった。戸板とともにたちまち千太郎は群衆の中に没し、後から押し寄せてくる群れや大八車の下敷きになってしまった。

和助や亀二郎をはじめ使用人たちは必死で救出にあたろうとしたが、奔流のような人々の群れや大八車の勢をとめることはできなかった。

千之助が駕籠をとばして檜屋にもどってきたとき、火の手は福島町でようやく鎮まっていた。檜屋は無事だったが、千太郎は無惨な圧死の状態で、遺骸がもどったところだった。

父の急死で千之助の運命が大きくかわった。

火事騒ぎの後始末と父の葬儀がおわると、すぐに家督相続が待っていた。千之助が檜屋の当主になった。と同時に早々に縁組がきまった。この正月で千之助は二十六歳になっていたのだから、年齢としては丁度よいころであった。冬木屋の遠縁にあたる大伝馬町の旅籠屋の娘おつゆと祝言をあげたのは家督相続の約二ヶ月後だった。この二ヶ月はばたばたとあわただしくすぎていった。千之助は自分の意志というよりは、ほとんど運命が命ずるまま相続や縁組などの問題に身をゆだねたといったほうがいい。

ところが祝言後の月日はさらにあわただしかった。千太郎は自分の死がそう遠くないうちにくることを予感していたものか、遺言状をのこしていた。この遺言状には檜屋閉店のことが明記されていた。千之助が家督をつぐに際して檜屋を閉め、しもた屋になるべきことが約束事項として書かれていた。閉店に際して暇をだす使用人にたいする手当の額まできちんときめてあった。その後にのこる金の運用についても、生前千太郎がいっていたように地面、家作、貸店舗、貸金などにつかうように指示していた。千之助は檜屋の閉店を二、三年後のこととかんがえていたが、千太郎の死によってそれがにわかにはやくなったのだ。

千之助は長年檜屋が出入りしてきた信州木曾の材木仕出問屋犬山屋をはじめ、江戸の顧客へ閉店の挨拶にまわり、木場の貯木場にある大量の材木を処分し、さらに利兵衛や和助以下の使用人たちにたいして長年の奉公を謝するとともに、遺言状どおりの手当をわたした。みんなはしんみりとして千之助の別れの言葉にきき入った。そのうち一人がしゃく

りあげだしたのをきっかけにして嗚咽する者、洟をすすりあげる者、泣きじゃくる者……、男も女も、奉公の長かった者もまだあたらしい者もみんな感涙にむせんだ。

大勢の奉公人たちがでていってしまうと、広い家の中が空家のようにがらんとし、むなしい感じになった。千之助は檜屋の財産をきちんと整理し、場所のいいところに地面を買い、家作や店舗をつくった。さらに砂村や亀戸、平井などの新田地を買いもとめ、千太郎の遺志をつぎつぎに実行にうつしていった。

「皮肉なもんでございます。大旦那さまが生きていらっしゃったら、旦那さまはあくまでも反対なさったでしょうに」

奉公人としてわずかにのこった平吉が感慨をあらわにしていった。

「遺言だから仕方がないんだ。家督をついだ以上は遺言状の約定をやぶるわけにはいかない。おれは今自分で自分の首をしめていっているんだ」

千之助は自嘲をこめた顔でこたえた。遺言状にはそれだけの拘束力があるのだ。

「それにしても旦那さまがお気の毒でございます」

平吉は納得のいかぬ顔でいった。

千之助は本意とはまったく裏腹な仕事に奔走しつづけねばならなかった。この結果、檜屋はともかく閉店にこぎつけ、しもた屋になった。そのための準備や手続をおえるのに約五ヶ月を要した。

「有明屋の使いでございます。旦那さまはおいでございましょうか」

岩松という有明屋の若い者がひっそりと檜屋におとずれてきたのは、盛夏の夕立があがった一時だった。岩松は白菊に可愛がられて、よく使いなどをしていた若い者だ。

「無沙汰をしているが、おいらんの様子はどうだね」

千之助は岩松の顔を見てなつかしさをおぼえた。なにしろ、あの火事の夜からおよそ半年のあいだ一度も吉原へでかけていなかったのだ。

「へい、旦那さま。おいらんが達者ならばなにもわたしを使いに寄こしたりはいたしません。体をわるくしてこのところずっと臥せっておりまして、しきりに旦那さまを恋しがっております」

岩松はちかくに家の者がいないのを見てとってそういった。

「おいらんのことをわすれた日は一日とてないが、ともかくこの半年、身のまわりのことに追いまくられて息をぬく暇がなかった。けれどもこれからはおれも暇になる。暇をもてあますようなことになるだろうから、今後は毎日のようにおいらんの顔を見にでかけられる。そうつたえてくれ」

千之助は岩松に返事を託した。

七

千之助がいったことは嘘でも世辞でもなかった。岩松が使いにきた翌日、千之助はかよいなれた浅草吉原へ駕籠でむかった。

「旦那さま、無理にお呼びたていたしたりして、まことに相すいません」

白菊は病をおして、座敷にあらわれた。

「白菊なつかしいぞ、おれも会いたかった。会えてうれしい」

病とはいっても化粧でかくしているので、かつての容貌におとろえの見えなかったのがうれしい。かえって細身になった白菊にはとぎ澄ました凄艶さがくわわっていた。

「旦那さまのお顔を一目見ただけで、わたしは元気になりました。もう大丈夫でございます」

そういった白菊の顔はやや上気し、本当に元気が回復した様子に見えた。

「もうおれには一生をかけてやる仕事もないし、夢もない。遺言状というたった一枚の紙切れにおれはすべてをうばわれてしまった。そのかわりに金と暇はふんだんにある。これからはあそぶしかない一生だ。白菊、おれと一緒にとことんあそんでくれ」

千之助は自棄になったようにいった。

この日をさかいにして、千之助の豪遊がはじまった。

生あるかぎり、千之助はあそびつくして死んでやろうとおもった。奈良茂、紀文の豪遊にはくらぶべくもないが、連日連夜、大勢の取り巻きをひきつれて廓へくりこみ、惣花、惣仕舞をつづけた。

そんな毎日のくらしの中で、千之助には気になることが一つだけあった。

「白菊、身請けの話はどうなっている」

孫兵衛が身請けを断念したという話はきいていなかったので、ある夜千之助はたずねてみた。

「簡単にあきらめるような男じゃありいせん。有明屋にまだやいのやいのといってきている様子ですし、わたしの実家(さと)の母親のところまでさがしていって、仕送りのことなどもちかけたようです。女将(おかあ)さんもほとほと面倒になってきたといっておりました」

白菊は憂いを顔いっぱいに浮かべていった。

「やはりそうか、そんな有様になっていたのか。それじゃあ、白菊も有明屋に居づらいだろう」

「女将さんはわたしには無理に身請けをすすめたりしませんが、みすみすお金儲けに目をつぶってくれているのですから、わたしの肩身がせまくなりいした」

白菊はよほどそれがつらいとみえて、本音をもらして千之助にうったえた。

「それじゃあ白菊、おれがおまえを身請けしようじゃないか。それならば有明屋に迷惑をかけなくてすむし、おまえだってそのほうがどれだけいいか。おれもおまえを独(ひと)りじめできて、三方まるくおさまる」

千之助は以前からかんがえていたことを口にした。

「旦那さま、そうおっしゃってくださってありがとうございます。そのお言葉をきいただけで、わたしは本望です。女将さんもきっとよろこんでくれるでしょう。けれども孫兵衛が承知はいたしませんでしょう。それに孫兵衛のほうが先客ですから、有明屋が先客を蹴

って、旦那さまの話に応じてくれますかどうか……」

白菊は悲観的にいった。

「廓にはいろいろなしきたりや、客への義理もあるだろう。けれどもあたってくだけろという言葉もある。ここは一番、やってみようじゃないか。それよりも白菊、おまえは自分の体を大事にしてくれ。このごろまた顔色がよくない」

千之助はそういってはげました。

八

九月の吉日。有明屋の遊女みんなが仲ノ町の千草屋にそろうことになった。この日、遊女たちの酒宴がもよおされるのである。惣仕舞がついた。惣仕舞とは一軒の遊女屋ぜんぶを丸一日買いきることだ。遊女たちみなに惣仕舞をつけたのは白菊である。今宵は白菊の〈身請けの宴〉がひらかれる。

遊女が身請けされるときは、朋輩(ほうばい)の遊女たちに惣仕舞をつけて茶屋にまねき、さらになじみの芸者やタイコなども呼んで別れの酒宴をもよおし、「ご機嫌よう」のはなむけの言葉におくられ、大門から駕籠にのるのがしきたりである。

秋の夕日が暮れおちたころから、若紫をはじめとして、有明屋の遊女、新造(しんぞ)、カムロたちが千草屋にあつまってきた。めでたい宴がおこなわれるのに、みなの表情がしずんでいる。それに彼女たちは普段に似合わぬ地味な装いをしていた。

「白菊はね、本当にしあわせなおいらんだったよ。こんな宴をひらいてもらって」

おつねが大座敷にあつまってきたみなへいったが、その顔にもかくしがたい哀しみと、沈鬱さがひそんでいた。まことに身請けの宴にはふさわしくない雰囲気が、菊の香のする大座敷にみちている。

それに、惣仕舞をつけた本人の白菊の姿がどこにもない。本当なら、主人役として正面にすわっているか、朋輩たちや世話になった人々と挨拶をかわしているものである。

さらに異常なのは、大座敷の床ノ間にちいさな祭壇がもうけられ、白木の位牌がおかれていることだ。位牌の脇に灯明と線香と香華があがっており、あまつさえ、その前に寝棺が横たえられていた。

このとき、身請け人として千之助は黒羽二重の紋付小袖、白足袋姿で大座敷へ入っていった。

浄寿院秋光白菊信女

千之助はみなの視線をうけて祭壇の前へすすみ、位牌にしるされている白菊の戒名にじっと目をやった。身請けされるべき当人はすでにこの世の人ではなくなっていた。線香をあげ、だまって手を合わせていると、じわじわとかなしみがこみあげてきた。

（おそくなって、すまなかった……）

千之助は棺にむかって詫びをいった。白菊の身請けにはずいぶん手間ひまがかかった。孫兵衛をあきらめさせ、有明屋に円満に身請けを承諾してもらうまでに約二ヶ月かかった。

そのあいだに白菊の病状は悪化していった。そしてようやく身請け話が成立した昨夜、白菊は千之助やおつね、朋輩などに看取られてしずかに息をひきとった。

「旦那さま……ありがとう……」

これが白菊の最後の言葉だった。

「おいらんが亡くなったことだから、身請けのことはなかったことにしてもよござんす」

約八百両の大金が無駄になるのを気づかっておつねはそういってくれたが、千之助はそれをこばんだ。

「それでは白菊が可哀そうだ。できれば、たった一日でもシャバで養生させてやりたかったが」

それが千之助の実感だった。

そして今宵、身請けの宴が催されたのだ。

「それではこれから、白菊のわかれの宴をはじめよう。白菊はまだ年季をのこしているけれど、さいわいよいお方に身請けをされて今日廓をでることになりました。みなもよろこんでやってください」

おつねが正面にすすんで、あたかも白菊が生きているようにみなへ挨拶をした。

大勢入っている大座敷の中はしいんと水を打ったようにしずまりかえった。言葉を発する者は一人もいなかった。

千之助は昨年はじめて千草屋へやってきて、敵娼をとりちがえて白菊となじむことにな

った初会の縁のことをおもいだしていた。
「白菊はいちばん好いたお人に身請けをされたんだから、こんなにしあわせなことはないんだよ。みんな今日はめでたい身請けの宴だから、かなしまないでおくれ。にぎやかにいわって、白菊を廓からおくりだしてやろうじゃないか」
千草屋のおりくがそういうと、ほうぼうからすすり泣きがもれはじめた。
すすり泣きはしだいにはげしくなり、嗚咽する者もいた。白菊の亡骸だけを身請けすることになった千之助の真情にも一同はうたれたようだ。
「白菊ねえさん可哀そう……」
白菊が日ごろ可愛がっていた新造の小菊がたまりかねて声をあげると、ほかの新造、カムロたちが声をあげて泣きだした。
(白菊、おまえはおれのあそびのいい相棒だったのに……。おれはこれからあそびまででできなくなってしまったよ)
嗚咽の声をききながら千之助は胸のうちでつぶやいた。
宴はてるころ、
「みんな、白菊の大好きだった菊の花を棺にそなえておくってやろうじゃないか」
誰いうともなく口にする者がいて、全員がそれに賛同した。
「旦那さまから」
おつねにうながされ、千之助は祭壇の香華の白い菊を一輪とって、寝棺の中の白菊の顔のそばへおいた。白菊は苦しみもなくやすらかな顔で昏っている。
つぎにおつねが立って、黄菊をそなえた。
つぎつぎに遊女や新造、芸者、タイコ、カムロたちが入れかわりたちかわり立っていって菊の花を亡骸のまわりにそなえ、やがてのうちに棺の中は白や黄の菊でみちた。
「まあ、白菊ったら、まるで菊人形のよう……」
最後に花をそなえたおりくが感きわまって、そういった。千之助にも白菊が菊人形のように見えた。
爾来、吉原では遊女の葬儀には、棺に花をそなえる習慣ができた。

解説

本書『黄菊白菊』には、十一篇の恋物語が収録されています。江戸の女たち――現在よりもさまざまな意味で厳しいしきたりに囲まれ、厳然とした階級のある社会のなかで生きていた女性たちの織りなす恋模様を描いたひとつひとつの作品には、どちらかというと可愛らしい語感を持つ「恋物語」という言葉はあまりふさわしくないかもしれませんが、それでもわたしは敢えて、この言葉を使いたいと思います。

そも「物語」とは何か？　と考えると、これはとても難しくて、軟弱なわたしは、そんなことで頭を悩ますより、面白い物語を読んだり、自分で書いたりするために時間とエネルギーを使ったほうがずっといいや――と、すぐ尻尾（しっぽ）を巻いてしまうのが常なのですが、しかし、ここではちょっといずまいを正して、そのことを考えてみたいと思います。それが、本書に拙（つたな）い解説を付けるうえで、いちばんいい方法であるような気がするからです。

「人は誰でも、一冊は小説を書くことができる」というのは、よく言われていることです。ひとりにひとつ、人生のドラマがあるからですね。でも、わたしはこれ、ちょっと少なく見積もりすぎていると思います。本当にひとりにひとつでしょうか？　胸に手を当てて考えてみれば、いやいやそんなことはないと、どなたも思うはずです。

それはなぜか？　答えはカンタン、誰でも、複数の恋をしているからです。生涯にひとつなんてことは絶対ない。小学校六年生の初恋の相手とずっと交際し続け、そのままゴールインして終生変わらぬ愛情を持ち続けましたという奇特なご夫婦がいれば、それはまあ話は別ですけれど、そういう離れ業は、なかなか凡人にはできないことでしょう。してみると、人は誰でも、自分の人生のドラマと、そのなかで経験した恋の数だけは確実に物語を持っているということになるわけで、書くことのできる小説は一冊や二冊ではない――とわたしは思うのです。

さらに言えば、その人ひとり分の小説を書くという観点で考えたとき、人生そのものを語るよりも、そのなかに点や線になって存在する「恋」を書くほうが、はるかに易しくまたドラマチックなものになるということも申せましょう。それは、言うまでもなく、恋愛はそのままドラマであるからです。どんなに短い恋だろうと、どれだけ波乱のないぬるま湯のような恋だろうと、恋はそのまま物語であるからです。ひとりの人の「人生」というのは、手間のかかる下ごしらえをして、切ったり茹（ゆ）でたり炒（いた）めたり、いろいろと技巧をこらさないと食べることのできない素材ですが、ひとりの人の「恋」というのは、そのままポンと食卓に載せるだけで即食べることができる――しかも、なかなか美味（おい）しく食べることのできる素材なのだと言ってもいいでしょう。さながら、丸かじりのできる熟れたリンゴのように。

ただしこの素材、では料理して食卓に供しようとなると、逆にとっても難しくなります。

リンゴのたとえを続けるならば、焼きリンゴをつくってみたら甘くなりすぎちゃったとか、形が崩れちゃったとかいうことですね。そして食卓でそれを食べた人たちは、口をそろえてこう言います――これなら、リンゴをそのまま食べたほうが美味しいよ、と。

「恋」を描くことの難しさは、まさにそういうことだとわたしは思います。実際、「恋愛小説は、よっぽどのことがないと読まない。だって、小説よりも面白かったり悲惨だったりドラマチックだったりするような話が、身の回りにゴロゴロしてるもの」ということを述べる人もいるくらいです。

くどいようですが繰り返すと、これはつまり、そのままで「物語」になっている素材を、料理することによって壊してしまうことが多々ある――それくらい「恋」を「物語」として小説にするのは難しいということなのです。だからこそ、「小説の究極は恋愛小説だ」と言われるのだろうと、わたしは思っています。

さて、ここでようやく話は冒頭に戻ります。わたしが本書を「恋物語」と呼びたいという理由、もうおわかりいただけたでしょう。江戸の女たちの恋づくし、十一篇の作品はすべて、生のままの「恋」を、その味や風味や彩りを損なわずに料理して「物語」に仕立てあげたものばかり。そればかりか、小説という料理の過程を通り抜けたことによって、いっそう真実に近くなった恋のまごころを、読者に訴えかけてくる作品ばかりです。

そして、そういう恋物語を生み出し盛りつけるために、本書では、原稿用紙にして三十枚から五十枚くらいという「短篇」の形式が選ばれました。生きのいい素材を与えられた

料理人は、調理の時間を短くします。さっと刃物をひらめかせ、切り口を鋭くすることで、初めて生まれる芳香があるということをよく知っているからです。

たとえば、表題作である「黄菊白菊」を例にとってみましょう。しがない女中奉公の身の上から、浅草でも一、二を争う旅籠の後添いに迎えられ、今は幸せな暮らしをしている主人公のおきくが、擦れ違う渡し船の向こうに、九年前に別れたほんのいっときの短く激しい恋の相手、高之助の姿を見かけるところから、話は始まります。放蕩がすぎて家を勘当され、それきり行方知れずになっていた高之助との一瞬の再会は、おきくを突き動かし、彼を捜し出そうという情熱を呼び起こします。小説のこの段階で、おきくは、もう恋をしているわけではない、ただ若旦那がどうしているか知りたいだけだと独白していますが、それはとんでもない間違い。おきくはもうすでに恋をしている、彼女の胸の奥の恋のスイッチは入ってしまっているのです。

やっと見つけ出した高之助との再会。現在の彼が、昔の放蕩息子の影を引きずることのない、たくましい職人になっていることを知ったときの喜び。そしてそういう男から目を離すことができず、最初は仕事を頼み、身近に彼を見て声を聞き――そうしているうちに、おきく自身も、優しく分別のある夫に申し訳なさを感じながらも、どうしようもなく、昔よりももっと切なくやるせなく高之助に恋をしていると自覚するようになります。そしてやってくる小さなアクシデントと、それに続くおきくの決心、行動。この、恋のボルテージの曲線をたどる筋書は、あたかも、弓を射る人が、弦をいっぱいいっぱいに張り詰めて

的を狙うけれど、そのまま射ったのでは反動で狙いが狂う恐れがあるからと、指を離す瞬間にほんの少しだけ力を緩める——というやり方にも似た、心憎いものです。

「恋」の素材を殺さずに描くには、このような、ひゅうと飛んで空を切り的に突き刺さる弓矢のような、鋭い切れと瞬発力がなくてはなりません。それには、短篇小説という媒体は、実にぴったりした器です。

じゃ、「恋」を語る長編小説はないの？　いえ、そんなことはありません。ただ、長編小説で恋物語を書こうとすると、それはしばしば大長編——大河小説になってしまうきらいがあります。これは、ひとつの恋の成り行き顛末を隅から隅まで書こうとすると、どうしても、その恋をする人の人生をくまなく浮彫りにしなくてはならなくなるからだと、わたしは思っています。そう、「恋」を捕まえて料理するには、短く鋭くヒュッと切り取って盛りつけるか、丸ごとひとつゴトゴトじっくり煮込んで煮込んでそのまま供するか、ふたつにひとつの方法しかないんだな、ということです。

長編と短篇、楽しみかたはそれぞれ違い、それぞれに深い味わいがあります。でも、わたしは、本書に限っては、短篇集でよかったと思う——なぜなら、この本を手に取る皆さんには、どうぞひとりで読んでくださいとお願いしたいからです。一度に一篇、短い物語なら、どれほど忙しい生活をしている方でも、ひとりきりで読む場所と時間を見つけることができるでしょう？

ひとりで読んでくださいというこのお願いは、読者の皆様のためを思ってのことなのですよ。ひとりきりなら、皆様が、本書のなかの女たちの恋物語に、ご自分の心の内側の、淡い思い出や、足を捕らえて離してくれない苦しい恋の想いや、楽しい恋の渦中の夢見心地の気分を重ねあわせて、ふと苦笑したり、涙ぐんだり、思い出し笑いをしたりしても、照れ臭いことなどないでしょうから。誰かに怪訝な顔をされたり、からかわれたりすることもないでしょうから——ね？

宮部みゆき

本書は、一九九〇年一〇月、実業之日本社より刊行された単行本を文庫化したものです。

黄菊白菊（きぎくしらぎく）

南原幹雄（なんばらみきお）

角川文庫　9324

平成六年三月二十五日　初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集部（〇三）三八一七—八四五一

営業部（〇三）三八一七—八五二一

〒一〇二　振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷　製本所——文宝堂

装幀者——杉浦康平

な 10-24　ISBN4-04-163324-9　C0193

角川文庫発刊に際して

角　川　源　義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日